ことぶらす劇場
スタグ
STAR MINE GIRL
Adult Channel
HARVEST NOVELS

Nitroplus

2000年『Phantom of Inferno』でデビュー。
『萌え』よりも『燃え』を追及するスタイルで、数多くのファンを獲得している他、個性豊かなスタッフが集う事でも有名。
代表作に『斬魔大聖デモンベイン』『CHAOS;HEAD』など。
公式サイト：http://www.nitroplus.co.jp/

HARVEST NOVELS

ニトロプラス劇場

スマガ

STAR MINE GIRL

Adult Channel

Original Story Nitroplus
Novelization 佐々宮ちるだ
Illustration こうきくう

HARVEST
NOVELS

ニトロプラス劇場
STAR MINE GIRL
Adult Channel

ALL CHARACTERS

Illustration : Santa Tsuji

※　この人物紹介の画像は、ゲーム中で使用されているものです。

ガーネット

伊都夏市を護る魔女の一人。三人のまとめ役。気が優しくすぐ他人に気を使う。家が貧しい事を気にしている。爆乳。

ミラ

伊都夏市を護る魔女の一人。もみあげの匂いで感情を読むという特技を持つ。宮本とは草野球のチームメイト。微乳。

スピカ

伊都夏市を護る魔女の一人。自分で「天才」と名乗るほどの実力。お嬢様育ちの為、少々一般常識に欠けることも。巨乳。

日下部（くさかべ） 雨火（あまほ）

伊都夏大学園新聞部部長。世界の秘密を知る為取材を行う。一度妄想を始めると桃色の世界にトリップしてしまう。美乳。

うんこマン（仮）
（オザキキヨヒコ）

ある日記憶喪失のまま伊都夏市に落ちてきた主人公。神様との交渉で「人生リベンジ」のチャンスを得た。今の名はオザキ。

沖（おき） 姫々（きき）

伊都夏大学園生徒会長にして自衛軍指揮官。絶大なカリスマを持つも、プライドも高く苦境に陥ることもしばしば。無乳。

ひのけ ゆか
樋ヶ結花
新聞部員にして宮本の幼馴染。宮本に密かな恋心を抱くつもりが周囲にはバレバレ。意外に家庭的な一面も。ツンデレ。
みやもと たけし
宮本 武
無類のオッパイ好きで、「パイオツニア」を自称。全ての女性のカップを目利きする。生徒会に所属。野球好き。
アリデッド
魔女をまとめるカルデアの指令。また同時に学園の教師で、記憶喪失のオザキの引受人でもある。生活能力が皆無に等しい。
かみさま
神様
天国（？）で主人公が出会った自称神様。テレビの奥から話しかけてくる。外見、中身共に幼稚園児で下ネタ大好き。たまに犬やこけし、アリクイ、アンナさんなどほかの神様（？）も出てくる。うんこマンに人生リベンジの機会を与えた。
きんさい じろう
襟在 二郎
ミラの祖父にして自称正義のマッドサイエンティスト。日夜謎の発明に精を出している。一郎の双子の弟。
さくさ あきみ
佐草 陽水
生徒会顧問。主人公の前に立ちはだかっては気に障る事を言い去って行く。ギターは背負っているだけで特に弾けない。
きんさい いちろう
襟在 一郎
スピカの家の執事。スピカに近づくあらゆる害虫（含男）を排除する。トラップの達人。二郎の双子の兄。

― 番組内容 ―

Skyhigh Mind and Gadget ……005

すごいぞミラちゃん豪腕投手 ……041

Sweet Milk Girl ……079

Stop the MeGalomania ……117

生徒会長を丸くするためのガイドライン ……151

Sexial Makelove Game ……191

※ CAUTION ※

本書はNitroplus制作のADV
『スマガ』をベースに独自に
発想・解釈をしたパロディ作品です
『スマガ』の公式内容を
提示するものではありません

「頼むっ！　オレを生き返らせてくれ！　オレにもう一度リベンジのチャンスを！」

記憶喪失のまま、何故か空から落ちてきた少年、うんこマン（仮）。彼には人に言えない秘密がありました。

それは、死んでしまった場合でも、神様と交渉することで再び生き返ることができるという人生リベンジ能力。

過去20年の間、巨大モンスター〝悪魔〟と戦う〝魔女〟達との戦場になってきた街――伊都夏市。

そんな場所に突如現れたうんこマン（仮）に注目が集まります。

魔女であり人生リベンジのきっかけとなった少女、スピカ。
魔女のまとめ役であり哀しい過去を持つ少女、ガーネット。
魔女達のムードメーカーであり仲間の絆を尊ぶ少女、ミラ。
伊都夏市を魔女に頼らず自らの力で守ろうとする少女、沖。
このセカイの秘密を知るために取材を続ける少女、日下部。
悪魔と命がけで戦う彼女達を救おうと願って、神様と交渉、人生リベンジを続けるうんこマン(仮)。
目指すは誰にも文句を言わせない完全無欠のハッピーエンド!

そして……。

Skyhigh Mind and Gadget

傾きかけた夕陽が伊都夏市の空を茜色に染める頃。
オレは伊都夏大学園の校庭の片隅で彼女を待っていた。
約束の時間はとうに過ぎていたが、彼女はまだ現われない。オレは眼を閉じて、じっとその時を待っている。
「——オザキ」
待ち人は不意に上空からやってきた。
彗の上に立ってオレの前に音もなく舞い降りたのは、自称天才魔女、スピカだった。
「遅くなってゴメン。アリデッドにつかまっちゃって……で、用って何？　わざわざジャージに着替えて来いだなんて」
スピカが現われてもオレは眼をつぶったまま口を真一文字に結んでいる。
「ねえ、聴こえてんのオザキ？」
「スピカよ」
おもむろにオレは口を開いた。
「オレをオザキと呼ぶな」
「……はあ？」
いきなり何を言い出すのかと、呆れ気味に顔を覗き込むスピカ。
「何考えてんの？　アンタがオザキじゃなかったら何て呼べばいいのよ」

「今日からオレを……『コーチ』と呼べ」
「コーチ？　――⁉　もしかしてそれって、アンタの本当の名前……」
「違ぁぁ――うっ！」
「ひっ⁉」
突然くわっと眼を見開き大声を出したもんだから、さすがのスピカもちょっとたじろいでいる。
「今のオレはオザキであってオザキではないっ！　コーチと呼べっ‼」
「コーチってアンタ、何するのよ」
「お前が彗にまたがって乗れるよう、今から徹底的にしごいてやる。そのためのコーチだ」
「な……！　な、何よそれ⁉」
「いいか、スピカ。彗乗りの基本は、ミラやガーネットのようなまたがるスタイルだ」
「知ってるわよ、んなこと」
彗にまたがり、足をぶら下げた状態にすることで空中でのバランスを取る――誰だって一度見たら理解できる理屈だ。
「じゃあ聞くが、なぜお前はそれをしない？」
「そ、それは――だってアタシ、天才だし。そんな、教科書どおりの乗り方なんて――」
スピカは自信ありげに胸を張るが、言葉や態度の端々（はしばし）に虚勢（きょせい）を張っているようで、どうもあやしい。そこでオレはカマを掛けてみる。

「とか何とか言って、本当はまたがって乗れないんじゃねーの？」
「――――!?」
ビンゴぉっ！　スピカの顔に一瞬動揺が走ったのを、オレは見逃さなかった。
「……ア、アホくさ。んなわけないでしょ！」
「さあて、どうだか」
「アタシ、帰る」
付き合っていられないとスピカはそそくさとオレに背を向け、彗に乗ろうとする。
「待てっ！　逃げるのか!?」
オレの声を背中で聞いたスピカの動きがピタッと止まる。
「に、逃げるも何もないわよ。こんなバカなこと、付き合ってられないだけよ」
「ほほ～う、『天才魔女』スピカが戦わずして敵前逃亡か」
わざと小莫迦（こばか）にして煽（あお）るようなオレの口ぶりに、スピカの華奢（きゃしゃ）な肩が小さく震えている。その表情は窺えないが、多分相当にムッとしているに違いない。
「ま、仕方ないか。なんだかんだ言っても『自称』天才だし」
拳をギュッと握り締めて、オレのイヤミに必死に耐えようとしているスピカ。
（よおし、もうひと押し）
そしてトドメのひと言をスピカの背中に投げかける。

「こんな基本中の基本、ホンモノの天才には余裕のヨッちゃんだと思っていたんだけど、とんだ見込み違いだったみたいだなぁ」
　これまで堪(た)えに堪えてきたスピカの堪忍袋の緒がプッツンと切れた。
　スピカはくるりと振り返ると、俯いたままつかつかと大股でオレに歩み寄る。
「ん？　どうした？」
「……やってやろうじゃない」
　低く押し殺した、いら立ちを込めた声でスピカがつぶやく。
「彗にまたがって乗るくらい、朝飯前なんだから！」
　ガッと顔を上げたスピカの両眼には、怒りと闘志の炎がメラメラと燃え上がっていた。
（よっしゃ！　わかりやすい性格で助かったぜ！）
　オレは気付かれないよう小さく拳を握ってガッツポーズを取った。
「その眼ン玉ひん剥いて、よぉ～く見てなさいよ！」
　言うや否や、スピカは彗を握り締めて颯爽(さっそう)とその上にまたがる。
「何よこんなの。ミラやガーネットにできて、アタシに出来ないワケないじゃない」
　ぶつぶつとつぶやきながら彗の上に完全にまたがる体勢を取ると、スピカは眼を閉じ、精神を集中して魔法(リネア)の力を高めてゆく。
　彗の先端で魔力(リネア)を制御するミュトスがまばゆく輝いたかと思うと、スピカの周りで小さく風が渦

巻く。
（いいぞ、その調子だ）
心の中でオレも声援を送る。
あとはまっすぐ夕焼け空に向かって飛び立つだけ——しかし。
「……ダメ」
あきらめの言葉とともに彗の先端で輝いていたミュトスの光がみるみる小さくなって、スピカの周りの旋風も消えてしまった。
「どうしたんだよ、あともうちょっとだったろ？」
「ダメ。やっぱりどうしても集中できない……」
光の消えた彗にまたがったままスピカはがっくりと肩を落とした。
魔法の力は術者のメンタルな部分によって大きく左右されるってことは、オレもさんざん見てきたからよくわかる。
「集中できないって、何か問題があるのか？」
「そ、それは……別にいいじゃない」
オレの問い掛けにスピカは答えをはぐらかす。
「と、とにかく、またがると落ち着かなくて、集中できないのよ」
「そういうもんか？」

「そういうもんなのよ！　アタシくらいの天才になると、そういうところ、繊細だし」
どうもイマイチ引っかかるが、スピカがそう言うならそういうことなんだろう。
「でも……くやしい」
スピカは唇を噛み締めてつぶやく。
「今さらまたがって乗るなんてどうでもいいって思っていたけど、いざやってみると、何も出来ないって思い知らされて……なんかすっごくくやしいのよ」
スピカは背筋をピンと伸ばし、オレをまっすぐに見据える。
「オザキ——アタシ、アンタの特訓受けてやるわ」
そのエメラルドグリーンの瞳には、再び熱い炎が燃え盛っていた。
「アンタにうまく乗せられた気がしないわけじゃないけど、とにかくこのままできないってのは、アタシ自身が納得行かないもん」
「ああ。その言葉を待っていたんだ」
オレはスピカの手を取ってまっすぐに向き合う。
「今日からオレとお前は恋人同士である前に師弟だ。特訓中は『コーチ』と呼べ！」
「はいっ、コーチ！」
「お前が彗にまたがって乗れるまで、徹底的にしごいてやる！　ついて来れるか⁉」
「はいっ、コーチっ！」

「言っておくがオレはお前相手とはいえ手加減しないぞ、いいな⁉」
「はいっ、死に物狂いで喰らい付いていきます、コーチっ！」
　夕焼けに染まる校庭の片隅で、オレとスピカは固く握手を交わした。

「それじゃあ早速、特訓だ」
　オレはスピカとともに校庭の片隅の、ある一角へとやってきた。
「えっ……？　特訓って、まさか……」
「そうだ、お前は今からアレにまたがるんだ！」
　オレが指差したその先には、小学校低学年くらいが使うサイズの鉄棒があった。
「鉄棒って……なーんか安直」
「なんか言ったか？」
「何でもありません、コーチっ！」
　やけに物分りのいい答えを返すスピカ。
「彗ではなくただの鉄棒にまたがることで、平常心を鍛えるんだ。いいな？」
「わかりました、コーチっ！」
　それにしてもスピカのやつ、オレが説得したとはいえすっかりノリノリである。
「よし、それじゃあ早速やってみろ」

鉄棒を前にして、スピカはちょっとためらう。
「だ、だいじょうぶよ……たかが鉄棒じゃない」
「どうした、オレがケツを押し上げてやろうか？」
「結構です！」
スピカは小さく深呼吸をすると、腰よりちょい高い鉄棒をギュッと握り締め、そのまま片足をあげてまたがる。
「……んっ」
その途端、スピカは眉根を寄せて不快そうな表情を見せた。
「どうした？」
「な、なんでもないわよ」
「よし、そのままの姿勢を維持してみろ」
爪先立ちをしてもぎりぎり足が地面に届かない、絶妙な高さの鉄棒にまたがった姿勢を維持するスピカ。
「ん、ふっ……」
ところがスピカの様子がどこかおかしい。何かをこらえているかのように顔を赤らめて、なぜか艶（つや）っぽい吐息が真一文字に結んだ口元からこぼれる。
「だ、だいじょうぶか？」

「んんっ……もう、ダメぇっ」
スピカは突然鉄棒から手を離して、そのままふらふらと倒れそうになっていた。
「うわっと！」
慌ててオレは駆け寄って彼女の上体を支えた。
「おい、スピカ！」
顔を真っ赤にして呼吸を乱すその姿は妙にセクシーで……って、そんなこと言っている場合じゃない。スピカを「お姫様抱っこ」の要領で抱きかかえると、慎重に鉄棒から下ろして地べたに座らせた。
「どうしたんだよスピカ？　体調でも悪いのか？」
「違うわ……」
どこかまだ虚ろな視線を宙に泳がせたままスピカは答える。
「でも、お前何かヘンだったぞ？　いきなり倒れちまうなんて」
「それは、その……」
またしてもスピカは言葉を濁す。
「もしかしてお前、鉄棒に何かトラウマとかあんの？」
子供の頃鉄棒から落ちたとか、友達が鉄棒で怪我したのを見たとか、実は鉄棒が親の仇とか。
「トラウマって言ったら、トラウマなんだけど……」

聞こえるか聞こえないかのボリュームでスピカがぼそっと何事かつぶやく。
「え?」
「な……なんでもないわよ。さあ、特訓の続きよ!」
スピカはそそくさと立ち上がり、もう一度鉄棒にまたがろうとする。
「見てなさいよ、オザキ——どっこーい!」
ミラのような気合とともに颯爽と鉄棒の上に飛び乗るスピカ。
ところが最初の勢いはどこへやら、鉄棒にまたがった途端に様子がおかしくなる。
「んっ……んんっ」
鉄棒を挟み込むように内股をきゅっと締めて、懸命に何かに耐えているように顔を真っ赤にしているスピカ。
「んんっ……はあっ」
やがて力が抜け落ちるように、彼女の上体もふらふらっと崩れ落ちた。
「うおっとっ!」
今度もオレが駆け寄って、倒れ掛かった身体を抱き留めた。
「おいスピカ、本当にだいじょうぶなのかよ!?」
「だ、だいじょうぶよ……これくらい」
その言葉とは裏腹にスピカはさっきよりフラフラで、オレが上体を支えていないとパタンとその

まま地面に倒れそうな状態だった。
「あのな、別に無理しなくてもいいんだぞ？」
さすがにこんな状況じゃ特訓も何もあったもんじゃない。ところがスピカはオレの提案を無視して鉄棒にまたがろうとする。
「何言ってんのよ、ビシビシしごくって言ってたアンタの方が先にギブアップなの？」
こうなると意地でも退かないのがスピカだ。何度も鉄棒にまたがっては、そのままの姿勢を維持しようとする。
しかし、何度やっても結果は同じだった。
鉄棒にまたがるところまでは何も問題ない。だがそこから後が続かないのだ。
「——ダ、ダメぇ……っ」
どんなに気合を入れようともどんなにオレが励まそうとも、五秒と経たないうちにスピカはヘナヘナと脱力して鉄棒から落ちてしまうのだ。
「やっぱりお前、何かオレに隠してんだろ？」
このままでは埒が明かないと思ったオレは、スピカに問いただした。
「べ、別に何も……」
「いや、絶対おかしい。どうして鉄棒にまたがるなんて、子供にもできることがお前には出来ないんだ？」

スピカは決まり悪そうに押し黙る。
「なあ、オレとお前の仲じゃないか。隠し事はなしにしようぜ？」
「オザキ……」
もしかしたら何か、スピカの心の奥にある傷のようなものが原因かもしれない。
そのことを他人に知られたくない一心で、頑なにひた隠しているのかもしれない。
もしそうだとしたら——だからこそオレは、その痛みを分かち合ってやりたい。
「ズルイよ、もう……そんなこと言われたら、黙っているわけにはいかないじゃない」
恥ずかしそうに視線をオレから逸らしたまま、スピカはポツリとつぶやく。
「話してくれるか？」
「うん。その代わり……誰にも言わないでよ？　ミラやガーネットにもよ？」
「ああ、もちろん」
「絶対、絶ぇぇぇっ対に言わないでよ？」
「約束する。こう見えても口は固いんだぜ？」
はふっとひと息をついてから、スピカは告白する。
「えと、その……つまりね、またがると……ムズムズしちゃうの」
「……はい？」
一瞬何を言っているのかわからず、マヌケな声とともに聞き返す。

「だから、ムズムズして、気になっちゃって……ダメなの」
「ムズムズって、どこが？」
「だーかーらっ！　またがった時に彗に触る部分よ！」
　スピカは顔を真っ赤にして声を荒げると、ぷんとそっぽを向いてしまう。
　合点がいかないオレは、スピカが何度も繰り返していた一連の動作を頭の中でリプレイしてみることにした。
　えーと、こうやってまたがって……彗の柄に当たるのは……。
「――あ」
　頭の中のリプレイ画像が一時停止して、彗の柄に当たる股間がズームアップになる。
「お、お前……まさか」
「……そういうことよ」
　スピカはさらに顔を真っ赤にし、オレと視線を合わせないままぶっきらぼうに答えた。
「魔女になってすぐ、初めて彗にまたがる練習をした時からずっとそうなの。彗の柄がその……股間に当たるとどうしてもムズムズしちゃって、集中できなくなっちゃう……」
「け、けど、下着も穿いているんだろ？」
「それでもダメなの。どうしても意識しちゃう」
　そりゃ、あんな細い棒にまたがるのだから、おのずと自分の体重は接している部分に掛かるもん

あぁん あぁん♥
あん、あぁぁ

だけど……男のオレにはそこまで意識する感覚が今ひとつピンと来ない。
「つーかさ、ぶっちゃけ、彗にまたがりながらオナってたってこと？」
「――!? バ、バカっ!! 何考えてんのよ、このエロオザキっ!!」
拳を振り上げてオレに殴り掛かろうとするスピカ。暴力反対！
「べ、別に、その……オナニーとか、エッチなこと考えてるんじゃないのよ？ でも、意識しないようにしないようにって考えれば考えるほど、あの感触を意識しちゃって……」
振り上げた拳を下ろして、恥ずかしそうにもじもじしながらスピカは続けた。
「初めて彗に乗った時からずっとそうだったの。アタシだけいつまで経っても彗に乗れなくて……」
「でもって、半分ヤケでアリデットのマネをして立って乗ってみたら、問題なく乗れちまった……ってトコか」
スピカはこくりとうなずく。
「立ち乗りの方が小回りは利くし、スピードだって遜色ないわ。でも、やっぱり……」
きっかけはどうであれ、それでしっかり乗れちまうんだからスピカは本当に天才なんだろう。
「はあっ。こんな基本中の基本も出来ないなんて、天才魔女の看板に偽りありね」
自嘲気味に笑ってスピカは肩をすくめた。
「でも、そこであきらめちまうようなスピカじゃねーだろ？」
「当然……！」

スピカの瞳に宿った闘志はまだ消えてはいなかった。
「言ったでしょ。こうなりゃ徹底的にコーチしてもらうって——アンタが参った！　って泣きごと言うまでとことん付き合ってもらうんだからね」
なんて憎たらしいくらい強がって見せるけれど、本当はさびしがりやで誰かが支えてやらないとすぐに倒れちまうような女の子。
だから、オレは彼女のために手を差し伸べる。
「よっしゃ、特訓再開だ！」
「はいっ、コーチ！」

その日から、オレたちの特訓が始まった。
といってもやることは最初と変わらず、鉄棒にまたがってその姿勢を出来るだけ長く維持させることだった。
彼女の熱意があればすぐにでもまたがれるようになると思っていたのだが、現実はそう甘くない。ここまで二日間の特訓では、まだ鉄棒にまたがったままの姿勢を維持するという当初の目標にも達していなかった。
「よし、今日はこれを使うぞ」
この日は鉄棒の上に体育倉庫から引っ張り出してきたセンベイ布団のようなマットを敷いて、そ

の上にスピカをまたがらせてみた。
「ちょっと、バカにしないでくれる？　こんなの余裕よ」
余裕綽々、スピカはひょいと鉄棒の上のマットに飛び乗ってみせる。
それならばと、マットを外して、再度鉄棒の上にまたがるように告げる。
「うっ……」
さっきまでの威勢のよさはどこへやら、今度はおそるおそるといった感じで鉄棒にまたがる。
「くう……」
眉根をきゅっと寄せて懸命に「ムズムズ」を耐えるスピカ。
「余計なことに気を取られるな！　集中しろ！」
「わ、わかってるわよ！」
眼を閉じてただひたすら鉄棒にまたがることに集中する。
「気にしちゃダメ、気にしちゃダメ……集中、集中……」
自分に言い聞かせるように何度もつぶやきながら平静を装おうとしているけれど、下半身はもぞもぞとうごめいている。
「んんっ……やっぱ、もう……」
「股間のことは忘れて、他のことを考えるんだ！」
ふるふると震えだしたスピカを励ますようにオレは声をかける。

「他のことを考えれば、股のことなんか気にしなくなるだろ」
「で、でも……何考えればいいのよ？」
「何でもいいんだ。例えば——今日、何を食ったかとか」
スピカはきゅっと眼を固く閉じて、懸命に頭の中から股間のことを追い出そうとしているように見える。
「ええと、今日のお昼はじいや特製のＢＬＴサンドで……サンドイッチ……はさんで……股を挟んで……んふうっ」
食べ物のことを考えていたはずなのに、いつの間にか股間に意識が戻ってしまった。
「お、落ち着け！　じゃあな、今度は勉強のこと考えろ！」
「べ、勉強……？　勉強……そうだ、帰ったら宿題やんなくちゃ……夜に勉強……夜の勉強……えっちなこと……くふんっ」
「お前は日下部(くさかべ)かぁぁ——っ⁉」
またしても股間のことを意識して身悶えるスピカに向かって、全力でツッコむ。
「だ、だって仕方ないじゃないっ！　どうしても気になっちゃうんだもの！」
「ああ、もう！」
いらついたオレは鉄棒にまたがるスピカの正面に回ると、両腕を広げて叫ぶ。
「おい、こっちを見ろっ！」

「えっ？」
「余計なことに気を取られないために、とにかくオレを見ていろ！」
「う、うん」
オレとスピカはにらめっこをするように、瞬きもせずまっすぐお互いを見つめた。
「そうだ、オレのこと以外は何にも考えるな」
「うん……オザキだけ……オザキのことだけ……」
スピカはオレをじっと見据えたまま懸命に鉄棒にまたがった姿勢を保とうとする。
「よおし、そうだ。その感じで」
「もうちょっと……もうちょっとこのままで……」
上体の大きなブレはなくなったが、それでもまだ時々バランスを崩しそうになっていた。
「ね、ねえ、オザキ。アタシの後ろに来て」
「な、何だよ？」
「もう少し……もう少しで何かつかめそうなの。オザキがすぐそばにいてくれたら、きっと……」
真剣な眼差しで訴えられたら、こっちも従うしかない。
オレはすばやくスピカの後ろに回ると、彼女に直接触れないだけの距離を置いて同じように鉄棒にまたがる。
「これでいいのか」

「う、うん。なんかすごく落ち着いてきた」
それまで傍目にわかるほどこわばっていた彼女の全身から、憑き物が落ちるみたいにすうっと力が抜けていくのがわかった。
オレは無言で彼女の背中を見守る。
一分……三分……五分……。
鉄棒と一体化したスピカはまたがった姿勢を維持していた。
「で……できた？」
スピカは振り返ると、ちょっと不安そうな顔で合否を尋ねる。
「ああ、合格だな」
「ホント？　やった——ああっ!?」
喜びのあまり鉄棒から手を離して大きく傾いたスピカの上体をオレはとっさに抱き留めた。
「あとは鉄棒じゃなくて、実際に彗に乗ってみないとな」
「ええ。早速やってみるわ！」
鉄棒から軽やかに飛び降りたスピカは、立てかけておいた愛用の彗にまたがる。
「あ、あのさ、オザキ」
彗にまたがった姿勢のままスピカがオレを呼んだ。
「出来たら、今みたいにいっしょに乗って欲しいんだけど……ダメ？」

「えっ？」
「ア、アンタ、アタシのコーチなんでしょ？　だったら、教え子の最終試験を責任持って見守る義務があるじゃない」
「でもなぁ……」
一応合格は出したけれど、それでもやっぱり「万が一」ってヤツを考えちまうワケで。
「どうすんの？　乗るの？　乗らないの？」
「……わかったわかった」
このままではいつまで経っても飛び立とうとしない雰囲気だったので、しぶしぶスピカの後ろにまたがる。
「ほら、つかまりなさいよ」
心持ちオレに腰を突き出すようにして、そこにつかまるように指示する。
「だ、だいじょうぶなんだろうな？」
つい不安になってしまったオレはスピカに尋ねる。
「オレがお前の腰につかまっていることで、その、また急にムズムズして集中出来なくなって、コントロールができなくなったりしたら……」
「そのときはアンタとアタシ、ふたりで仲良く地面へまっ逆さまね。ふふっ」
冗談めかしてスピカは言う。

でもオレの記憶の中には、初めてこのセカイに落ちてきたオレを助けようとして、いっしょに墜落したスピカのさびしげな表情が今もはっきりと残っている。
「バ、莫迦言うな！」
「オザキ？」
「お前と地面に落ちて死ぬなんて真っ平だぞ、オレは！　だから冗談でもそんなこと言うなよな！」
「ゴ、ゴメン」
今ひとつ釈然としないままスピカが謝る。当然だろう。なんでオレがこうも激昂しているのか、彼女はその理由を知るはずもない。
「でも――だいじょうぶよ」
一瞬ふたりの間に漂った微妙な空気は、スピカの微笑みでたちまち霧消した。
「アンタがいっしょなら、きっと飛べる」
「な、なんだよ。言ってくれるじゃねーか」
「ふふっ、天才魔女、スピカ様のいうことを信じなさいって――いくわよ！」
「お、おう」
オレの腕が腰にまわされたのを確認すると、スピカは静かに眼を閉じて精神を集中させる。
（お――）

オレを取り巻く空気がまったく異質なものに変わってゆくような、この感覚——間違いない。いつもオレがスピカの彗の後ろに乗せてもらう時に感じている、あの感覚だ。
「最初っからフルスロットルで行くわよ」
「え？　ちょ、ちょっとそれは——んあっ⁉」
止める間もなくオレたちを乗せた彗は一条の矢になって、伊都夏市の空目掛けて勢いよく飛び出した。
「う……のおおおお——っ⁉」
宣言どおりいきなりアクセル全開の彗から振り落とされまいとして、オレはスピカの腰にぎゅっとつかまる。
「ス、スス、スピカ——⁉」
「しゃべらないで、舌噛むわよ！」
思わず眼を閉じてスピカにしがみついているうちに、いつしか身体に感じるスピードはいつものそれになっていた。
「ほらほら！　見て、オザキ！」
スピカに言われて、ゆっくりと眼を開けたオレの足元には、広大な学園の敷地が広がっている。
どうやら彗は安定したスピードで水平飛行をしているようだ。
「やっぱりこうやっているとさ、視線が地面に近い分、景色もいつもと違って見えるわね！」

肩ごしに振り返ったスピカが上機嫌でオレに話しかける。
「ああ、本当だな」
「みんな、こんな風にこの街を見下ろしていたんだ！」
無事に彗にまたがって乗れたことがよほどうれしいのか、スピカはいつになくハイテンションだった。
「それにしても、アタシってばすごいでしょ！」
「え？」
「だって、こんな短期間で乗れるようになったのよ！　やっぱ天才よね！」
ついさっきまで股間が気になって集中できず、この世の終わりみたいな顔してがっくり肩を落としていたのは、どこの天才さんだったっけ？　——なんてツッコミのひとつも入れたいところだけど、せっかく気分よく飛んでいるんだし、この場は同意しておこう。
「さあて、肩慣らしはこれくらいでいいかな？」
「へ？」
スピカは腕まくりをして気合を入れると、彗を掴む手にぎゅっと力を込めた。
「ここからが本番——そぉれっ！」
「え？　え——ぇぃぃおおおおお——っ!?」
先端についたミュトスの輝きが増すと同時に、オレたちを乗せた彗は再び加速をつけて猛スピー

ドで水平飛行する。
「いくわよ――まずはローリング！」
「ひぃいい――っ‼」
い、今、横にグルンって一回転しなかった⁉　街並みが頭の上に見えたヨ⁉
「バレルロール！」
「うわあああ――っ⁉」
続いてらせん状に回転しながら上昇する彗。
「そして――インメルマン・ターン！」
「ひぎゃあああああ――――っ⁉」
眼に映るセカイがびゅびゅびゅーんって流れて、ぎゅぎゅぎゅーんって上に昇って、ぎゅるるるるる
――んってひっくり返って――。
「あはははっ、楽し――ぃっ‼」
ちっとも楽しくな～い！　楽しくな――いなーいなーいなーいなーい（エコー）…………。

「……ふひぃ……死ぬかと思った」
いくら死ぬことに慣れているオレでも、これには参った。
「なによ。オザキってやっぱ、ヘタレよね」

ヘタレと呼ばれようとビビリと呼ばれようともういいです。
「お前、何でそんなにテンション高いの？」
「え？　そう？」
自覚がないのか、スピカはオレの指摘にきょとんとしている。
ハンドルを握ると性格が急変する人って話はよく聞くけど、スピカもそうなのか？
「うーん、ふだんはこんなはしゃがないんだけど、やっぱ乗れたのがうれしいのと……」
そこまで口にして、急にスピカはごにょごにょと言いよどむ。
「なんだよ？」
「その、さ……オザキといっしょにこうして飛んでいるのが、すっごく……気持ちいいんだもん」
そう言うとスピカは腰にまわしていたオレの手を取り、自らの腰の下へ誘う。
「あ……」
指先が触れた股間の部分はじっとりと濡れていた。
「スピカ、お前――」
「あ、あのね、乗り始めた時はなんともなかったのよ？　でも、背中ごしにオザキのこと感じながら飛んでいるうちに、なんだか気持ちよくなってきて、そしたら……」
理屈はよくわからんが、とにかくいろんな意味でスピカは心身ともにハイになっていたようだ。
「ね、オザキ……しよ？」

オレの胸にしなだれかかり、鼻に掛かった甘い声でスピカがおねだりしてくる。
「ああ。それじゃ早く下に降りよう」
「ダメ……そんな、ガマンできない。今すぐ、欲しいの……」
「おいおい。そんなこと言ってもだな」
「ねぇ……ここで、しちゃお?」
「へ? は……はいぃぃ～っ? こ、ここでですか～⁉」
だってそうだろ? ここは遥か空の上。しかもオレたちの身体を支えているのは直径十センチちょっとの彗なんだぜ?
「いやいやいや、いくらなんでも、そんなアクロバティックなプレイは——んっ⁉」
何とか思い止まらせようと説得するオレの口を、スピカは肩ごしのキスで塞いだ。
「んくっ、んふうっ、んちゅうっ……ちゅふ、ふはあ……っ」
いつになく濃厚で密接なキスだった。
「なあ、やっぱり下に降りて……」
「だぁめ。オザキだって、もうやる気マンマンじゃない、んふふっ……」
蕩けるような眼差しで、スピカはオレの方を向いて股間に手を伸ばす。
「ほぉら、もうここ、カチンカチンよ?」
「はうっ!」

スピカの指が制服のズボンごしに、硬くなったオレのペニスをスリスリとこすり上げた。
腰にしがみついて飛んでいる間に、彼女の甘い香りや柔らかいからだの感触、それに腕に掛かる下乳の重みといったものを感じて、オレも気付かないうちにすっかり興奮していたのだ。
「空を飛びながら、イヤらしいこと考えていたの？」
オレを問い詰めながらスピカの指が、布地ごしにくっきりと浮き出たペニスをこする。
「そ、それは……くっ！」
絶妙な力加減と直接触れてもらえないもどかしさで、硬度がさらに増して熱を帯びてくるのが自分でもよくわかる。
「また大きくなって、熱くなってきた……本当にイヤらしいんだ」
スピカの言うとおり、ズボンを突き破りそうなくらい大きく硬くなっていた。次第にオレも、熱くたぎったこいつをどうにかしたい思いで頭がいっぱいになってきた。
「でも、そんなイヤらしいオザキが好き……大好き……んんっ」
キスをしながらスピカがズボンのファスナーを下ろし、オレのモノをさらけ出した。
「んんっ、んふうっ……ふふっ、もういいよね……？」
オレは黙ってうなずく。
スピカは自分でショーツのクロッチを指でずらして、天を向いてそそり立つペニスの上にゆっくりと腰を落とした。

「んんっ……！　あ、ああっ……入ってくるぅ……っ」

熱くぬかるんだスピカの内側が、さしたる抵抗もなくゆっくりとオレのモノをくわえ込んでいく。スピカのねっとりとした肉壁の温かさと締め付けがあまりに気持ちよくて、思わず声が出そうになるのをなんとかこらえた。

「んんっ……オザキ……入ったよ？　オザキの硬くて、大きいの……全部アタシの中に入った……んあああっ⁉」

自分のモノがすっぽりとスピカの下の口にくわえ込まれると、オレはたまらず自ら腰を突き上げるように動かした。

「あ、ああっ！　ふあっ！　い、いきなり、そんな、激、し……んふうっ！」

突然の行為にとまどうスピカ。でもオレも我慢なんてできない。もっと大きく動いて、もっと深く突き立てて、もっと早く彼女の奥まで達して、もっとスピカを気持ちよくさせてあげたい——ただそれだけしか頭になかった。

トロトロの愛液を潤滑油代わりにして、ペニスがスピカの中を往復する。

「んんっ！　そ、そこ、いいっ！　こすれて、気持ちいいよぉっ！」

かろうじて片手で彗を掴みながら、下から突き上げてくるオレの動きにあわせるようにスピカ自身も腰を動かす。

彗から振り落とされないようにスピカに身体を密着させると、空いた手で彼女の胸をこねくるよ

うに愛撫する。
「あううっ！　む、胸もいい……ア、アタシのおっぱい、もっと触ってぇっ！」
　オレたちは完全にふたりだけの世界に没入していた。もうここが空の上だとか、彗の上だとかそんなことはどうでもよかった。今はただ、むさぼるようにお互いを求め合い、気持ちよくなることだけしか考えられなかった。
「はあっ、あっ、ああっ……ね、ねえ、オザキ……アタシのココ、気持ちいい？」
「ああ……すごくいいよ。なんだかいつもより、気持ちいいかも……」
「はっ、あはっ……ア、アタシも……」
　いつもと違うシチュエーションが官能を煽るんだろうか？　こんな場所で愛し合うなんて、このセカイでオレたちだけだろう。
「あっ、はあっ……あはあっ！　オ、オザキのこれ……アタシの中で大きくなって……何か……何か来る、来ちゃうよぉおっ！　んはああっ！」
　スピカの肉壁がきゅうっとオレのペニスを締め付け、射精を促す。
「こ、このまま……このまま膣内に出して……オザキの熱い精液で、アタシのココいっぱいにしちゃって……ああああっ！」
　言われるまでもなくそのつもりだ。オレは最後の仕上げとばかり、スピカを身体ごと後ろから抱え上げるようにして突き上げる。

「ふあああっ！　い、イクぅっ……アタシ、もう、ダメぇ……イクぅぅ……あああっ！　い、イっちゃうううぅぅ——あああああ————っ!!」
身体を大きくしならせ絶頂を迎えるスピカの膣内に、オレはためらうことなく熱くたぎった精液を解き放った。
「んっ、あ、あぁ……っ……ビクビクって、脈打って……出てる……いっぱい出てるよぉ……ふああ……っ」
もう一滴も残ってないくらい、すべてスピカの中に注ぎ込んだオレの全身を満足感とともに心地いいくらいの脱力感が包む。
（はあ……よかった……）
スピカの中からペニスを名残惜しく抜き出すと、オレはそのままゆっくりと寝転がり————。
「…………えっ？」
そう。ここはベッドの上なんかじゃないってことをすっかり忘れていた。後方に倒れ込んだオレの身体を支えるには、この箒はあまりに小さすぎた。
オレの身体は彗の上から転げ落ち、そのまま重力に引かれて落下を始めた。
「————!?」
この伊都夏市に落ちてきたときにイヤになるくらい経験したあの感覚を懐かしむ間なくオレの身体は重力に逆らうことなく自由落下を続け、そして、全身がバラバラになりそうな痛————。

×××

「はあ……」
誰かのため息で、オレは眼を覚ます。
（ここは……天国か）
どこまでも広がる白い空間に据え置かれた、見覚えのあるレトロなデザインの巨大テレビ。
そのブラウン管に映っているのは、オレを「うんこマン」と名付けたあの神様（幼女）だった。
「そ、そうだ！　オレ、彗から落ちて……」
「そうでち。まったく、なさけない死に方でちね……はあ」
見かけに似合わない、妙に所帯じみたため息をこぼす神様（幼女）。
「空中ぷれいなんて、うんこマンはキワモノの企画えーぶいの観過ぎでち」
いや、オレ、そんなシュミないけど。
「と、とにかくオレを早く生き返らせてくれよ！」
こんな後世に笑いものとして残るような人生のエンディングはまっぴらごめんだ。
オレは懇願するが、神様（幼女）はハナクソをホジホジしながらうーんと唸ったままだった。
「そーしたいのはやまやまでちけど……さすがに今回みたいな幕切れを見せられると、生き返ら

せていいものか考えちゃうでち」

「そ、そんなぁ……お、お願いします！　次はちゃんと地上でやりますから！」

呆れ顔の神様（幼女）を前に、オレはひたすら頭を下げるしかなかった。

【第一話　おわり】

ココロプラス劇場

STAR MINE GIRL

Adult Channel

すごいぞミうちゃん豪腕投手

「――キヨヒコ――ッ!!」
朝、廊下を歩いていると、オレを呼ぶ声がした。
「キヨヒコキヨヒコキーヨーヒーコ～～～っ!!」
廊下の向こうからドタドタと駆け足でこっちに向かってくるのはミラだ。
オレは腰を落とし、両腕を大きく広げて身構える。
「どっこ――いっ!」
「ふんっ!」
頭から突っ込んできたミラを真正面からがっちりと受け止めた。
「おお、ナイスキャッチだ!」
さすがに毎日のように挨拶代わりに「どっこい」されていたら、イヤでも慣れるって。
「ところでキヨヒコ、日曜日はヒマヒマか?」
「ん? そうだな。特に予定はないけれど」
「よーし、それじゃミラたちといっしょに白球を追いかけよー!」
どうやら彼女は自分が所属している草野球チームの試合にオレを誘っているようだ。
「だいじょーぶ! キヨヒコならできる! ミラが太鼓判をベッタベタに押したげるぞ!」
知らずに不安そうな顔を見せてしまったのだろう。邪心なんてこれっぽちもないような純粋無垢な笑顔でそんなことを言われると、本当に大丈夫な気がしてくるから不思議だ。

「うまいヘタは関係ない！　みんなと楽しく野球ができれば、ミラはそれでいいのだ！」
　それなら、少しは気楽に参加できるかな。
「だったら、及ばずながら参加させてもらうよ」
「よっしゃー！　キヨヒコだぁいすきだっ！」
「うごっ！」
　至近距離からの頭突きを避けることができず、オレは直撃を喰らって悶絶した。

　そして日曜日。オレはミラに教えられた市内の運動公園にやってきた。
（へえ、こいつはなかなか本格的な球場だな）
　小さいながら内外野には観戦席（スタンド）があり、その周囲にはナイター用の照明塔も建っている。草野球で使うには十分すぎるくらい立派な施設だ。
　天蓋（グレンツェン）に閉じ込められ長らく娯楽の乏しかった伊都夏市では、素人の草野球といえど立派な娯楽らしく、結構な観客だ。
「おーい、こっちだオザキ～！」
　グラウンドに入ると宮本（みやもと）とミラ、そしてチームのメンバーらしき人たちが勢ぞろいしていた。
「みんな注目～っ！　今日の助っ人オザキキヨヒコだっ！」
「よ、よろしく」

ミラの紹介に照れつつ挨拶すると、チームのメンバーもみな気さくに応じてくれる。
「アンタがミラちゃんの言ってた『我がチームの秘密兵器』か！」
「なんかパッとしねぇが、今日は頼んだぜ」
居並ぶメンバーはオヤジやオッサンと呼んだ方がいい年齢ばかりの、いかにも寄せ集めの草野球チームって雰囲気だ。でもまあこれくらいゆるい方が、こっちも気が楽だ。
「で、今日の対戦相手は——」
「あ、来た来た！」
向かいのベンチに姿を見せたセーラー服に長い黒髪の少女に見覚えがあった。
「お、沖？」
颯爽と現われたのは、伊都夏大学園生徒会長にして自衛軍指揮官の沖姫々（おききき）だった。
「うむ。よくぞ逃げることなくやってきたな宮本……オザキもいっしょか」
悠然とした態度で腕を組み、まっすぐオレたちを見据える沖。
「当然です会長。我々としてもこの勝負、負けるわけには行きませんから！」
「そだそーだ！　負けないぞかいちょー！」
「相変わらず威勢がいいな。だが、沖とて遊び気分で試合に臨むつもりはない——いでよ、我が精鋭たち！」
ベンチに姿を見せたのは筋骨隆々でいかにも歴戦の勇士といった風貌の男たち。全員野球用のユ

ニフォームではなく迷彩色の自衛軍の服を着ており、それだけで十メートル以上離れたこっちのベンチまで威圧感がいやでも伝わってくる。
ビビって言葉を失うオレたちをよそに、自衛軍チームはウォーミングアップを始めた。
「お、おいおい、なにビビってんだよ！　別に殺し合いをやるわけじゃねぇんだぞ⁉」
そういう宮本の顔も心なしか引きつっている。
そうこうしている間にスキンヘッドの格闘家みたいな巨漢がマスコットバットを三、四本むんずと片手でつかむと、軽々と素振りを始めた。
「ス、スウィングが見えない……！」
男の周りには猛烈なつむじ風が舞い上がるだけで、スウィングしているはずのバットの軌道すらオレの眼には見えない。
かたやベンチ横では、身長二メートルはある長身の男がキャッチボールをしている。
傍目には力も入れず軽く放っているように見えるのに、相手のミットにボールが収まるとバシーン、とまるで爆音のように響き渡る。
「驚くのも無理はない。彼らは我が自衛軍の中でも特に秀でた者たちを基地の地下にある『ばんあれん特訓場』で二ヶ月間みっちり鍛え上げた、いわば超えりぃと集団だ」
ベンチ前で練習を見守っていた沖が悠然と説明する。
たしかに撃退させることはできなかったとはいえ、通常兵器のみの戦力であの巨大な悪魔（ゾディアック）と戦っ

てきた連中だ。生半可な体力じゃ、今まで生き残れなかっただろう。
「し、しかしなあ沖。これ、草野球の試合だろ？　何もそこまで……」
「百獣の王である獅子は、か弱き兎をも全力をもって狩るという。たとえれくりえいしょんの一環であっても、手を抜くことは、この沖姫々の矜持に反するというもの！」
まあ相変わらずクソ真面目というか融通が利かないというか、とにかく沖姫々というのは一事が万事こういう性格なのだ。
「どうした。よもやこの期に及んで、怖気付いたなどとはいわぬな、お前たち」
沖に指摘されて振り向くと、こっちのベンチの連中はみんな俯いて肩を落としている。これじゃあ完全にお通夜ムードじゃないか。
これはまずいと思った宮本がみんなにハッパをかける。
「どうしたよ、おい！　まだ試合も始まってないんだぜ⁉」
「け、けどよぉ、あんな奴等にどうやって勝つんだよ？」
「なあ、今日のところは勘弁してもらって――」
「――ダメダメダメダメダメダメェェ――――ッ‼」
そんな重苦しい雰囲気を吹き飛ばすような、空気を震わせる大音声。
振り返るとそこに、オレたちをキッとにらみつけるミラがいた。
「戦う前からあきらめちゃったら、そこで試合終了ですよぉぉ～っ‼」

「ミ、ミラ……」
「みんなそれでいいのかぁ⁉　ミラは……ミラはそんなの絶ぇぇ～っ対、ダメダメだあ――っ！」
子供のように手足をぶんぶん動かしながらミラの説得は続く。
「相手がどんな強大でも、最後の最後まで決してあきらめたりしちゃダメなんだ！　ミラは……ミラは絶対あきらめないんだぞ～っ‼」
最後の方は瞳にうっすら涙を浮かべながら、ミラはみんなを叱咤激励する。しかしベンチの中からこれといった反応はない。
「――なにへこたれてんだよ、お前ら！」
強く心を揺り動かされたオレは、矢も盾もたまらずベンチの前に飛び出していた。
「最後まであきらめなければ絶対に勝てるって、この街を何度も悪魔から守ってきたミラが身を持って教えてくれたじゃないか！」
「キヨヒコ……」
「オレは新参者だけど、ミラがどんな思いで戦いに臨んでいたのかは、身近で見て来てわかっているつもりだ。この娘は絶対ウソつかない――だからみんな、あきらめないでいっしょに戦ってくれ――！」
オレはベンチの中の連中に向かって頭を深々と下げていた。
オレ自身、今日の試合の戦力にはならないかもしれないが、それでもここでみんなが諦めて、ミ

ラに哀しい思いをさせたくない。だから、全力でお願いするだけだった。
「……なあ、みんな」
それまで黙ってミラとオレの檄(げき)を聞いていた宮本がおもむろに顔を上げる。
「このオザキってヤツは、見えないスウィングも出来ないし、剛速球も投げられないさ。けどな、信頼に値する漢(おとこ)だ。それだけは義兄弟(ブラジャー)であるこの俺が保証する」
いやだから、その恥ずかしい呼称を止めないか宮本。
「相手は悪魔じゃなくて同じ人間だぜ？　俺たちにだって意地があるじゃないか！」
すっかりお通夜ムードだったベンチの中の連中がひとり、またひとりと顔を上げる。
「そうだよ、俺らにはミラちゃんがいるもんな！」
「オイラたちだって伊達に長年草野球で鳴らしてきたワケじゃねぇぜ！」
「おうよ、あの筋肉バカどもに俺らのワザ、思い知らせてやるか！」
その表情はみなやる気でみなぎっていた。
「みんな、みんな……アリガト――!!」
奮起してくれた連中の姿にミラはすっかり感激していた。
「よっしゃぁ！　んじゃ今日は久しぶりにミラが投げるよぉおっ!!」
チームメイトからおおっ、とどよめきにも似た声が上がる。
「ミラが投げるのがそんなにすごいことなのか？」

「ああ、ミラはいつもは代走や守備固め要員だからな」

「それって……おミソってことか？」

「逆だ、逆。ミラの投げるボールがあまりにもすごすぎて、実力を１００パー出すことができないから、仕方なく代走とかやってるんだよ」

ミラがピッチャーだと実力差がありすぎて試合にならないってことか。

「まあ、試合を楽しみにしてろよ。ミラのボールを見て腰抜かすんじゃないぜ？」

宮本はそう言いながら笑ってみせた。

いよいよ試合開始。じゃんけんで勝った沖が先攻を選んだ。

先発投手はミラ。キャッチャーは宮本で、野球の実力がわからないオレは無難なところでライパチ——8番ライトに入ることになった。

「む……宮本よ、お前たちのチームはミラが投げるのか？」

オレたちが守備位置につこうとすると、ベンチから沖が声をかけてくる。

「ええ。あいつ、ウチの真のエースですから」

「まさかとは思うが……怪しげな魔法（リネア）など使いはしないだろうな？」

尻馬に乗って自衛軍ベンチからも上品とはいえない野次が飛ぶ。

「お……おい、沖！」

自衛軍の指揮官という立場上、日頃から魔女（エトワール）を快く思っていないとはいえ、それはひどい言いがかりじゃないか？　挑発にしたって、やりすぎだ。
だが宮本は妙にカッコイイポーズを決めて、あくまでクールに応対する。
「お言葉ですが、会長。ミラがそんなズルをしてまで試合に勝とうとしているとお考えならば――今すぐその不見識を改めていただきたいですね」
「言ってくれるな、宮本」
「まあ、見てて下さい――ミラ、投げてみろよ」
「おっけー♪　いっくぞーみやもとぉ！」
キャッチャーの装備で身を固めた宮本が腰を落として構える。
マウンドに立ったミラは腕をブルンブルンぶん回してから、女の子にしては実にムダのないモーションのオーバースローで投げる。
「――どっこーい!!」
――ズッバァァァァァァ――ン!!
さっきの自衛軍のピッチャーの捕球時の爆音が拳銃なら、今度は燃料気化爆弾クラスの轟音が球場内にこだました。
（う、うそぉ……）
た、たしかにこんなボール投げられたら、普通の草野球チームじゃ相手にならない。

口汚く野次っていた自衛軍の連中も、口をあんぐり開いたまま固まってしまっている。
「ふっ……面白い」
その中でただひとり冷静だったのは指揮官の沖ただひとり。
「それでこそ我々も心置きなく戦うことができるというもの」
「へへんっ、負けないゾ、かいちょー！」
こうして、予測不能の超絶草野球が始まった。
しょっぱなからミラはハイペースで飛ばしていく。
「どっこーい‼」
一球ごとに気合とともに入れて投げるミラの超剛速球に、強者そろいの自衛軍のバッターたちは手も足も出ない。一回表の攻撃は三者連続三振で終了した。
「すごいじゃないか、ミラ！」
ベンチに戻るとオレは真っ先にミラに声を掛けた。
「この調子なら完全試合も夢じゃないぜ！」
「うんっ！　えへへっ」
ミラの満面の笑顔を見ているだけで、こっちまで元気になってくる。
「えと、それでね、キヨヒコ。ミラからお願いがあるんだけどなぁ～」
不意にミラは恥ずかしそうにもじもじし始めた。

「ん？　なんだ——っておいおいっ」
返事も聞かないまま、ミラはオレの腕を引っ張ってベンチ裏に駆け込む。
「なんだ、ナイショで話すようなことか？」
「うん。あのね。ミラ、めいっぱいがんばるよ？　でもね……もっともっとがんばるためには、えと、そのぉ……」
いつもやたらハキハキしているミラにしては、いやにじれったい言い回しだったが、
「——ああん、もう！　ウジウジしてるのはミラの性分に合わないっ!!」
突然叫んだかと思うと、ミラは甘えるようにオレに抱きつく。
「ミラがもっともーっとがんばるための魔法、キヨヒコから欲しいとゆう」
そう言うとミラは眼を閉じてピンクの唇を近づけてくる。
「え？　そ、それって……」
明らかに魔法なんかじゃなく、キスをせがんでいるポーズだよな、これって。
迷ったオレはミラの唇ではなく、リンゴのようなほっぺたに軽くキスをした。
「ふえ？」
てっきり唇にキスが来ると思っていたミラはぽかんとしている。
「今はこれでガマンしてくれ」
「え～っ、ヤダヤダ～」

キスしたばかりの頬をプーっと膨らませて不満げなミラをオレはなだめる。
「その代わり、ミラががんばってくれたら、なんでも言うこと聞いてあげるからさ」
「んー……んんー……もみ～～っ!!」
ミラは突然オレのもみ上げの臭いをくんくんと嗅いだ。彼女はこれで相手の感情を読めてしまうのだ。
「キヨヒコ、ウソついてない！　だからキヨヒコ信じる！」

ミラの快投で二回表も自衛軍は三者凡退。裏の攻撃は四番のミラからだ。
コンパクトで鋭い素振りを二度三度としてからミラがバッターボックスに入る。
「いくぞー！　ぶぇぇぇーでぶぇんでぶぇぶぇぶぇぶぇーぶぇーぶぇーぶぇ～～♪」
自分の口でテーマソングを奏でて士気を高めるミラ。
一方の自衛軍は内野陣がマウンドに集まっていた。おそらくミラの身体能力の高さを見越して、どうやって攻めるのかの相談しているらしい。
「ヘイヘイヘーイ！　ビビってんのかお前ら――っ！」
ここぞとばかりベンチから宮本が野次を飛ばす。
頭ひとつ大きいピッチャーがベンチの沖となにやらアイコンタクトを取ると、沖は不敵な笑みとともに大きくうなずいた。

「ばっちこーい！」
身体をくの字に折りたたむクラウチングスタイルのミラに対しての第一球。ピッチャーの足が天を突くほど上がり、大きなモーションからボールが投げられる。
「――――!?」
たしかに投手から放たれたはずの白球がホームベースまでの間に姿を消し、いつの間にかストライクゾーンに構えたキャッチャーのミットに収まっていたのだ。
「な、なんだぁ……!?」
オレたちより近い位置でボールを見ていたミラは呆然として何度も眼をぱちくりさせたりゴシゴシこすったりしている。
「見たか、これぞ秘技『消える魔球』なり――！」
ベンチから沖が叫ぶ――って、自分で投げてないのにやたら偉そうだな、おい。
想定外の展開にオレたちが呆然としている中、ミラだけは無邪気に興奮している。
「おお、すっげー！　ミラ、初めて見た！　かっちょいい――っ！」
ミラは嬉々としてボックスに入り直すと、バットの先端をマウンド上の投手に向ける。
「でも消えようが燃えようがボールはひとつ！　ミラはバットで打ち返すだけ！」
ピッチャーは足を大きく上げて第二球を投げる。
またしてもボールはピッチャーとバッターの中間点あたりでその姿を消す。

「うりゃあっ！」
だが渾身のスウィングはむなしく空を切り、ボールはミットに収まった。
「ぬぬぬ……やっぱり見えない」
一番間近で見ているはずのミラにボールが見えていないのだから、本当に消えて見えるのだろう。けれど、それでも彼女はむしろその状況を楽しんでいるように思えた。
「よぉし、ミラも負けてらんないぞぉっ！」
ミラはオーソドックスな構えに代える。何か策を思いついたんだろうか。
自衛軍のピッチャーが振り被って足を高く上げると同時に、ミラが驚くべき行動に出た。
「のおおおおおお―――っ!!」
ミラはバットを地面と水平に構えると、そのまま目にも止まらない速さでグルグルとコマのように急回転をその場で始めたのだ。
「おおおっ！　あ、あれは幻の大技『スワン・レイク』!!」
「知ってるのか、宮本!?」
「伝説の甲子園常勝校の主軸打者が見せた幻の技。俺もこの眼で見るのは初めてだぜ……」
バットを構え高速回転をするミラの足下から土煙が舞い上がって姿が見えなくなる。
突飛な行動に一瞬たじろいだピッチャーだったが、投げた一球は変わらず見えなくなり、土煙の中に消えた。

「グワラガッキィィィ――――ン‼」
威勢のいい擬音とともに、立ち上がる土煙の中から何かが猛スピードで飛び出した。
「おおっ――⁉」
宮本以下チームメイト全員がいっせいにベンチの外に飛び出し、打球の行方を追う。
打球はきれいな放物線を描いて、外野フェンスのはるか上まで飛んで行った。
「ぬおおお――っ⁉　じょ、場外ホームランかよぉぉっ⁉」
宮本は飛び上がらんばかりに興奮しながら叫ぶ。
「――ストライック！　バッターアウトォ！」
「……へ？」
土煙が消えて、まるで時間が止まったかのようなバッターボックスの周辺があらわになる。ボールはしっかりキャッチャーのミットの中に収まっていた。
「えへへっ……ぐるぐる回しすぎちった」
ミラがかっ飛ばしたのはボールではなく、自らのバットだった。
試合は白熱した投手戦になった。
目の覚めるような剛速球でノーヒットに抑えるミラに対して、自衛軍のピッチャーは多彩な変化球――いや「魔球」と呼ぶべきか――でオレたちを翻弄(ほんろう)する。

どっ

さすがに沖が鍛え上げた精鋭軍団、オレたちはまだひとりのランナーも出していない。
次の回にオレの打席が回ってきた。
相手投手はマウンド上でモーションに入るや否や、空高くジャンプするとその長身を弓なりにして投げてきた。
「うおおおっ⁉」
まさに頭の上から降って来る剛速球に手も足も出ないまま、オレは呆気なく三振に終わった。
「見たか、オザキ！　これぞエ〇投げハイジャンプ投法っ‼　高く舞い上がることで角度を、身体を弓なりにして投げることでさらなるスピードを増した魔球だ‼」
投手が魔球を投げるたびに、なぜかベンチの沖がいちいちこうやって解説してくれるのがどうにも理解できないんだが、とにかく次々と人知を越えた魔球が投げられる。
「ド〇ームボール！」
おおっ、ボールが揺れながら落ちて、さらにそこからホップした！
「ジャイ〇フォーク！」
うっ、これまたメジャーな魔球を！
「グ〇ビティ・プラス！」
こ、これは、ちょっとマイナーかも！
「スカイ〇ブ投法！」

ああっ、もう何がすごいんだかよくわからんっ!!
「爆〇消球!」
それはサッカーだろうが!
一方のミラも「どっこいボール」でばったばった三振の山を築いていた……わけだが。
——カキーン!
乾いた打球音とともに内野に転がったゴロをサードが落ち着いて捌(さば)いてアウトにする。
打順がふた廻り目を迎えたあたりから、ミラのボールが打たれるようになった。
幸いオレ以外の鉄壁の守備陣のおかげで無得点には抑えていたが、次第に打球に勢いが出てきたのが気になる。
そういえば、ミラの投げるボールのスピードもほんのわずかだが落ちているようだ。
「ミラ、だいじょうぶか?」
「だーいーじょーぶっ! まだまだミラは投げるぞ～!」
ベンチに戻ったミラは笑顔で答えるが、こんな小さな身体であんな剛速球を立て続けに投げているんだ。いくら彼女がパワフルだからってスタミナは無尽蔵なわけじゃない。
(何とかして先制点を取って、気分だけでも楽にしてやらないと……)
だがいまだに我がチームは自衛軍ピッチャーの魔球を打ち砕くことができない。
結局この回の攻撃も簡単に終わり、ミラはためらうことなくマウンドに向かう。

「さーてさて、ビッシビシ行くよ、キヨヒコっ！」
ここまでミラ自身の踏ん張りとバックの奇跡的な守備でなんとか0点に抑えてきたオレたち。だがその前に、最大の敵が立ちはだかった。
「——たいむ！　代打……沖！」
自衛軍の指揮官は0対0の均衡を破るべく、自らバッターボックスに立った。
そして、マウンド上のミラに向けたバットの先端を、そのまま野球場の場外へとスライドさせる——マンガなんかで見たことがある光景だった。
「か、会長、まさか——」
「指揮官である沖自ら打席に立つのだ。手ぶらで帰るわけには行かぬだろう？」
たいした自信だが、それがあながちはったりではないから彼女は自衛軍の指揮官として絶大の信頼を得ているのだ。
他の選手たちとはまったく違うオーラが、外野を守るオレにまでビシビシと伝わる。
「よぉし、勝負だかいちょー！」
もちろんミラだって負けるわけにはいかない。
「うおおおお——っ！」
いつも以上に腕を大回転させて、渾身の一球を沖めがけて放つ。
「見よ！　沖家野球術秘奥義——ぺるせうす流星打法——っ！」

――カッキィィ――ン!!

フルスウィングしたバットは甲高い音とともに砕け散り、その破片が四方に散らばる。

(――やった!)

だが飛散したバットの破片に混じって、打球もいっしょにライナーでオレの守るライト方向へと飛んできた。

「オザキ!」

宮本の指示より先にオレは懸命に打球を追いかけフェンスに寄り添う。

「――!?」

しかし沖の放った強烈な打球は、数多のバットの破片とともにオレのはるか頭上を通過して、あっという間に場外フェンスの向こうへ消えてしまった。

「はっはっは! どっこいぼぉる、敗れたり!」

完璧なホームランを放ち、ゆっくりとダイアモンドを一周する沖。

あまりに衝撃的な初失点に、慌ててチームメイト全員がマウンド上に集まっていた。

「ミラ……」

今のは相当ショックだったろう。さぞ落ち込んでいるのかと思いきや――。

「えへへっ、やっぱかいちょーはすげー! ビックリしたぁ!」

ミラは少しも堪(こた)えていないかのように、にんまりと笑顔を見せた。

「れれれ？　どーしたみんな、まだ試合は終わってないよ？　取られたら取り返せばいいのさ！」
いつもと変わらないミラの笑顔に少しだけほっとするオレたち。少なくとも彼女はまだ勝利をあきらめていないのだ。
「……痛っ！」
突然、宮本がキャッチャーミットをはめた手を押さえて苦悶の表情を浮かべる。
「おい宮本、どうした？」
「な、なんでもねぇ……へへっ」
笑顔を作ってみせるが、明らかにその表情には無理があった。
「⁉　みやもと、手、見して！」
ミラは宮本から強引にミットを外す。
「やっぱり……こんなになってる」
宮本の手は真っ赤に腫れあがり、どっちが手だかミットだかわからない状態だった。
あれだけの剛速球を受け続けてきたんだ。むしろこんな酷い状態になるまでがんばってきたこいつの意外なほどのド根性にオレは驚く。
「こりゃキャッチャーは続けられないぜ？」
「でもタケちゃん以外にミラちゃんのボールを受けられるヤツなんて……」
緊急事態にうろたえるチームメイトたち。

「いるぜ、ひとりだけ」
真っ赤に腫れ上がった手で宮本が指差したのは――オレだった。
「――⁉　ちょ、ちょっと待てよ」
「お前は日頃からミラの頭突きを難なくキャッチしているだろ？　それにミラだって、お前がキャッチャーなら安心して投げられるはずだ――違うか、ミラ？」
「う、うん。ミラもそんな感じする」
ミラ、宮本、それにチームメイトの熱い視線がいっせいにオレに注がれる。
「ホ、ホントに新参者のオレなんかでいいのか？」
オレ以外の全員が、大きくうなずいた。選択の余地はない。
「……よし、こうなりゃやってやるさ！」
「そうこなくちゃな、義兄弟！」

「しまって行こ――っ‼」
キャッチャーに回ったオレに代わって宮本がライトに入り、試合再開。
「いっくぞぉ――キヨヒコ――っ‼」
ぶんぶん腕を振り回し、ミラがオレのミットめがけてどっこいボールを投げる。
――ズッバァァァ――ン‼

思わず眼をつぶってしまったが、ボールはちゃんとストライクゾーンに構えたミットの中に収まっていた。
テンポよくミラは二球目を投げる。
――ズババババァァァ――ン!!
相変わらず捕球のタイミングで眼をつぶってしまうが、それでもミラの放った剛速球はストライクでミットの中に収まる。
「いいぞ、ミラ!」
ボールを返すと、マウンドの上でミラはにぱーっと笑顔を見せる。なんの迷いもなくオレのことを心から信頼してくれている、そんなとびきりの笑顔だった。
(それにしても……なんかさっきよりボール、速くなってないか?)
さっきまでは外野から見てたからかもしれないけれど、ミラの投げるボールは沖に痛打される前より――いや試合開始当初よりもスピードと切れを増しているように感じられる。
「にょほおおおお~~っ!」
さっきまでよりも速く、より重く、そしてより切れ味鋭く投じられるミラの剛速球。
ミラの熱い想いを込めたボールをオレはしっかりとキャッチする。
「ストライクバッターアウトォ!」
完全復活を遂げたミラの前には、自衛軍もまったく歯が立たない。後続の三人をきっちり三振に

仕留めて、この回を沖のホームランによる1点のみで抑えたのだった。
　そして9回の裏。
　ここまでオレたちは毎回きっちり三人で終わっている——つまりこのままじゃ無安打試合（ノーヒット・ノーラン）どころか完全試合（パーフェクトゲーム）で終わっちまう。
「よぉし！　ここは先頭の俺がなんとしても塁に出てやるぜ！」
　腫れた手をテーピングでグルグル巻きにした宮本が懸命に素振りをしながらバッターボックスに向かう。
「おおっ、なんかいつものミヤモトじゃないぞ！」
「うおおおお——っ!!　一打席完全燃焼ぉぉぉ——っ!!」
——どごっ。
　鈍い打撲音とともにボールがころころとフィールドに転がると、宮本の身体がゆっくりとスローモーションのようにどうと倒れる。
「デットボール！」
　宮本の顔面にはボールとその縫い目の跡がくっきりと刻まれていた。
「み、みんな……あとは、た、頼んだぜ……がくっ」
　名誉の負傷を遂げた宮本はそのままベンチに引っ込み、代走が一塁に出る。同点のランナーだ。

次のバッターのオレはベンチのミラを手招きして指示を仰ぐ。
「なあ、ミラならここはどう攻める？　手堅く送るか？」
「そんなのつまんない！　攻めて攻めて攻めまくる！　攻撃は最大の攻撃だ！」
ミラの性格からしてそうだろう。実際オレがバントできるかという問題もあるが。
「いいか、キヨヒコ。ミラからの指示はたったひとつ……」
ミラはセンター方向の上空を指差してオレに告げる。
「――月に向かって打て！」
と言っても、この青空のどこにも月はない。でも、ミラの言わんとしていることはなんとなくわかった。
「よし、月に向かって――だな」
ミラが試合前に言ってたとおり「出来ない」とか「それムリ」とか諦めたら、そこで試合終了なんだ。ここまでひとり試合を引っ張ってきたミラの熱投に答えるためにも、オレがここでアウトを増やすわけにはいかない。
オレは打席に入ると、眼を閉じてミラがくれたアドヴァイスを頭の中で反芻する。
（月に向かって……夜空に……星……銀河……）
まぶたの裏に広がる銀河系の中を光の速さでぶっ飛ぶのは――コスモギガスター号だ！
「――よし！」

自分でもよくわからないが、とにかく何かひらめいた。ひらめいちまったのだ。
マウンド上の投手は大きく振りかぶって足を高く上げると、渾身の一球を投げてきた。
一球目、そして二球目は変化しない剛速球であっけなくストライクを取られてしまった。こんなすごいスピードボール、オレにはちょっと手が出そうにない。
(次のボールが勝負だ！)
ピッチャーが振りかぶると同時に、オレはもう一度眼を閉じて意識を集中させる。
(月に向かって……そのはるか彼方に広がる大宇宙へ向かって……！)
イメージの中の銀河の彼方から飛んでくる白い物体を、オレはありったけの力を込めて手にしたバットでぶっ叩く――‼
「これがオレの秘打……コスモギガスター打法だぁぁぁ――っ‼」
――カッキィィィ――――ン‼
胸のすくような快音とともに、オレとミラを乗せたコスモギガスター号と化した白球は月の向こうの大宇宙めがけて一直線に飛んで行く。
ボールの行方を眼で追う必要はまったくなかった。だって、ミラのアドヴァイスどおりに打ったんだから。
「ふう……」

逆転サヨナラ大勝利の興奮も覚めやらぬまま、オレはベンチ裏のロッカールームでひとりその余韻に浸っていた。ミラも含めて他の連中は、ひと足先に祝賀会に繰り出している。

（しかし、本当に奇跡ってあるもんだなぁ……）

まあ、何度死んでも生き返って人生をリベンジしてきたオレの存在自体が奇跡っていっちゃそれまでだけど、本当に奇跡のような結末だった。

「キ・ヨ・ヒ・コォォォォ――――ッ‼」

「ミ、ミラ？」

突然ロッカールームのドアが開いて、先に出発したはずのミラが乱入してきた。

「どっこーい‼」

「うおっとっ⁉」

いつものように挨拶代わりに頭から突っ込んできたミラをがっちりキャッチする。

「おいおい、どうしたんだ。宮本たちと先に行ってたんじゃないのか？」

「うんっ。でも、キヨヒコを迎えに途中で戻ってきた！」

「そっか。わざわざありがとな」

健気なミラがたまらなくかわいらしくて、頭をいい子いい子と撫でると、嫌がる様子もなく満足そうな笑顔を見せる。

「にししし……でねでね、キヨヒコ。試合中に約束したこと、覚えてる？」

「あー……ミラががんばったら、何でも言うこと聞いてあげるってアレ？」
「そそ。完封はできなかったけど……ミラ、がんばったよね？　ね？」
実際、ミラはよくがんばったよな。あの猛者ぞろいの自衛軍相手に、沖のホームランによる1点だけで守りきったんだから。
「ああ。立派に9回投げきったじゃないか。よくがんばった！」
「やっほっほ〜〜〜いっ‼」
褒められたのがよほどうれしかったのか、ミラはオレに抱きついてきた。
「じゃあじゃあ、ミラの言うこと聞いてくれるよね？」
「ああ、何がいい？」
「うんっ！　えっちしよ、キヨヒコ！」
今、ものすご〜くストレートなお願いをされたような。
「ずーっとえっちしてなかったから、ミラはとってもヨッキューフマン！」
「ま、まあなぁ……」
「キヨヒコはミラとえっちしたくないか？」
「ととと、とんでもないっ！　したいです、すっごくしたいですっ！」
オレだって人並みの性欲を持ち合わせたオトコノコですからして、好きな女の子とえっちしたいです、安〇先生！

「決まりだ！　待ってて、今、汗流してくる！」
併設されたシャワールームに向かおうとするミラの腕をオレはぐっと引き留めた。
「いいよ、どうせこれからいっぱい汗かくんだし」
「ふえ？　……んんっ」
ミラの身体を引き寄せて、その勢いで唇を奪う。
「んんっ、んふうっ」
花びらを思わせるミラの小さな唇を覆うように重ねてついばむ。
「ちょ、ちょとキヨヒコ……あんっ、んむう……んちゅうっ」
何でなのか自分でもわからないけれど、なぜか無性にミラが欲しくなってしまった。シャワーを浴びている時間がもったいないと思うくらいに。
「んんっ、んふうっ……んひゃっ⁉」
唇から汗の浮いた首筋へと唇が降りていくと、ミラはくすぐったそうな声を上げた。
「だ、ダメだよキヨヒコぉ……そこ、汗かいてて……ひゃんっ」
ピチピチのミラの肌に珠のように浮いた汗を舌先ですくうように舐めてみる。
「あ、あんっ。そ、そんなことしちゃ、ダメだよぉ……」
味はちょっぴりしょっぱい。かすかに立ち上るその香りに興奮してくる。
「ミラの汗、なかなかイケるかも」

「ふわああ……そ、そんなの、ヘンタイさんだよぉ」
がーん。へ、変態呼ばわりされてしまった。
「そんなにイヤか？」
「ち、違うんだよぉ……ミラも首とか舌でチロチロされると、ゾクゾクってする……でも、やっぱり汗なんて、きちゃないしぃ……」
「いーや、ミラの汗は汚くなんかないぜ？　むしろ若い女の子のエキスって感じだな」
「ううっ。キ、キヨヒコやっぱヘンタイさんだ……で、でもぉ……そんなヘンタイさんのキヨヒコも、好きだよ……んんっ」
ミラはいつもの要領で、オレのもみあげをくんくんと鼻を鳴らして臭いを嗅ぐ。
「キヨヒコのにおい……じいちゃとは違うけど、好き……大好き……えへへっ」
オレの唇は首筋から耳元、そして綺麗に浮き出た鎖骨へと移動する。
「んひゅっ、くうぅ……っ。なんかくすぐったくて……ムズムズしてくるよぉ……」
「ムズムズって……このあたり？」
愛撫を続けながらミラの薄い胸板に指を伸ばす。
「はあっ！　そ、そう……胸の先っぽから、じわじわ～ってムズムズして……あふっ！」
熟していない果実のような硬さの胸をゆっくりと円を描くように揉んでみると、ミラはとまどいながらも敏感に反応してみせた。

「気持ちいい？」
「う、うん……なんか、フワフワ飛んでいるみたい、で……気持ち、いいよぉ……」
ピクンピクンと全身を小刻みに痙攣させながら、ミラはオレの唇と指で感じている。
「ひょっとしてもう、ここも……ムズムズ？」
「あひゅんっ！　そ、そこはぁ……そこはダメだよぉ……んんっ！」
オレはスパッツの上からミラの股間に触れると、そこはすでにじっとり濡れていた。
「あ、あれ？　もしかして、ミラ……」
「え、えと……気持ちよすぎて、えっちな汁、あふれちゃった」
まだ直接指で触れていないのに、服の上からでもはっきりわかるくらい濡れているなんて——たまらずオレはミラのスパッツを脱がしに掛かる。
かわいらしいプリントパンツの股間は、おもらしをしたようにぐっしょり濡れて肌にぴったりと貼り付いていた。
「はあっ、はあっ……キ、キヨヒコぉ……なんだかとっても切なくなっちゃうよぉ……早く、早くキヨヒコのが欲しいよぉ……ふあぁあっ」
しどけなく乱れるミラの姿と汗の香りのせいなのか、いつの間にやらオレもすっかり出来上がっていた。
自分の股間で大きなテントを張っていたペニスを解放すると、ミラをひざの上に乗せてだっこす

るように正面から招き入れる。
「ミラ、おいで」
ミラはこくりとうなずくと、天井を向いて屹立するペニスにゆっくり腰を下ろした。
「ん……んくっ！　ふわ……はあっ、あああっ！」
天を仰いでうわずった声を上げるミラの熱くぬかるんだ内側は狭く窮屈だ。けれど、同じくらい熱を帯びたペニスはお構いなしに突き進む。
「はああっ！　キ、キヨヒコが……おっきくて熱いの、入って、きたぁ……ああっ！」
ほどなく根元の部分をわずかに残して、ミラの中にすっぽり呑み込まれてしまった。
「だいじょうぶか、ミラ？」
「うんっ……ミ、ミラは強い子よいこで……ぜんぜんへーき……だから、キヨヒコは動いて……いい、よ……はあうっ」
出来るだけミラに負担をかけないよう、ゆっくりと腰を突き上げた。
「んんっ！　んああっ！　ミ、ミラの一番奥まで、キヨヒコが来てるよぉっ！」
ミラが痛みと喜びの入り混じった声を上げるたび、ただでさえ狭い内側の肉襞がきゅきゅっとオレのモノを締め付ける。
「はあっ、はっ、はああっ……キヨヒコぉ……ちゅーしてっ。いっぱいいっぱいちゅーしてぇ……んんっ！　くふうんっ！」

ミラが求めるまま、オレはキスを繰り返す。舌と舌がお互いの口の中で絡み合い、唾液が混ざり合うぴちゃぴちゃという水音がやけに大きく耳に届く。
「ぷふぁあっ……き、気持ちよくて、このまま……ああっ、飛んじゃうっ！　飛んじゃいそう……キヨヒコ……ミラのこと、ちゃんと捕まえてて、ね……んっ！　はああっ！」
「あ、ああ。いつでもいっしょさ」
「えへへっ……うれしーっ」
こんなときでも、ミラの笑顔を見ているだけで幸せな気分になってくるから不思議だ。
「んっ、んふっ……キヨヒコのこれ、ミラの中で……どんどんむくむくっておっきくなって……ばーんって破裂しちゃいそ、だよぉ……」
急速に高まる官能の中、オレの方もそろそろガマンできない状態まできていた。
「ミラ、もうちょっとだけ動くからな」
オレはミラのお尻に手をまわすと、小さな身体ごと持ち上げるように下から突き上げる。そのたびにミラのツインテールが波打つように揺れる。
「ひゃふうっ！　キ、キヨヒコぉ……好き、好きしゅきっ！　らいしゅきぃぃっ！」
次第にミラもオレの動きにあわせて、自分から腰を動かすようになっていた。
「はあっ、はっ、はっ……キヨヒコぉ……キヨヒコのせーえき、ぜんぶミラの中に出していいよぉ……んくうんっ！」

ミラのその言葉を合図にして、オレはフィニッシュへと気持ちを高めてゆく。
「くっ……い、行くぞ、ミラ……！」
「あっ、ああっ！　く、来るっ！　キヨヒコが……来るよぉっ！　ひゃあっ、あっ、はあっ、はっ……んんんんんん――――っ!!」
ミラの身体が弓なりに反るのと同時に、オレはそれまで溜まりに溜まっていたものを一滴残らず、彼女の中にためらうことなく注ぎ込んだ。
「ふああ……す、すごい……キヨヒコ、ビクビクってしてるよぉ……はああっ」
心地よい疲労感の中、ミラはオレの腕の中で満足げに微笑んだ。

「ふう……それじゃ、先にシャワー浴びてるよ」
「りょーかいっ。すぐにミラも行くからね」
時が経つのも忘れてミラと愛し合っているうちに、陽も暮れかかる時刻になっていた。
すっかり汗まみれになってしまったので、シャワーを浴びることにする。
（ふふっ……どうせならシャワールームでえっちってのもいいかな）
オレはすっかり有頂天になっていた。好事魔多し――こういうときこそ慎重に行動しなければならないのに、このあとミラとどう過ごすかということしか頭になかった。
（さーて、念入りに洗いますか！）

意気揚々とシャワーブースに足を踏み入れたそのとき。

「――おっ⁉」

急に足元がずるりと大きく滑ったかと思うと、バランスを失ったオレはそのまま後方に勢いよく投げ出された。

（えっ……？）

眼の前を何か小さな固形物が過ぎる。あれは――石鹸⁉

一度ついた勢いをどうすることもできないままオレの身体は一瞬宙に浮き、そのまま頭から硬い床へ落下した。

「――ぐっ⁉」

後頭部から背骨にかけて何かが砕けるような嫌な音が走るのと同時に、頭が割れるような激痛に襲われ、眼の前が紅く染まっていく。

（こ、これ、は…………）

眼の前が霞み、意識は激痛にすべて塗りつぶされてゆく。

（痛い痛い痛いイタイイタイいたいいたいいたいいた、たたた、たた、た）

× × ×

「……で、気付いたらここにいたってわけ」
天国の巨大テレビの前で、オレは今回の顚末を神様（眉毛犬）に説明した。
風呂場で石鹸に足を取られ転倒、そのまま打ち所が悪くて死亡なんて、まったく、なんつーオチだよ。
「ふむ。どうやらお前にはまだ、功夫が足りないようだ。俺だったら、頭を打ちつける寸前に空中で身を翻してすばやく床に手を着き、そのままトンボを切って立ち上がるぞ？」
いやいや、そんなの無理だって。だいたい、あんた犬だろうが。
「と、とにかく神様！　早くオレを生き返らせてくれ！」
「うーむ、生き返らせていいものか……ユミに相談しよう」
「頼むっ！　こんなエンディング納得いかないぞ！　もう一度リベンジさせてくれっ！」
額を床に擦りつけ、オレは懸命に神様（眉毛犬）にお願いするのだった。

【第二話　おしまい】

ニトロプラス劇場
STAR MINE GIRL
Adult Channel

Sweet Milk Girl

そう思うと相談することも出来ない。どうしよう……。

もしも彼がこのことを知ったらどう思うだろう。軽蔑するだろうか。

しかも前のときよりもっと深刻だ。わたし一人の手には負えない。

また「あれ」が始まってしまった。

……どうしよう。

※　※　※

ピンポーン♪

今朝もいつもとまったく同じ時間に玄関のチャイムが鳴る。

「おはようございます、オザキくん」

真面目で几帳面な彼女らしい、いつもとまったく同じ挨拶。

「おはよう、ガーネット」

玄関で待つガーネットとこうやって朝の挨拶をする、いつもと変わらぬ風景。

「ぬううおおおお――――っ!!　あんなイグアナの出来損ない、呉爾羅様じゃねぇーっ！　呉爾羅様

は魚なんて喰わねぇし、卵ポコポコ産んだりしねぇっつ――のっ!!」
寝起きのアリデットがゴミだらけのリビングで、意味不明の絶叫をするのもいつもどおり――でも、いつもと違うものがひとつだけあった。
「…………」
「ガーネット？」
朝の挨拶は交わしたものの、ガーネットはそれきり黙ってしまう。
熱でもあるのか顔が赤く、呼吸もどこか苦しそうだ。
「なんか顔赤いぞ、ガーネット」
「えっ……」
「だいじょうぶか？　熱でもあるんじゃないのか」
とりあえず熱を計ろうとオレはガーネットの額に手を伸ばした。
「――いやっ」
ところが彼女はオレの手を跳ね除け、手が触れるのを拒否したのだ。
「ご、ごめん」
「あ……い、いいえ、違うんです」
オレを拒否した手を慌てて引っ込めてガーネットが弁明する。
「あの、これはその、つまり……ご、ごめんなさい」

何とか弁解しようとしたが、最後はいつものように頭を下げての謝罪だった。
「いや、オレの方こそ悪かったよ」
一応世間的には「恋人同士」って関係だけれど、だからといって四六時中ベタベタ、イチャイチャってのはオレも苦手だ。
「親しき仲にも礼儀ありっていうからな。ごめんな」
「い、いえ、そうじゃなくて……オザキくんは悪くないんです。だから……」
オレに謝罪している間も、彼女の顔が赤いのがどうしても気になる。もう一度問いただしたいけれど、なんかタイミングを失ったというか……。
「おーおーおめーら、朝っぱらからヒトん家の玄関でなぁにイチャついてやがる」
いつの間にか玄関にアリデッドがニヤついた顔で立っていた。
「な、なんだよ」
「おはようございます、アリデッド先生」
「どーでもいいけどよ、おめーら時間はいいのか、ああん?」
アリデッドがニヤニヤしながらかざして見せた腕時計は、いつも家を出る時間よりだいぶ遅い時刻を指していた。
「やばっ」
アリデッドは自動車通勤だから余裕綽々だけれど、こっちは歩いて登校だ。

「お、言っとくがアタシの車にゃ――」
「こっちからお断りだ！」
あんなリアルク○イジータ○シーに誰が乗るか！
「急ごう、ガーネット」
「えっ……は、はいっ」
オレとガーネットは慌てて玄関を出た。
「遅刻すんじゃねーぞ。けけけけっ」
ケタケタ笑うアリデッドの声に見送られて、オレたちは学園へと急いだ。

「はあ、はあ、はあっ……」
学園までの道をオレとガーネットは息を切らせて懸命に走る。
ようやく学園の正門が見えるところまでやってきた。登校してくる周りの生徒たちも走っていないところを見ると、どうにか間に合ったようだ。
「はあ……ここまできたらもうだいじょうぶか。なあ、ガーネット」
オレのとなりを走っているガーネットに声をかける。しかし彼女の姿はない。
「？　ガーネット？」
振り返ってみれば、オレのかなり後方で彼女がうずくまっている。

「――⁉　お、おい！　どうしたんだ」
慌てて駆け寄ると、ガーネットは胸の辺りを押さえて苦しそうに俯いていた。
「しっかりしろ、ガーネット！　どこか苦しいのか⁉」
「だ、だいじょうぶ、です……」
口では平静を装うが、その顔は熱でもあるのか真っ赤になっており、それどころかしっとりと脂汗まで浮いている。
「やっぱり今日のおまえ、ヘンだぞ？　体調が悪いなら、ムリして学校行かなくても――」
心配になったオレが手を触れようとすると、ガーネットは急に顔を上げ、弱々しく手を振ってまたしてもそれを拒んだ。
「だ、だいじょうぶです、本当に……その……急に走ったから、心臓がビックリしちゃったみたいで……はあ……っ」
そう言いながらよろよろと立ち上がる。
「さあ、行きましょうオザキくん」
「本当にだいじょうぶなのか？　ムリしたりしてないだろうな？」
そうでなくても以前のガーネットは、自分の素直な気持ちを心の内に無理やり押し込めてしまい、無意識のうちに「いい子」を演じているところがあった。
オレと付き合うようになってからはだいぶ解消されてきたとはいえ、それでもまだしなくていい

ムリをしていることがあるから心配だ。

「だ、だいじょうぶです。それより急がないと……また遅刻ギリギリで、生徒会の人たちに目を付けられてしまいますよ」

「うっ……それは勘弁して欲しい」

へんに気を遣い過ぎると逆効果ってこともある。とりあえずこの場は彼女の言うことを信じよう。

ガーネットのペースで歩いて校門のところまでくると、いつものように生徒会執行部の連中が登校してくる生徒に朝の挨拶をしている。

「よぉ、我が義兄弟（マイブラジャー）！」

そんな中、人格を疑われるような呼称を大声で叫ぶのは執行部のメンバーにして自称「女体の神秘のパイオツニア」宮本武（たけし）だ。

「はよっす」

「おはようございます、宮本くん」

「ふっふっふ、おーはーよーう、ご両人っ！」

いつも能天気なヤツだが、今日はことさらに上機嫌で話しかけてくる。

「どうした、朝から幸せそうなツラしやがって」

「おう、朝から絶景を見られたからなぁ！」

その絶景とやらを反芻（はんすう）するように宮本は眼を閉じて何度も満足げにうなずく。

「おまえとガーネットが校門に向けて走って来た時、オレは確かに見たぜ——あの、上下にたわわに揺れる『オッパニア・オッパイ』を——‼」

今さら言うまでもないが、ガーネットはかなりの巨乳である。走るたびにそのはちきれんばかりの胸が、ゆっさゆっさと音を立てるがごとく上下に揺れていたのは間違いない。

恍惚(こうこつ)の表情を浮かべ、ニギニギとエアパイモミをしている宮本を登校してきた生徒たちが遠巻きに避けてゆく。オレだってこの男とは同類と思われたくない。

「……って、待て待て！　オレとガーネットが走ってきたのは、校門のかなり手前までだぞ？　そんな遠くからよく見えたな？」

「はっはっは！　オレの場合通常視力は人並みだが、おっぱいにのみフォーカスが合う、いうなれば『おっぱい認識力』が桁外れに高いのだよ！　はっはっは！」

「……なに朝っぱらからエロトーク炸裂させてんのよぉぉぉ——っ‼」

能天気な宮本の頭をゲンコツで殴打したのは、ヤツの幼なじみでクラスメイトの樋ヶ結花(ひのけゆか)だった。

「ああっもうっ、こんな天下の往来で……みっともないったらありゃしないっ！」

「い、痛ぇじゃねーかユカ！　いきなりなにしやがる！」

「な、何よ！　走ると縦に揺れる、セルフアッパーカットな胸なんて、胸なんて——」

樋ヶの視線はイヤでも目立つガーネットと自分の胸元を何度も見比べながら、わなわなと肩を震わせる。

ぼいんぼいん

「タケちゃんの……タケちゃんの、ぶぁぁかぁぁぁ——っ!!」
「おごぉぉっ!?」
宮本の顔面を目の覚めるような左ストレートで打ち抜くと、樋ヶはなぜか泣きながら校舎へと去って行った。
「はあ……やれやれ、朝からご苦労さんだよなぁ、ガーネット」
毎度のことながら、宮本と樋ヶの夫婦漫才は笑えるんだが疲れるよなぁ——そんな話をガーネットにしようと振り返る。
「…………」
だがガーネットは心ここにあらずといった体で、オレの呼びかけにも無反応のままぼーっと突っ立っているだけだ。
「おい、ガーネット?」
ポンと肩に手をやると、ガーネットはビクンと反応してようやくオレの存在に気付く。
「えっ?　あ、あの……どうかしましたか、オザキくん?」
ダメだ。オレの話をまるで聞いちゃいない。
「いや、別にいいんだけど……あのさ、本当にだいじょうぶか?」
「え、ええ。ご心配なく。さあ、教室に行きましょう」
どうも調子狂うなぁと思いつつ、オレはガーネットの後を追った。

「おはよ、オザキ」
「キヨヒコ、おはよーなのだ！」
教室に入るとスピカとミラが挨拶する。これもいつもの朝の光景だ。
「あれれ～？　今日はガーちゃんはいっしょじゃないのか、キヨヒコ？」
ミラに言われて気付いたが、さっきまでいっしょだったガーネットの姿がない。カバンも席に置いてないから、まだ教室に入って来てないようだ。
「ん？　おかしいなぁ、さっきまでいっしょだったのに」
「なによ、ケンカでもしたの？」
「してないって。ただ……あいつ、朝からなんか様子が変なんだよ」
スピカとミラに今朝のガーネットの様子を説明して何か心当たりがあるか尋ねてみるが、ふたりとも特に思い当たるようなことはないという。
「んー……でも、ひとつあるといえばあるかなぁ」
「なんだよ、教えてくれよ」
「うんっ、ミラも知りたいぞ！」
「でも、こういうことってやっぱ個人情報だし、それに、その……」
スピカは急に頬を赤らめてゴニョゴニョと口ごもる。

「なんだよ、気になるじゃないか」
「そ、それは……あ、あんたも、ガーネットと付き合っているんだったら、少しは察しなさいよ。この鈍感っ！」
何か逆ギレされているし。ワケわかんねーよ。
「何ナニ？　ミラも全然わかんなーい」
「ミ、ミラにはあとで教えてあげるから……っていうか、ミラも女の子なんだから、察してあげなさいよ！」
はいはいはいはい、オレだけ仲間はずれですか？
「――おはよう、ミラちゃん、スピカ」
ちょうどそこへガーネットがやってきた。
「あ……お、おはようガーネット」
「ガーちゃん、どこ行ってただ！」
「うん、ちょっと……」
見失っていたのはほんのちょっとの間だけど、ガーネットの表情は顔の赤みも消えて、さっきまでに比べるとずいぶん落ち着いたように見える。
「……もみ――っ!!」
「きゃっ!?」

いきなりミラがガーネットの耳の横に顔を押し当てて、クンクンと匂いを嗅ぐ。
「うーん……ガーちゃんの匂い、なーんかいつもと違うゾ？」
「えっ？　な、何、突然……」
ウソかホントか、ミラは他人のもみあげの匂いで感情や心の内を読み取れる特殊能力を持っている。そのミラがガーネットの香りを嗅ぎながら何度もうーんと首をひねる。
「くんくんくん……何だかヒミツの匂いがするぞぉ～⁉」
「えっ……？」
「あとなんだろ、この匂い？　うーん、これは『もみー』じゃなくて、ガーちゃんのないすばでぃから匂って来るゾ？」
匂いの正体がわからないのか、ミラはうーんと首をひねって考える。
「なんだかすごく懐かしーような、ついさっき嗅いだばっかりのような……うーん」
「あ、あのね、ミラちゃん。違うの、これは……」
「んんん⁉　もしかしてこれは――」
ミラが何かをひらめいたそのとき。
「おらおらガキども、とっとと席着けや」
気だるそうな口調と足取りでアリデッドが教室に入ってきた。
「ほ、ほら、先生が来たわよ。早く席に着きましょう」

ガーネットに追い立てられるように促されて、ミラは納得が行かないまま自分の席へと向かう。
（うーん、惜しかったなぁ。あともうちょいで真相がわかりそうだったのに）
自分の席に向かいながらちらっとガーネットに視線を送ると、不意に眼が合ってしまう。
「あ……」
ガーネットは一瞬オレになにごとか声をかけようとする素振りを見せたが、すぐに顔を赤らめてそそくさと自分の席に戻ってしまった。
やっぱりちょっと心配だが、登校前よりはだいぶよくなってきているようだし、休み時間にでも改めて聞いてみることにするか。

一時間目の授業が終わった。
ガーネットの様子をたしかめようと彼女の席に向かうが、既にもぬけの殻だった。
「スピカ、ガーネットは？」
「あの子なら授業が終わるとすぐ、一目散に教室から出て行ったわよ？」
「そっか……」
彼女の行き先は気になるが、今から捜しに行っても行き違いになるかもしれない。
（まあ、帰ってくるまで待つか）
だが待てど暮らせどガーネットは戻ってこない。

ようやく小走りで彼女が教室に入ってきたのは、始業チャイムとほぼ同時だった。

次の休み時間も、その次の休み時間もガーネットは授業が終わると同時に教室を飛び出し、始業時間ギリギリに戻ってくる、というのを繰り返していた。

「あのさ、ガーネット――」

「ご、ごめんなさいオザキくん。ちょっと急いでいますので――」

引き留めるオレを振り払うように、ガーネットはそそくさと教室を出て行ってしまう。

（おかしい……これは絶対におかしいって）

気になって授業中もちらちらとガーネットの様子をうかがっているが、やはり何かがいつもと違う。ぼーっとうわの空だったかと思うと、急に顔を赤らめてもじもじしている。

※　※　※

ふう……何とかミラちゃんたちはごまかしたけれど、きっと彼はわたしの態度を不審に思っているだろう。

せめて彼には本当のことを言えたらと思うけれど、やっぱり嫌われるのが怖くて告白できない。

ああ、早く今日の授業が終わってくれますように――わたしは祈ることしかできなかった。

※　※　※

そして放課後。ガーネットを捕まえるにはこの時しかないと思ったオレは、授業が終わると同時に彼女の元へと急ぐ。

「ガーネット」

「オザキくん……あ、あの、わたし……」

「今日のおまえ、朝からずーっとヘンだぞ？」

何かに追われるように、慌てて教科書をカバンに詰めて帰り支度をしている彼女を前にオレは尋ねる。

「そ、それは……」

「休み時間になるとどっかに消えちまって、何があったんだ」

「それは、その……個人的なことですから、お答えできません」

「ちょ……ちょっと待てよ」

ぶっきらぼうに言い残し席を立とうとするガーネットの肩にオレの手が触れた、そのときだった。

「――きゃっ⁉」

ガーネットは小さく悲鳴を上げるとその場にへたり込んでしまった。

「えっ……？　お、おい、ガーネット……」

自分の肩を抱くようにして座り込んだガーネットの身体が震えている。
「だ、だいじょうぶか、ガーネット」
「へ、平気です……なんでもないです、から……」
よろよろと立ち上がったガーネットはカバンを手にひとりで帰ろうとする。
「ちょ、ちょっと待てって」
「だいじょうぶですから……ひとりで帰れます、から……」
そんなことはウソだって、覚束無い足取りを見れば明らかだ。
「よし、わかった。おまえの家までオレが送って行く。いいだろう？」
「えっ？　で、でも……」
「こんな状態のままひとりで帰らせて、もし途中で何かあったら大変じゃないか。おまえがイヤだといっても、オレは意地でも送って行くぞ！」
「……わ、わかりました」
こうしてオレとガーネットはふたり並んで家路に就く。
とはいえ、こういうときに限って交わす会話がない。
彼女に体調のことを聞いても「だいじょうぶ」としか答えないし、何か他の話題をオレから振っても、二言三言で終わってしまって会話が続かず、何となく気まずい空気がふたりの間に漂う。
（はあ……これじゃ拷問に近いなぁ……）

足取りは心なしか重く、家までの道のりがいつもより何倍も長く感じる。
「なあ、ガーネット……」
横を歩くガーネットに話し掛けるが姿がない。振り返ると数メートル後ろで朝と同じように彼女は立ち止まり、苦しそうな顔で胸元を押さえている。
「お、おい！」
「だ、だいじょうぶ……ですか、ら……」
しかしガーネットはふらふらと足元をふらつかせて、今にも倒れそうだった。
「全然だいじょうぶじゃねぇよ！　しっかりしろ！」
「し、心配しなくても……平気、で……」
ふっと全身から力が抜け、ガーネットはオレの胸に倒れ込んできた。
「お、おい、ガーネット！」
肩に触れると身体が小刻みに震えているのがはっきりとわかる。息も荒く、まるで何かにうなされているような表情を目の当たりにして、オレの方がうろたえてしまう。
とにかく彼女をどこかで落ち着かせないと。でも、彼女の家まではまだ距離がだいぶあるし……よし。
「ガーネット、とりあえずオレの部屋に行こう、いいな？」
「えっ？」

「あ……べ、別にやましいことを考えてるんじゃないぞ？　その……あんまり苦しそうで見てられないから、オレの部屋で少し休んでいけよ、な」
苦しそうな表情のままガーネットは無言で弱々しくうなずく。
「それじゃあ、行くぞ」
オレはガーネットの身体を抱きかかえると、そのまま家までダッシュした。

部屋に入るとオレは、ガーネットをベッドに寝かせた。
「えっと、だ、だいじょうぶか？　寒くないか？」
「はい……平気です」
「あ……のど乾いてないか？　何か飲むか？」
「いいえ……」
「そうか……ははは……」
ダメだ。相変わらず会話が続いてくれない。
「あの……オザキくん」
「ん？」
まだどこか辛そうな表情を浮かべてガーネットが上体を起こす。
「今日のわたし、ヘンですよね……」

「ま、まあな」
「自分でもわかっているんです。今日のわたしは普通じゃないって……でも、自分ではどうしようもできないところまで来ちゃって……」
思いつめたような表情でオレを見つめるガーネット。
「どうして今日のわたしがヘンだったのか、今、お見せしますね」
おもむろに制服のブラウスのボタンを外し出した。
「────!? お、おい、何やって……!?」
胸元のボタンが外されると、たわわなガーネットの胸がひときわ前にせり出した。
眼の前にさらされたそれを見て、オレは思わず息を呑む。
ブラウスの下から現われたガーネットの胸は、明らかにいつもより大きくなっていた。ブラジャーからはみ出さんばかりのふたつの丘は、何もせずともぷるるんと大きく揺れている。
「ど、どうしたんだよ、それ……」
「実は、昨日から胸が張ってしまって……困っているんです」
「どうしてそんなに大きくなっちゃうんだよ?」
「それは、その……た、溜まっているんです……」
「溜まってるって……ま、まさか!?」
ガーネットは顔を真っ赤にして小さくうなずいた。

女の人の胸に溜まっているものって言ったら、やっぱ……母乳、だよな？
「理由はわからないんですけれど、時々、こうやって母乳が溜まって、胸が張って苦しくなるんです。今日は特にそれがひどくて……」
「も、もしかして、今朝からずっとその状態なのか？」
「はい……ですから、休み時間のたびにお手洗いに行って、こっそり搾り出していたんです。けれど、なかなか全部出し切れなくて……」
まさに女体の神秘――なんて冗談言っている場合じゃないな。今朝のガーネットの様子を見るに、本人にとっては相当に辛いことのようだ。
「あの、それで……オザキくんにお願いがあります」
その大きな胸をオレから隠そうともせず、ガーネットは恥じらいながらオレに告げる。
「この、胸に溜まっている母乳……搾り出してもらえませんか？」
あまりに唐突なお願いに、返す言葉もなく呆然とする。
「も、もちろんこんなことお願いするなんて失礼だってわかっています。でも……自分でやるとどうしても無意識に力の加減をしてしまって、うまく搾れないんです」
そ、そりゃ他ならぬガーネットがこんなにも困っているんだ。オレが何とかしてあげなくちゃいけないのはわかっている。でも……本当にいいのか？
「お願いします。こんなことお願いできるの、オザキくんしかいないんです……」

眼鏡越しのガーネットの瞳が潤んでいる。そんなきれいな眼でオレのこと見つめられたら、でもって「あなただけ」なんて懇願されたら、やるしかないじゃないか……！
「わかったよ。オレでよければ手伝う」
「あ、ありがとうございます」
牛の乳搾りだってやったことないのに、果たして人間の乳搾りはできるのだろうか？　とにかく、悩んでたって仕方ない。実行あるのみ！
「ええと、それじゃ何を用意すればいいのかな？」
「あの……お乳が飛び散るので、タオルか何かがあれば」
オレは部屋の隅の衣装ケースから厚手のバスタオルを何枚か用意した。
「それで、オレはどういう姿勢でやればいい？」
「はい、お好きなように……わたしも他人にお願いするのは初めてですから」
彼女と真正面に向き合って乳をわしづかみで搾る、というのも考えたけど何だかすごく恥ずかしい構図だ。それならばと、オレはガーネットの背後に周り、わきの下から腕を回して彼女のパンパンに張った乳房に触れた。
「ひゃんっ」
可愛らしい悲鳴を上げてガーネットの上半身がピクンと痙攣する。
「あ、ごめん！　い、痛かった？」

「ち、違うんです。胸、とっても敏感になっているんで、軽く触れられただけで電気が走ったみたいに感じてしまって」

そうか。そんな状態だからどうしても自分で搾ろうとすると手加減をしてしまうんだな。

「じゃあ、行くぞ。ちょっと辛いかもしれないけど、少しだけ我慢してくれ。あと、本当にキツいときは我慢しないで言ってくれ、いいな？」

「はい」

改めてオレはガーネットの背後から腕を回し、彼女の胸を根元からつかむ。指先がどこまでものめりこんでいくような柔らかさと、適度に押し返してくる張りがなかなか気持ちいい。

「せーの……」

「——んっ⁉」

マヨネーズを容器から押し出すときみたいに、乳房の根元から先端に向けてきゅっと搾り出すとガーネットは敏感に反応して切なげな声を上げる。

「で、出たか？」

「いいえ、まだです。もっと、強くしてもらってもだいじょうぶ、です……」

「よし、やってみる」

さらに指先に力を込めて、手に余るほどの大きさに肥大した乳房をぎゅっと搾る。

「あふっ……もっと、もっと手全体を使って……」

「こ、こうか？」
　ガーネットの言われたとおり、手のひら全体を使ってゆっくりと先端に向けて搾り出す。
「ああっ、そ、そうです……その感じで、もっと……はあっ、はっ……ああっ、ち、乳首は触らないで……んんっ！」
　よく見れば乳輪の付近からぷっくりとふくらみ、その中央で乳首はぴんと硬く尖っていた。どうせならこの乳首を弄（もてあそ）んでみたいけれど、今はまず搾乳作業に集中しなくちゃ。
「ああっ、そ、そう……その調子です、オザキくん……んふぅっ！」
　何となくリズムがつかめてきたので断続的に搾り出す動きを繰り返すと、ガーネットの吐息に次第に熱を帯びてくる。
「あはあっ！　ん、んんっ！　で、出ちゃう……ああっ！」
　ガーネットの身体がひときわ大きく波打つのと同時に、乳首から幾条もの白い液体が放物線を描いて飛び出した。
「で、出たなぁ……」
　もっと先端からいっぺんにドバっと出るものかと思ったけど、いくつもの穴から細い筋がいくつも出ている感じだった。
「は、はい……この調子でお願いします」
　一度出たことで堰（せき）を切ったかのように、オレが乳房を搾るたびに母乳がぷしゃああっとあふれ出

し、ガーネットの前に置いたバスタオルに降り注ぐように落ちる。
「はあっ……んんっ、んっ……で、出てる……母乳、まだまだ出て、ます……くうんっ」
　自分の胸からあふれる白い筋の軌跡をぼおっとした眼差しで見つめるガーネット。
　オレも自分なりのコツをつかんで、搾り方に強弱をつけたりして楽しむ余裕が出てきた。
「しかし、それにしてもまだまだ出るなぁ」
「は、はい……いつもならこれくらいで止まるんですけれど、今日は特に張っているみたいで、まだまだ……んふうっ」
「こんなに出たらもうバスタオルじゃ収まらないな。取り換えるか？」
「あ……ちょ、ちょっと待って……待ってくださいっ！」
　それまでとろけそうな声を上げていたガーネットがいきなり振り返る。
「オザキくんっ、お鍋か何か、とにかく口の広い容器はありますか⁉」
「へ？　ま、まあキッチンを探せば出て来ると思うけど」
「すみませんが、大至急持ってきてくださいませんか？」
「な、何？」
「お願いします。大至急です」有無を言わせぬ押しの強さで迫るガーネットの眼鏡がキランと鈍く光った。
　こういうときの彼女は天然なのか計算なのか、とにかく虫も殺さないような涼しげな笑顔で恐ろ

しいことを宣(のたま)う「黒ガーネット」にチェンジしているのだ。
ここはおとなしく言うことを聞いた方が身のためだろう。オレは作業を中断して、キッチンへ向かう。
「うっ……」
予想していたとはいえ、そこはリビング同様、未踏の密林というか魔窟と化していた。
(くそっ、どーやったら二日や三日でここまで汚くできるんだ、アリデッドは⁉)
まずは手っ取り早くコンロの上に掛けっぱなしの鍋の中身を覗いてみる。
(…………見なかったことにしよう)
流し台の下やら食器棚やらを探して、ようやくちょっと汚れてはいるがなんとか使えそうな土鍋を見つけた。
(だいじょうぶだよな、これ？)
念のため匂いを嗅いだが、特に問題はないようだ。オレは大急ぎで自分の部屋に戻った。
「お待たせ、これでいいかな？」
「はい、問題ありません。ありがとうございます」
ガーネットはオレから土鍋を受け取ると、自分の前に置いた。
「オザキくん、これからはうまくあの土鍋の中に母乳が溜まるように搾ってください」
「は、はあ……でも、溜めてどうするの？」

「わかりません。でも、もしかしたら何か使い道があるかもしれないじゃないですか。それをみすみす無駄にしてしまうのはもったいないです」

ここらへん、お嬢様で世間知らずのスピカに比べて経済観念がしっかりしているというか、実に堅実というか、とにかくガーネットらしい。

「では、続きをお願いします」

さっきと同じように背後に回って、まだまだ大きく張っている胸を搾り出す。

ところがさっきまで勢いよく噴き出していた母乳の出が急に悪くなった。同じように胸全体をしごくように絞って入るのだが、ちょろちょろとしか出なくなっていた。

「おかしいな。もう打ち止めってわけじゃないんだろ?」

「は、はい……まだ胸の中にいっぱい溜まっているような感じです……」

こういう乳の出が悪い時に妊婦さんは搾乳器というものを使っているらしいが、もちろんここにはそんな道具などあるはずもない。

(うーん……ちょっと環境が変われば、出もよくならないもんかな)

ガーネットの肩越しに大きな胸を見つつ打開策を考えるが、妙案は浮かんでこない。

「しかしまあ、こんなに大きな胸で一日ガマンしてたんだな」

何の気なしにオレはつぶやく。

「えっ……は、はい……」

「やっぱりここまで張っちゃうと、痛かったりするのか？」
「あ……はい……そ、その、胸全体が、しびれて……ち、乳首の先端が、ブラジャーの内側でこ、こすれて……痛いくらい、でし、た……はああっ」
ガーネットが熱い吐息を途切れ途切れにこぼしている。
「お、おい、だいじょうぶか？」
「は、はい……でも、学園での自分の様子を思い出していたら、なんだか、身体が熱くなってきて、それで……」
ひょっとして——オレはすかさず腕を彼女の乳房へと回して、搾乳作業を再開した。
「——んんふぅっ！」
乳房の先端から勢いよく母乳が幾筋も噴き出し、土鍋の中へと降り注ぐ。
おおっ、復活だ——というか、さっきよりもよく出てないか？
「もしかしてガーネット、興奮してる？」
「わかりません……でも、恥ずかしいのに……なぜだか、気持ち、よくて……ふうっ」
「へえ～、気持ちいいんだ……オレにこうして大きくなった胸を搾らせておいて、ガーネットだけ気持ちいい思いしてるのかぁ……ふーん」
「えっ……そ、それは……」
わざとらしく鷹揚な口調で耳元にささやくと、ガーネットは戸惑う素振りを見せる。

「こんな風にさ、牛みたいに乳搾りされて感じるなんて、やっぱりガーネットはいやらしいんだな」
「ち、違いますっ……わ、わたし……そんな、感じて、なん、か……」
たちまちガーネットは耳まで真っ赤になってオレの言葉を否定する。
「いいや、感じてるさ。その証拠にほら、さっきよりずっと勢いも量もすごくなってるじゃないか」
「ふああ……そ、そんなこと……ない……んふうっ！　んんっ！」
駄々をこねる子供のように首をいやいやと振ってガーネットは否定するが、その胸から搾り出される母乳はさらに量を増してゆく。
そんな彼女の乱れる様にオレも次第に興奮してきた。もっともっと乱れて欲しくて、耳元で苛めるための言葉を畳み掛けていく。
「ほら、土鍋にもうあんなに溜まっているぜ。このままじゃすぐあふれちまうだろうな」
「い、いやあっ……そんなこと、言わないで、下さい……ああんっ、はあっ！」
「なあ、本当はもう胸だけじゃ満足できないんだろう？」
「えっ……そ、そんな……ふああ、ああんっ！」
搾乳作業そっちのけで片方の手でガーネットの制服のスカートの裾をたくし上げると、股間に指を伸ばす。
「ほら、やっぱりもうここはぐっしょり濡れてるじゃん。感じてたんじゃないか」
「そ、それは……」

揺るぎない事実を突きつけられてしゅんと肩を落とすガーネット。
「ご、ごめんなさい……本当はとっても気持ちよくなって……感じてました」
「うむ。素直でよろしい」
「で、でも……オザキくんだって……ほら」
ガーネットの白い手がいきなりオレのズボンの股間に伸びる。
「オザキくんのココ、大きく、硬くなってますよ……？」
……はい、おっしゃるとおりです。ガーネットの乱れる様を見ていてすっかり臨戦態勢になっちゃってます。
「いいかな、ガーネット？」
「はい……オザキくんのしたいようにしてください」
ガーネットの微笑みがまぶしかった。
「それじゃあ、四つん這いになってくれるかな」
彼女をベッドの上で四つん這いにさせて、ちょうど胸の真下に土鍋が来るようにする。
「こ、こうですか……恥ずかしい、です」
続いてスカートごと下着を下ろす。あらわになった下肢の付け根の花弁からは滾々と蜜が溢れて腿のあたりをべとべとに汚していた。
「それじゃ、いくよ」

いきり立ったペニスを、とろとろにとろけたガーネットの中心に突き立てた。
「んっ……んんふうっ！」
抵抗なくオレのものを受け入れたガーネットの背中がきゅうっと弓なりになる。
「ああ……オザキくん……すごい、すごいです……んふうっ」
「それじゃ、こっちもいくよ」
「えっ……ふああっ！　な、何を——ああっ⁉」
オレは彼女の背中に覆い被さるように身体を密着させると、下を向いている左右の乳房をわしづかみにした。
「ま、まさか……」
「ふっふっふ。そう、そのまさかだ——そぉれっ！」
腰を打ちつけるのと同時に、左右の手でガーネットの搾乳を再開すると、内側の肉襞が驚いたようにぎゅっと締め付けてくる。
「やああっ！　そ、そんな……おっぱいとあそこ、いっぺんになんて……んんっ！　んふうっ！ふああっ！」
ホンモノの牛の乳搾りよろしくたわわな胸から搾り出された母乳が、真下に置かれた土鍋に溜まっていく。
「ああっ！　はあっ！　わ、わたし……オザキくんに、い、挿入れられながら、こんなに母乳出し

てる……はああ、はあっ……ああっ！」
　自分の胸元から音を立てて注がれている白い液体を見つめるガーネットの眼はどこか夢でも見ているかのようにとろんとしていた。
「はあっ、はあっ……す、すごい、頭……真っ白に、なっちゃう……何も……何も考えられなくなっちゃう……！」
「ガーネット、自分の吸ったことある？」
「えっ……んっ、んんっ！」
　オレはわしづかみにした右の乳房ごと持ち上げると、その先端をガーネットの口元に持っていく。最初はとまどっていたガーネットだったが、やがて硬くしこった乳首を口に含んで、乳飲み子のように吸い上げた。
「んあ……んちゅっ……んちゅ、ぷふわぁっ……き、気持ちいいです……自分の乳首、ちゅうちゅうするの、いいっ……ああはあっ！」
　熱くぬかるんだガーネットの内側はなおもオレのペニスをぎゅうぎゅうと締め付け、一刻も早い射精を促してくる。
「ガーネット……そろそろ、いいかな？」
「は、はいっ……き、来て、下さ……ああっ！　お、お願いします……はあんっ！」
　ガーネットの同意を得たオレは彼女の腰を抱えるようにして密着させると、より深いところに向

かって打ちつける。もちろん搾乳も続けたままだ。

「あぁっ！　あはあぁっ！　おっぱいとあそこ……いっしょに何か来ます……んんっ……オ、オザキくん……こんな、いやらしいわたし……嫌いに、ならないで……ふあああっ！」

「嫌いになんかなるもんか——こんな風に乱れるガーネットは、オレだけの……んんっ！」

何かちりちりとした感覚が、彼女とつながった部分から脊髄を経由して頭の中で破裂寸前だ——。

「ガーネット、行くぞ——‼」

「は、はいっ！　き、来てぇっ！　来て下さいぃっ——はっ、はあっ、はっ、ああっ——ふああっ……んああああああああ——っ‼」

頭の中で快感がぱあんと弾けたその瞬間、オレはペニスを彼女の中から引き抜く。

びくびくと大きく痙攣しながら外に躍り出たペニスの先端から、彼女の母乳の色とは違う白濁した熱い液体がびゅるびゅると放たれ、背中に跡を刻んでゆく。

同時に胸からも、まるで射精のように母乳が搾り出されていった。

「ふあ……あああ……オザキくん……キスして、ください……んふっ」

ガーネットに言われるまま、オレは名残を惜しむように彼女の唇を奪った。

「胸の苦しいのは治ったか？」

「は、はい……オザキくんのおかげで全部搾れたみたいです……」

こころなしかガーネットはすっきりとした表情でオレに告げた。
「しかしまあ、よくこんなに溜めてたよなぁ」
「は、はい……どうしましょう、これ」
オレたちの前に置かれた土鍋には、なみなみと白い液体が注がれている。
「うーん……さしあたって、ちょっと味見してもいいかな？」
搾乳作業中は搾ることに集中していたので、味わうチャンスがなかったのだ。
オレは指を立てて土鍋の中に浸すと、そのまま口の中に含む。
「ど、どうですか、わたしの母乳……」
「――――ん⁉　んんん！　ンマ――イっ‼」
初めて味わう感動の味に思わず天を仰いで叫ぶと、さらに指を浸してちゅうちゅうと吸い上げた。
「な、なんだこれ⁉　甘くて、身体がポカポカしてきて……すっげぇ幸せな気分になってくるぞ？」
ひと口飲んだだけで止まらなくなる中毒性の味とでもいうんだろうか。もう指を浸してちまちま飲むなんてガマンできない。たまらずオレは土鍋を掴み、直接口をつけてゴクゴクと音を立てて飲み出した。
「あ、ああ……オザキくん？」
「んぐ、んぐ、んぐう……ぷっひゃあああ！　ごちそーさまぁぁ――っ‼」

土鍋の中の母乳を瞬く間に全部飲み干すと、オレはもう一度天を仰いで歓喜の叫びを上げた。
なんだろう……この全身を包む至福感……天井を突き抜けるくらいハイになって、もうどーにでもなれって気分になって……。
「……？　オザキくん、ど、どうしましたか？」
ガーネットの声もどこか夢の中みたいに響いて……あ、あれ？　なんだ、景色がぐるぐる回り始めたぞ？　ぐるぐるぐるぐるぐるぐる……止まらないや。
「オ、オザキくん!!　しっかりしてください！　オザキくん！」
あれれ、ガーネットもぐるぐる回ってるぞ？　なんだよ、そんな涙ぼろぼろこぼして？
ああ……それにしても気持ちいいなぁ……。

×　×　×

「————って、ちょっと待て！」
次に眼が覚めたとき、オレはお約束どおり神様のテレビの前にいた。
「な、なんだよ、今回のオチは!!」
オレは立ち上がると巨大なテレビの画面に向かって叫ぶ。
「ガーネットの母乳が毒だったとかいうなよ!!　おい、神様!!」

すると、テレビの電源が入り砂嵐の画面の向こうから神様が現われる。
「オ……オマエかよ」
出てきたのは幼女でも眉毛犬でもない、オオアリクイだった。
「おい、どういうことか説明しろよ！」
しかし神様（オオアリクイ）はぼーっとしたまま微動だにしない。
「聞いてんのかよ、おい！」
やがて神様（オオアリクイ）は肩に掛けた通園カバンからスケッチブックのような冊子を取り出し、オレに向けてめくって見せた。おまえはあるあるネタをやる若手芸人か。
『今回のオチですが……』
『うんこマンが持って来た土鍋が原因なのです』
「はあ……？」
『あの土鍋で前の夜、アリデッドがひとり闇鍋パーティをやったのです』
神様（オオアリクイ）は淡々とスケッチブックをめくる。
『そのとき材料にいろいろと危ないものが入ったようで、その残り成分がガーネットの母乳と予測不可能の化学反応を起こし、猛毒に変化したため、あなたは死んでしまったのです』
なーんだ、そーなのかぁ。こいつは一本取られちゃったなぁ、ははは……。
「――なんて、納得できるかぁぁ――っ！　なんだその無茶苦茶いい加減な理由は⁉」

『死にオチを考えるのも大変なんだから、大目に見てよ』
「そんなしれっと内幕ばらしてんじゃねぇよ！　とにかく、オレは絶対甦ってやるからなぁぁぁぁ
――――っ!!」
オレの魂の叫びが無人の天国にいつまでも響き渡った。

【第三話　おしまい】

コトロプラス劇場
STAR MINE GIRL
Adult Channel

Stop the MeGalo mania

その日、オレは日下部と樋ヶの二人と共に、新聞部の校外取材活動についていた。
昨日の夜中、駐屯地を極秘裏に出発した自衛軍の一個中隊があったというタレコミをキャッチして、その裏を取るために周辺の住民に聞き込みに回っているのだ。
「……それで、自衛軍の連中はどちらへ」
目撃者のひとりであるオバちゃんに淡々と質問を重ねる日下部。すっかりジャーナリストの目をしている。
「ああ、この先の交差点をゾロゾロ左折してったわよ。その後はわかんないけどねぇ」
「オザキさん、地図であの方向に何があるか、確認を」
日下部に言われて、オレは手にした地図を広げて確認する。
「ええと……特に目立つ建物は……いや待て」
「なんかあんの？」
「あの交差点の三〇〇メートルくらい先に、おあつらえ向きにミラの家があるな」
ふむ、と小さく唸って日下部は思案に耽(ふけ)る。
「——ミラさんの家ということは、襟在次郎(きんざいじろう)さんの研究所ですね」
「自衛軍の行き先にあのお化け屋敷なんて、あからさまに怪しいですよ、部長」
新聞部員としての長年の取材勘からなのか、樋ヶも同意を示す。
「自衛軍と天才マッドサイエンティスト二郎さんが、兄の襟在一郎(いちろう)氏の仲介で秘かに関係を修復し

たという噂、どうやら真実なのかもしれません……」
　深く思慮に耽る日下部。
「深夜……密会……逢引……」
「……は？」
　オレと樋ヶは思わず顔を見合わせる。
「あ、逢引……深夜の逢引……人目を忍んで会わなければならない……つ、つまりふたりの関係は、ふ、ふ、不倫――⁉」
　お互い言葉には出さなかったが、おそらく同じことを思っていたはずだ。「あーあ、また始まっちまった」と。
「……ああっ、いけませんわっ、わたしには夫と子供が――そんなこと、関係ありません。ぼ、ぼくは奥さんのことが――ああっ、そ、そんな、どこ触っているの⁉　いやっ、やめてぇぇっ、堪忍してぇぇ～～っ！」
　さっきまでの理知的な表情はどこへやら、鼻の穴をおっぴろげてもふーもふーと鼻息荒くすっかり妄想に浸（ひた）って暴走し始める日下部。
「お、落ち着いて！　落ち着いてください、部長っ！」
「ぶぶ、部長っ⁉　わわ、わたしは部長の妻っ！　あなたは平社員～っ！」
　制止に入った樋ヶの声も、却（かえ）って火に油をドンドコ注いでしまった。

「やめてっ！　夫がっ！　主人が帰ってきますっ！　ああっ！」
日下部の妄想は留まるところを知らず、ついには我を失う。
「むふー！　むふー！」
「ちょ！　ちょっと、落ち着いてくださいっ、部長⁉」
慌てふためく樋ヶが後ろから羽交い絞めにして止めようとするが、この小さい身体のどこにこんなパワーがあるのかというほどの力に邪魔されて、それすらままならない。
「オ、オ、オザキくん！　あんた、何とかしなさいよぉっ⁉」
いや、何とかしたいのは山々なんだが、こんなとき下手に日下部に触れようものなら、ますます妄想を暴走させてしまうだろう。
「いやあ、最近の若いコは大胆だねぇ～」
日下部の豹変とオレと樋ヶの狼狽ぶりを眺めていたオバさんがカラカラと笑ってくれたのが唯一の救いだった。

何とか落ち着きを取り戻した日下部だったが、さすがに妄想に身を任せて取材を中断させてしまったのを恥じたのか、そそくさとひとり学園に帰ってしまった。
もちろんオレもいっしょに、と声をかけたのだが、沈んだ声で「今はひとりにしておいてくださ い」と言われてはムリについて行くことも出来なかった。

「はあ……しかしなんつーか、疲れる取材だったな」

樋ヶとともに部室に戻る途中、つい気が緩んでそんなことを口にしたオレに対して、樋ヶはつかつかと歩み寄り、びしっと指差し警告する。

「ちょっとオザキくん、アンタのせいよ」

「は、はい～？」

「部長の妄想癖が間違った方向に増大したのは、絶対アンタのせいだって」

「オ、オレの？」

樋ヶに指摘されるまでもなく、そこらへんのことはオレ自身痛感している。

元々常人離れした「妄想力」だった彼女が、オレと付き合うことでさらなる深みにハマっているのはまぎれもない事実なワケで――つまり、妄想のその先を教えちゃったのだ。

その結果、日下部の妄想力はリミットを越えてしばしば暴走、今日のように新聞部の活動にも影響が出始めている。

「特に最近、部長の暴走が目立つせいもあって、生徒会の監視が厳しいのよ」

元々この部を正式な部活動として認めていない生徒会執行部とは犬猿の仲だ。特に生徒会長の沖姫々は何かといえば難癖をつけて「お取り潰し」の隙を伺っているのだと、日下部は主張している。

「だから部長にはできるだけ暴走して欲しくないわけ。これってアタシ以下新聞部の切実な願いよ」

「ああ、わかっているよ」

「でもって、部長がおとなしく言うこと聞くのはオザキくん、アンタだけなんだからね。そこらへん、ちゃんとコントロールしてくれないと」
「そうだな。オレからきちんと話してみるよ」
かくして、彼女の妄想癖を諫めるお役が回ってきたというわけだ。
「――というわけで、日下部。しばらく妄想禁止な」
オレひとりで部室に戻ると、先に戻っていた日下部に単刀直入に告げた。
「はい、わかりました」
「いや、おまえが拒否するのもわかる。しかし、ここはだな」
「拒否などしていませんが?」
「え? あ、いや、その……ホントにいいのか?」
もっとなんだかんだと理屈をつけて拒否してくるとばかり思っていたので、こんなにストレートに受け入れられてしまって、拍子抜けもいいところだ。
「わたしの妄想によって新聞部の取材活動に支障が出ているのは、紛れもない事実です。部長自らこのザマでは、他の部員や協力者たちに示しがつきません」
だが思っていたよりずっと冷静に、日下部は今の自分の立場というものを分析している。さすが取材方法に若干問題はあってもそこはジャーナリストだ。
「とにかく、少なくとも取材活動中は妄想を暴走させないように努力します」

「そ、そうだな。がんばれよ」
彼女の妄想癖をふくらませているひとりとしては、彼女の固い決意が完遂できるように手助けがしたい。何かいい方法はないものか……。
「――そうだ。なあ日下部、写真撮ってくれ」
「はい？」
「な、いいだろ？　早く早く」
「わ、わかりました――はい、チーズ」
彼女の指がカメラのシャッターを切る瞬間、オレは今までの人生の中で誰にも見せたことがない、一番バカバカしくてヘンで情けない顔を作ってみせる。
「……ぷ。ぷぷっ」
おそらく日下部以外の人間に見られたら一生お婿に行けないくらいの最高傑作だった。
さすがにクールな彼女も思わず吹いてしまう、いいバカ面が撮れたようだ。
「なな、何ですか今の莫迦面は!?　と、撮り直しますよ？」
もう一度カメラを構え直す日下部を制する。
「いいんだよ、バカ面で。それを現像して、肌身離さず持っていてくれ」
「こ、こんなヘンな顔をしている写真を、ですか？」
「ああ。もし何かえっちな妄想に走りそうなときは、今の顔が映った写真を見るんだ」

「はあ……なるほど、こんな顔を見せられては百年の恋も一瞬で覚めそうです」
さすがに妄想の中とはいえ、あんなバカ面の男とエッチな気分にはならないだろう。我ながら文字通り捨て身の作戦だが、彼女の妄想癖が少しでも落ち着いてくれればどうってことはない。
「もちろん、オレがいっしょのときはできる限り妄想を打ち消すように協力する。だからしばらくの間、チャレンジしてみようぜ？」
「わかりました。オザキさん、あなたがいっしょなら心強いです」
興奮した時以外はめったに変わらない日下部の表情がちょっとだけ緩む。おそらくオレしか知らない彼女の微笑だった。

それからというもの、オレは日下部といっしょに取材活動をする機会が増えた。
妄想を止めようとする彼女の決心を疑っているわけじゃないが、何かあったときにはオレがいっしょにいた方が便利だろうという樋ヶの配慮によるものだった。
この日も自衛軍の謎の極秘行動についてのウラを取るため、ふたりで校外での取材活動をしていた。しかし、そうそうスクープが街中に転がっているわけじゃない。特にこれといった成果もないまま夕暮れになっていた。
「ちょっと休憩しようぜ」
「はい……」

　オレたちは川沿いの遊歩道にあるベンチに腰掛けた。
「どうよ、妄想は止まっているのか？」
「はい。おかげさまで」
「それはよかった。やればできるじゃないか」
　川面をぼおっと眺めながら会話するオレと日下部。
「おまえの妄想が暴走しなくなってから、新聞部の評判もよくなっているみたいだぜ？」
「噂はいろいろと……特にあの生徒会長の沖姫々までもが、問題を起こさなければ新聞部を正式な部活動として認可してもよいと言い出しているようですね」
「おおっ、すげーじゃん！」
　ついに犬猿の仲だった生徒会とも和解となれば、これまでみたいにゲリラ的じゃなく大手を振って取材活動もできるというもんだ。
「もっとも、あの絶壁会長率いる生徒会のお抱え新聞になるつもりは毛頭ありませんが」
「ああ、やっぱり……」
　新聞部と生徒会の対立はつまるところ、日下部と沖の個人的な対立に集約されるような気がする。高い戦闘力にいつでも筋を通すガンコさ、そしてなぜか人をひきつけるカリスマ性という点でふたりはよく似ていると思うんだが。
「やはり埋めがたい胸の差が和解を遠ざけているのか……」

「何か言いましたか、オザキさん」
「いや、別に」

それからもオレと日下部の取材は続いた。
「やっぱり、自衛軍は二郎と接触を……！」
足で稼いだ取材の結果、匿名（とくめい）を条件に内通者と接触、ついにスクープのウラを取ることができたのだ。
「やったな、日下部！」
「はい、明日の学園新聞、一面はこれで決まりです」
日下部もひと仕事やり終えた充実感を噛み締めるように、口元に笑みを浮かべている。
「これもオザキさんのフォローがあったからこそです。ありがとうございます」
「いやいや、オレは何にもしてないさ」
「いいえ、オザキさんがいなければ今回のスクープは……」
なにごとか言いかけて、日下部が口をつぐむ。
「ん？　どうした日下部？」
「スクープ……特ダネ……特別なネタ……ネタ……寝る……」
しまった！　つい気が緩んだのか妄想が始まっている。

「お、落ち着け、日下部？」

「寝る……オ、オオ、オザキさんと、寝る……は、はふー……ベッドの上で、くんずほぐれつ……絡み合う肉と肉、飛び散る汗……ほぉぉぉーっ⁉」

「日下部、写真だ、写真！」

妄想ループに陥る寸前の日下部をオレは懸命に押し留めようと叫ぶ。

「⁉　しゃ、写真――」

オレの声を聞いた日下部は、そそくさと制服のポケットから例のヘン顔写真を取り出し、凝視した。

「……ぷふっ。こ、これは……」

思わず噴き出した日下部は我に返り、冷静さを取り戻す。

「す、すみませんオザキさん。またしても妄想を暴走させるところでした」

「いいっていいって。こうやって踏み止まってくれたんだからな」

「は、はい……」

そのとき、日下部がどこか戸惑うような表情を浮かべていたことに、まだオレは気付いてはいなかった。

そして翌日。

自衛軍が在野の天才マッドサイエンティスト襟在次郎博士と新兵器開発で接触を図っていたというスクープ記事は学園新聞のトップを飾り、学園の生徒のみならず伊都夏市民全体に驚きを持って迎えられた。

早速、自衛軍指揮官でもある沖が「記事は事実無根」と抗議に来たが、無論こちらもウラは取ってあるということで彼女も今日のところは引き上げるしかなかった。

その日の放課後、久々の改心のスクープに樋ヶ以下新聞部員たちも満足げに部室に集まっていた。

「やっぱアンタと部長を組ませて正解だったわ！　これからも頼んだわよ！」

いつになく樋ヶは上機嫌だった。

「いやいや、今回一番の功労者は誰がなんと言おうとやっぱり日下部だよ！」

オレもついうれしくなって日下部の手を取って喜びを分かち合おうとした。

「日下部、おまえは本当によくがんばった！」

「え？」

取材に打ち込んでいる姿はなんと言うか、その……ちょっと感動した。どこから報酬が出ているわけでもないが、作っている日下部たちが紙面に注ぐ情熱は決してプロにも負けるものではないって、オレは改めて実感している。

「そ、そんな……おだてても何も出ませんよ」

「おだててなんかないさ。よしよし、えらいぞっ」

眼の前の日下部が愛しくて、小さい子供をホメるみたいに頭をグリグリ撫でてやる。
「――!? ちょ、ちょっと、オオ、オザキさんっ!?」
こんな風にしてホメられることに慣れていないのか、日下部はビックリした表情を浮かべながら真っ赤になっている。
「こ、子供じゃないんですから、やめ、やめて……」
「テレることないじゃないか。ホレホレ♪」
戸惑う日下部なんてめったに見られないから、つい楽しくて髪の毛を撫でまわす。
「あ、あうう……ううっ」
日下部は耳の先まで赤くなっていた。意外にウブっていうか、かわいいもんだな。
「そんなにグリグリされてうれしいのか？」
「ち、違いま違います……こ、ここ、これ以上、オオオ、オザキさんに、触られたらたらたら……」
「いいじゃん、しばらくスキンシップしてなかったんだし」
「あわわ、わわわわ、わわわ」
まるでスクラッチしたレコードみたいな口調の日下部が手足をばたつかせている。
「わわわ、わたし、もももももお……」
「お、おい、日下部……？」
――ぷっしゃぁぁぁぁぁ――っ!?

突然何かが噴き出した音がしたかと思うと、日下部がゆっくり後ろへと倒れた――真っ赤な軌跡を描いて。
「――⁉　く、日下部⁉」
「部長――っ⁉」
オレは慌てて腕を伸ばし日下部の身体を抱きとめる。
「あ、あうううう……も、もう、限界です……むふー……」
視線を虚空にさまよわせて卒倒した日下部の鼻から、ドクドクと紅い滝が勢いよく流れ落ちていた。赤い軌跡はこいつだったのか……って、おいっ！　こんな派手に流しちゃ絶対致死量だって！
「ぶ、部長⁉　しっかりしてください！」
「ひ、樋ヶ特派員……あ、あとのことは……がくっ」
樋ヶに何か伝えようとして、日下部はがくりと頭を崩した。
「お、おい！　日下部――っ‼」

オレたちは大急ぎで日下部を学園の保健室へ連れて来た。
幸いベッドに寝かせる頃には意識も戻っていた。保険の先生によれば、のぼせた頭をしばらく冷やしておけばだいじょうぶということだった。
「それじゃ、あとはまかせたわよ」

部長の無事を確認すると、樋ヶたち新聞部員は取材の後片付けに戻ったので、保健室にはオレと日下部だけが残った。
「入るぞ、日下部」
「は、はひ……」
カーテンで区切られた一角に入ると、ベッドに日下部が横になっていた。額にはレトロなデザインの氷嚢(ひょうのう)を乗せている。
「どうだ、調子は？」
「はひ……もお、だひぢょーぶです」
左右の鼻の穴に鼻血止めの脱脂綿が入ったままなので、日下部の返事は極端な鼻声になっていた。
「しかしまあ、派手に出したなぁ。鼻血はよく出すのか？」
「い、いいへ。自分でもひょっとおろろいてます……」
まだまともに顔を合わせるのが恥ずかしいのか、顔半分を布団で覆い隠したまま答える日下部。
「で、鼻血の原因は――やっぱりオレか？」
オレの問い掛けに日下部はこくりと小さくうなずいた。
「おおかた、妄想を無理やりガマンしているところに、オレが気安く触ったりしたもんだから思わず興奮しちまった……ってとこか」
「はひ……」

申し訳なさそうに小さな声で答える日下部。
「すまなかった――ゴメン！」
オレは日下部に向かって深々と頭を下げた。
「まさかおまえが、そこまで思い詰めているとは知らなかった――本当にゴメン！」
「い、いへ、そんな、オザキさんが謝る、なんへ……！」
日下部はオレを気遣ってくれるが、でも今回の件はまずこっちが謝らなくちゃ。
「オレたち、おまえの気持ちも考えないで、一方的に妄想禁止なんて押し付けちまったんだよな。エッチな妄想も、消火器を持った破壊衝動も封じられて、おまえはムリして今日まで自分を押さえつけてきた」
日下部は困ったような表情を浮かべたまま肯定も否定もしない。
「だから、本当に悪かったと思ってる……すまなかった」
彼女のためを思ってやったこととはいえ、それが彼女を追い込んでしまったんだ。
オレはもう一度膝頭におでこがつくくらい身体を折り曲げて、日下部に謝罪した。
「あ、頭を上げてくださひ、オザキさん。あ、謝らなくてはひけなひのは、わらひです」
「え？　で、でも……」
「わらひ、オザキさんとの約束を破ってしまひまひた……はひ」
申し訳なさそうに頭(こうべ)を垂れて、日下部はベッドの上にちょこんと正座した。

「昼間、学園でオザキさんとひっしょにひるときはなんとか我慢ひていたんですが、夜ひとりになると、その、ですね……」
さすがにその先は言いあぐねるのか、日下部は真っ赤になってごにょごにょ口ごもる。
「ちょ、ちょっと待て。そんなときのために、ヘン顔のオレの写真を……」
「はひ、たひかに最初は効果があったのですが、そのうひ慣れてきたといいますか、これはこれでなかなか味があるものだと……」
「ま、まさか、おまえ」
「ええ、こんな顔のオザキさんに攻められるのを想像したら、ものすごく興奮してひまって、つい……」
いやいや、いくらなんでもそれはないだろ？　あんな一世一代のヘン顔を、よりによって妄想のオカズにされるなんて……はあ。
「そ、そんなわけで、オザキさんとの約束を破ってしまったわらひこそ、謝らなくてはならなひのです。幻滅ひまひた？　ひまひたよね、ひっと……」
自嘲気味に口許に笑みを浮かべる日下部。
「我ながら意志の弱さに愕然（がくぜん）とひてひます。これでは部長失格ですね」
「日下部……」
「でも……大切な約束を破ってまで……たとえ妄想の中だけでも、オザキさんに抱きひめて欲ひか

ったんです……ごめんなさい」
なんでだろう。ベッドの上で恥ずかしそうにもじもじしながら上目遣いでオレを見ている彼女がたまらなく愛しかった。
オレは彼女の妄想が暴走して周りに迷惑をかけないようにと、あえて禁止令を出した。
でも、「妄想」ってそんなに悪いことなのか？　誰だって「こうなりたい」とか、「こうありたい」と想像して、少しでもその姿に近付きたいと願う。そんな「夢想」と日下部の「妄想」のいったいどこが違うって言うんだ……？
「そうだよな、オレだって妄想するもんなぁ……」
「え？」
オレはためらうことなくベッドの上に座った日下部の身体をぎゅっと抱きしめていた。
「あ……あ、あの、オザキ……さん？　こ、これは……!?」
「今、この瞬間から妄想解禁だ。好きなだけ妄想してくれ」
「え？　で、でも、それじゃ……」
「オレだってこうしてずっと抱きしめたかった。でも、日下部が我慢しているときに、オレの方から誘うようなことしちゃダメだって自制して、仕方ないから『妄想』してたんだ、ずっと……！」
オレの告白にはっと顔を上げる日下部。
「ほ、本当に、妄想ひてもよいのですね？　わたしのこと、嫌いになりませんか……？」

まだ半信半疑の日下部に、オレはガツンと本音をぶつける。
「き、嫌いになんかなるもんかよ！　妄想が暴走するところも全部まとめて、オレはおまえに惚れているんだって、いまさらながら気付いちまったんだからな」
「む……むむむ……むほぉぉぉ――っ‼」
意味不明の雄叫びを上げた日下部の鼻から、脱脂綿が鼻息でぽーんと吹き飛んだ。
普通の恋人なら百年の恋も醒める瞬間かもしれないが、もちろんオレには何の問題もない。むしろよりいっそう愛しく感じられてしまう。
「むほおおお――っ！　妄・想・全・開（メガロマニアック・フルスロットル）――っ‼」
いつの間にかベッドの上に仁王立ちになった日下部の頭上には、見慣れた必殺武器の消火器が掲げられていた。
「お、落ち着け！　妄想はいいから、とにかく落ち着けっ！」
「あたかも、ここは保健室！　しかもここにいるのはわ、わたしとオザキさんのふたりだけっ！　はあっ、はあはあっ……」
たまりにたまった鬱憤（うっぷん）を一気に晴らそうとするその眼は、もはや野獣の眼差しだった。
「オザキさんっ！」
「はいっ」
そんな眼で見つめられて、知らないうちに背筋はピンと伸びて直立不動になっている。

「今すぐこれを着て下さいっ！」
日下部が消化器の代わりに取り出したのは、保険の先生が着ている白衣だった。
「な、なにゆえこれを⁉」
「妄想の補完に必要不可欠なのです！」
鼻息荒い日下部に押し切られて、やむなくオレは白衣に袖（そで）を通す。
「ふむ、あまり知的には見せませんが、まあそこは妥協しておきましょう」
「は、はあ」
なんか微妙にひどいこと言われてないか、オレ？
「では、わたしも」
日下部は首もとのリボンをするすると解くと、マントを翻（ひるがえ）すように制服を引き剥がす。
「！　お、おい、日下部――⁉」
中から現われたのは下着――ではなく、絶対に実用的じゃないかわいらしいデザインのピンクのナースキャップ&ナース服だった。
宮本曰く「メイド・イン・ジャパン」の日下部がぴっちぴちでボディラインを強調するかのようなナース服なんて着ているものだから、かなりエロい。
「あ、あの……日下部……さん？」
「先生っ、ふたりきりの時は下の名前で呼んでって約束でしょ」

「せ、先生……？」
あ、そうか。要するにここは病院か何かで、若くて有能な医師（配役・オレ）と看護師（配役・日下部）というシチュエーションなわけね。ＯＫＯＫ、妄想設定、了解だ。
「あ、雨火。そこに座りなさい」
ベッドのそばのパイプ椅子に日下部を座らせる。
「なんだね、このぼくに折り入ってのお願いとは」
「え、ええ……じ、実は……久しくせせ、先生に『アレ』してもらえてなくて……そ、そのぉ……身体が、疼いて仕方ないんですっ」
日下部はもじもじしながら上目遣いでオレになにやらおねだりしている。
「ア、アレって？」
「ももも、もう、忘れてしまったんですか？」
もちろんこんな話を聞かされるのは初めてだから聞き返したのだが、すっかり妄想に浸った日下部にはわざと焦らしているように受け取られてしまった。
「アレというのは……ききき、緊縛プレイですっ！」
「き、緊縛～～っ!?」
緊縛ってアレだよな、肉体を縄とかできっつく縛ることで快感を得ることだよな？
「さあ、さあ、レッツプレイウイズミー!!」

鼻息荒くオレに迫る日下部に手には縄――ではなく、ロール状の包帯が握られている。なるほど病院だけに包帯ねぇ……なんて、感心している場合じゃない。
「あ、あの、縛るっていってもオレ、やり方知らないぞ？」
「わわ、わたしが懇切丁寧（こんせつていねい）に指示しますからっ、オザキ先生は、それにしたがってくださいっ！」
戸惑いながらもオレは日下部から手渡された包帯を手に、生まれて初めての緊縛にチャレンジする。
「まず首が通るくらいの輪を先端に作って……そうです。そ、それをわたしの首にかけて……はい、それから脇の下にまわして……」
日下部の適切な指示のおかげで、ものの五分と掛からないうちに日下部は椅子の上でM字開脚のまま白い包帯に緊縛されてしまった。
「う、ううっ……」
きつく縛られた痛みかそれとも喜びか、日下部の口からうめき声が溢れる。
「あ……ああっ、わ、わたし……縛られてる……オザキさんに縛られて、見られてる……はあっ、はっ……はああっ……」
うっとりした眼差しで虚空を見つめながら、M字開脚の日下部が身悶える。
「オレに見られて、そんなに興奮する？」
「は、はい……オザキさんの、えっちな視線で、あ、穴が開くくらいじっと見られていると……あ

あっ」
　オレの前にさらされた縞模様(しまもよう)のショーツのクロッチにじんわりとシミが浮き上がる。
「オ、オザキさん……お願いです。もっと、縛ってください……もっとぉ」
「よし、それじゃあ」
　先ほどの日下部のレクチャーで何となく基本的な縛りのパターンはわかったので、今度はオレなりに自由に縛ってみる。
「あ……そ、そんな、胸を……」
　日下部の小さい身体にはちょっと不釣合いなサイズの胸を強調するように、包帯をたすきがけにして縛る。
「い、いいですぅ……胸、ぎゅっと搾られてるみたいで……ふああっ」
　日下部が小さく身体をゆするたびに、押し出され強調されるように縛られた胸がたゆんと揺れる様が艶(なまめ)かしかった。
　そんな彼女の様子を、オレは少し離れた場所からじっと見ている。
「ふあ、ああっ……オザキ、さん……？」
　手を触れることもなく、ただ傍観を決め込んでいるようなオレに日下部はすがるような眼で訴えるが、あえて何もしない。
「ど、どうしたん、ですか……オザキさん……触って、ください……」

椅子の上、包帯で身体中を縛られたナース服の彼女がM字開脚で鎮座しているという異様な光景の中、オレはニヤニヤしながら何もせずただ彼女の痴態を眺めるだけ。

「あ、あはっ……お、お願いです。触って……触ってぇぇ……はあぁっ」

何もされないもどかしさに、日下部は身悶えしながらオレに哀願してくる。

「触って欲しいって、どこ？」

「そ、それは……全部です。胸も……腰も……あ、あそこ、も……」

「そんなに欲しいんだ。日下部ってやっぱエロいな」

「は、はいぃ……わ、わたし、エロい……めちゃめちゃエロですぅぅ……ふうぅっ」

「よし、よく言えました」

これ以上焦らしてもかわいそうだ。オレは日下部に歩み寄ると、縛られた姿勢のままベッドの上にコロンと転がす。

「それじゃあ、日下部のエロいのをオレの極太注射で治療してやろう……なんつってな！」

オレとしてはちょいと小粋なジョークで和ませてやろうと思っての発言だった。

「……腐臭がするくらいのオヤジギャグですね……はあ」

しかし日下部の反応は冷たいものだった。

「と、とにかく行くぞ、このエロナース！」

包帯で縛られたままの日下部をうつぶせにひっくり返して、ショーツを一気に膝の辺りまで引

きずり下ろす。
「あっ……オ、オザキさんに……わたしの恥ずかしい、ところ……間近で見られて……ひああっ⁉」
眼の前でひくついて蜜をあふれさせている日下部のあそこを舌で愛撫する。もちろんわざと音を立ててだ。
「んんっ！　あ、ああっ――そ、そこ、いいっ！　いいですっ！　もっと、もっとぺろぺろしてくださいっ！」
蜜の味とか匂いよりも、愛撫することで敏感に反応してみせる日下部のしどけない姿にそそられ、オレも舌全体を使って音を立て愛撫するという行為にひたすら没頭する。
「ああっ！　オ、オザキさんに舐められてる……学園の保健室で……ふあ、ああっ！」
いつの間にかオレの口の周りや指先は日下部の内側からあふれてきた蜜でべとべとになっていた。もう少し楽しんでいたい気もするけれど、次の行為に移ろう。
「それじゃあ日下部、行くぞ」
「は……はい」
すっかり準備万端のペニスを濡れそぼった日下部の中心にあてがい、ゆっくりと腰を沈めていく。
「あ……ああっ、お、大きい……んんっ！」
硬く大きくなっていたオレのペニスはあっという間にずぶずぶと日下部の中に呑み込まれていた。
「あ、ああっ……オザキさんのが、わたしの中で大きく、熱くなって……このまま、口から出てき

ちゃいそぉ……」
　そんな残虐系エロゲーみたいな光景は想像したくはないが、とにかくそんな気分になるくらいオレのものは彼女に喜んでもらっているという表現だろう。
「よし、おまえの身体を貫通しちまうくらい激しく突いてやるからな」
「は、はいぃ……んんっ！　んくうううっ！」
　ナース服の腰の辺りを抱えると、後ろから身体ごと押し込めるように突く。
「んああっ！　こ、壊れちゃいますぅっ！　すご……激しいっ！」
　久しぶりに彼女と肌を重ねるせいもあるんだろうか、オレはいつも以上に奥へ奥へと突き進もうとする。
「ああっ！　ふああっ！　ずっと、ずっと妄想してましたぁ……こ、こんな風に、オザキさんに後ろから犯されるのを、ずっとぉ……あっ！　はああっ！」
　包帯に縛られて自由に身動きができない中、日下部は歓喜の声を上げて全身をわななかせる。
「妄想のオレと実際のオレ、どっちがいい？」
　ちょっと意地悪な質問を彼女の耳元でささやいてみる。
「はあっ、はっ……そ、それは……オ、オザキさんはどうなんですか？　妄想のわたしと、今眼の前にいるわたしは……ああっ」
　あ、質問に質問で返すのは反則だぞ。

「そんなの、決まっててんじゃん……！」
オレは答える代わりに、より深いところへとペニスを突き立てた。
「ふあああっ！　はああっ！　わ、わたしも、同じで……ひぃあああっ！」
こんなところでもオレたちの意見は一致していた。心と身体、どちらもベストパートナーってわけだな。
「ああっ、ああっ！　オ、オザキさん！　オザキさんっ！　もお、わたし……イッちゃうっ！　イッちゃいますぅぅっ！」
オレの方もそろそろ限界だ。嬌声を上げるたびきゅうきゅうと締め付ける日下部の膣内に思いっきりぶちまけたい気分だ。
「い、行くぞ、日下部……膣内でいいな？」
「は、はぃっ！　膣内にぃっ！　オザキさんの熱い精液……全部膣内に、下さ……んあっ！　んはあっ！　んんっ！　んっ！」
腕の中にすっぽり収まる日下部の身体を抱き起こし、より深いところへと貫く。
「ひあああっ！　い、いいい、イッちゃうううっ！　オザキさんに犯されてイッちゃうぅ――っ‼」
激しく突き上げる最中、頭と股間で同時に快感の花火がぱあんとはじける。
「くっ！」
ビクン、ビクンと大きく脈打ちながら日下部の膣内でオレのペニスが熱い精を放った。

「んんんっ！　んあああ……あ、あはあ……オザキさん……すご、い……ふあああっ」
ペニスの脈動そのままに身体を痙攣させて、日下部は幸せそうな顔で果てた。

それから何度となくふたりで愛し合い、気がつけば夕闇が降りる時間になっていた。
すっかり疲れ果てた日下部はオレのとなりですやすやと寝息を立てている。長い間妄想を我慢してきた分、一気に放出してしまったのだろう。
（へへへ……こうしてみるとなかなかかわいいよな、日下部って）
その突飛なキャラクターと行動原理ゆえ変人扱いされることの多い日下部だが、なかなかどうして、意外なまでにかわいいもんだと思う。
（しかし、いきなり緊縛プレイとは……また新たな扉を開いてしまったような気が）
寝息を立てる日下部の全身にはまだ包帯が縛られている。ＳＭプレイなんててっきり特殊な領域だと思っていたけれど、こうすることで彼女が気持ちよくなるのなら、ちょっと研究してみたくなってきた。
（例えば……こんな感じかなぁ……）
余っていた包帯を手に、オレは自分自身を実験台にして縛りの練習をしてみる。
（なるほど、こことここが引っ張り合うことで、こっちが締まるというわけか……）
縛られた日下部の全身を見ると、実に合理的に力が作用していることに改めて気付かされる。あ

る意味、幾何学的なのかもしれない。
（ええと、これが首に掛かる？　それで……これは？　いや、こっちじゃなくて……）
見よう見まねで自分の身体を縛っていくうちに、包帯がどんどん絡まって複雑になってしまい、すっかり頭がこんがらがってきた。
（え？　これはどこから来てんだ？　いや、これを引っ張れば……っと⁉）
そのうちオレはバランスを失い、ベッドの上から転げ落ちてしまう。顔面から床に落ちると思ったその瞬間、動きがぴたりと止まった。
「――――ぐっ⁉」
顔面から落下は免れたものの、複雑に絡まった包帯は首元にしっかり巻きついたうえにオレ自身の体重でどんどん締め付けてくる。
「が……はあ……っ」
このままでは窒息してしまう。オレは何とか身体を起こしてベッドの上に戻ろうとするが、絡まった包帯に邪魔されて腕が動かない。それどころか身体を動かそうとすると首元にさらに荷重が掛かって、喉元をぎゅううっと締め付ける。
（お、おい……冗談だ、ろ……？）
この調子じゃひとりではどうにもならない。情けないが日下部を起こして助けてもらおう――そう思ったが、喉元をきつく締め付けられて声も出せない。

（か、はあっ……くさ、か、べ……）

どうにか助けを求めようと手を伸ばすが、隣に寝ているはずの彼女には届かない。眼の前数センチのところにあるリノリウムの床がかすんでやけに遠く見える。

（ウ、ソ……だろ……こ、こんな、ことで……）

オレの脳裏に何度となく経験してきた「あの瞬間」がフラッシュバックする。まさかこんな形でそのときを迎えるなんて、いくらなんでも酷すぎる。

「あ……があ……っ」

苦しい。呼吸が出来ない。眼の前が次第に暗くなる。ウソだ。こんなの、オレは――。

×××

「はあ……今回もまたマヌケな最期でちたね」

お約束どおり、オレはまた天国にいた。

眼の前のテレビでは、神様（幼女）がため息をついてがっかりしている。

「しろうとが安易にきんばくプレイになんて手を出しちゃダメという、いい見本だったたでち。わかったでちか、うんこマン」

いつもなら神様相手でも言いたいことは言わせてもらうオレも、さすがにこの結末には返す言葉

もない。
「おやおや、その様子じゃ相当にこたえてるみたいでちねぇ」
「……ナンも言えねぇ」
「そんなもうみんな忘れているカビの生えた流行語なんていいでち。反省したでちか？」
オレもそう思った。
「さすがに今回は反省したよ」
「本当でちか？　うんこマン、本当に心から反省したでちか？」
「ああ、本当だ。海より深く反省した」
「うーん……」
テレビ画面の向こうからつぶさにオレを観察する神様（幼女）。
「まあいいでち。さっさと次の人生に行くでちよ」
そういうとテレビの中からにゅうっと巨大な神様（幼女）の手が飛び出して、オレの襟首をひょいと掴む。
「ま、またこのパターンかよ」
「文句いわない。それじゃ、いってらっしゃ～い」
文字通り神の御手に弄ばれ、オレは天国を後にした。

【第四話　おしまい】

STAR MINE GIRL
Adult Channel

生徒会長を丸くする為のガイドライン

「なんだよ、折り入っての相談って」
ある日の放課後、オレは沖に呼び出されて生徒会室にやってきた。
「うむ。実はひとつ相談があってな」
純和風・畳敷きの大広間の上座に沖は座ってオレを待っていた。
「相談？　オレに個人的に？」
「そうなるな。まずはこれを見てくれ」
沖が取り出したのは今日付けの学園新聞だった。
「『生徒会に関する意識調査』……？」
「一週間前、学園の全生徒にあんけぇとをしたらしい」
そういえばなんか樋ヶからそんなアンケートが回ってきたっけな。あまり考えないで記入したので内容は覚えてないけれど。
「これからの生徒会はどうあるべきか率直な意見を聞く——あの日下部にしては全うな目的のあんけぇとゆえ、沖も興味深く読んだ。だが……その赤線を引いた箇所を読んでくれ」
赤線が引かれた記事には、生徒会長についての質問がいくつか並んでいる。
「……おおっ、すごいじゃないか、沖！　『現在の生徒会長を支持しますか？』って質問に『はい』が八十一パーセントって、圧倒的じゃないか！」
超低空飛行の支持率で頭を抱えているどこかの国の首相に、爪の垢でも煎じて飲ませてやりたい

ね、こりゃ。

「沖にこれだけの支持があるのはありがたい。だが……次項をよく読んでくれ」

その下には「現在の生徒会長にどのような印象を持っていますか？」という設問がある。

「清廉潔白」「生真面目」「決断力がある」といった褒め言葉がいろいろと並んでいて、それなりに票が入っている。しかしそれより目につくのは、どちらかといえばマイナスのイメージの言葉のほうだった。

曰く「怖い」「近寄りがたい」「親しみやすさがない」「ノリが悪そう」……中には「時代錯誤」とか「冷血女」、「逆らえば即打ち首にされそう」なんてものまであった。

もちろんオレはそんなものは偏見や見当違いだということを知っているが、彼女のことをよく知らない一般の生徒たちからすれば、まだまだこんな間違ったイメージがまかり通ってしまうのだろう。

「新聞部といえど、結果を捏造することはあるまい。それを見てオザキはどう思うか」

「えっ？　あ、いや……」

「率直に意見を述べて構わぬぞ」

「うーん……やっぱり堅いというか、きついイメージが先行しているみたいだな」

「そうか、やはりそう感じるか……はあ」

沖にしては珍しく落胆のため息が口をついて出た。

「オザキよ、沖はそれほどまでに怖いか？　近寄りがたく、親近感のない冷血女か？」

「いやいや、とんでもない！　おまえは自分に厳しい人間だから、傍目にそういう風に見えるだけであって、本当のおまえは仲間思いでハートは熱いし、それに……」
「ありがとう、オザキ。だがそれは、沖の傍（そば）にいてくれたおぬしだからこその評価。やはり多くの生徒たちは正直に評価していると思うぞ」
孤高の人——なぜか、そんな言葉がふと頭をよぎった。
沖は魔法（リネア）を使う魔女（エトワール）なんかじゃない、ごくごく普通の人間だ。
しかしこの巨大な学園の生徒会長として、そして伊都夏市を守る自衛軍の指揮官としてみんなを率いるだけの絶対の統率力が求められていた。
だから彼女は誰にも頼らず、たったひとりでこれまで戦ってきた。その孤高の志（こころざし）が他人を安易に近寄れないものにしているのだとしたら、寂しい話だ。
「だが、沖とてこの評価に甘んじようとは思わぬ。これからは誰からも支持される生徒会長でなければ。そのために沖はさらなる努力を重ねる所存だ」
常に前向きで努力を惜しまないのは彼女のすばらしいところだ。こういうところをもっと一般生徒にも知ってもらえれば、評価なんてすぐに好転するはずだ。
「わかった。そのためにオレにも協力して欲しいって言うんだろう？」
「正しく。オザキは大局を見極めることのできる漢（おとこ）だ。忌憚（きたん）なき意見を述べて欲しい」
ずいぶんと買い被られているような気もするが、ここは期待に応えないと……。

「……ふっふっふ、わかりました会長ぉぉっ！」
沖とオレしかいないはずの生徒会室に、なぜか突然聞き覚えのある男の声。
「何奴——⁉」
気色ばんだ沖が傍らの薙刀を手に立ち上がると、すかさず頭上に突き刺す。
同時に天井から黒い影がひとつ転げ落ちてきた。
「お、おまえは——宮本⁉」
オレたちの前に現われたのは生徒会執行部所属、宮本武だった。
「はっはっは！　話は全部聞かせていただきました。会長、よくぞご決断しました！」
オレとふたりだけの密談を盗み聞きされたことに怒り心頭の沖。対して宮本はあくまでマイペースで話を勝手に進める。
「この宮本武、沖会長にこれから求められるのは、誰からも愛される親しみやすさだと常々思っておりました。今回のご決断、正にわが意を得たりですよぉぉっ！」
ここまで能天気だと責めるのも馬鹿馬鹿しくなってくる。
「ナンだよ宮本、何かおまえにアイディアがあるのか？」
「ある！　おおあり！　オオアリクイだっ！」
宮本は自信たっぷりにドンと胸元を叩く。
「この宮本が、沖会長をより魅力的な生徒会長にスキルアップするためのプロデュースをしましょ

う――さあ！　さあさあ！」
「――断る！」
取り付く島もなく即拒否されてしまった。
「ぬあああああ⁉　な、なな、何故ですかぁぁぁ～っ⁉」
「以前同じように口車に乗せられ酷い目に遭ったのを、沖は決して忘れておらん！」
そういえば前にも、宮本にまかせたおかげで振り回されたことが……。
「ああ、文化祭のメイド喫茶か！」
そうそう、沖がネコミミメイドになって大活躍だったっけ。
「オ、オザキ！　思い出すなっ！」
あのときのことがトラウマなのか、沖は顔を真っ赤にしてオレに詰め寄る。
「いや、思い出すなと言われましても」
目蓋を閉じれば、あの時の沖のメイド服（ネコミミ＆シッポ付き）と「おかえりにゃさいませ、ご主人様」という恥じらいながら挨拶する姿がくっきりと甦ってくるんだから仕方ない。許せ、沖。
「いやだなぁ、会長だって結構ノリノリだったじゃないですかぁ～っ！」
相変わらずどこまでも軽いノリで接する宮本の態度が、さらに沖をいら立たせる。
「だ、誰が⁉　あのときの数々の無礼、よもや忘れたとは言わせんぞ、宮本！」
彼女の怒りは頂点に達しようとしている。このままでは薙刀で宮本を三枚に下ろすのも時間の

問題だった。
「でも……よく考えると、宮本の言うことも一理あるな」
「な……!?」
「おおっ、わかってくれるか！　さすが我が魂の義兄弟（ソウル・ブラジャー）〜っ！」
オレの何気ないひと言に沖は驚き、宮本は友好の証とばかりに抱きついてくる。
「う、裏切ったか、オザキ!?」
てっきり自分に加勢すると思っていたのか、構えた薙刀の切っ先をオレに向ける。
「いや、たしかにあのネコミミメイドは沖には屈辱だったかもしれないけれど、実際アレで沖のことを見直したって奴は多いんだぜ？」
「そ、そうなのか……？」
お堅いイメージの沖があんな肩までさらしたミニスカメイド服にネコミミまでつけて、にゃんにゃん口調で健気に接客していたんだから、そりゃみんな驚くわな。
「そうです！　この宮本プロデュースに間違いはなかったんですっ！」
「貴様は黙っていろ！　し、して、オザキもそう思ったのか……？」
「ああ。まったく畑違いながら見事やってみせるところに、沖姫々の器の大きさを感じたね」
「うむ……」
さすがに褒められて悪い気はしないのだろう、沖の表情も少しやわらかくなる。

「まあたしかに宮本は突拍子もないことをやらかすけれど、沖自身がこの先劇的に変化するためには、それくらい思い切ったことをした方がいいんじゃないか？」
「む、むぅ……」
頑なに宮本に拒否反応を見せていた沖の心の中で葛藤が起きているのは、その複雑な表情を見れば明らかだった。
「まかせてくださいっ！　この宮本武、必ずや会長を学園のアイドルとして立派にプロデュースしてみせましょう！」
なんか微妙に論点がずれ始めているが、ここはあえてスルーしておこう。
「オレももちろん協力する。宮本が暴走した時にはオレがセーブするから、ここはひとつダマされたと思ってこいつのプロデュースってやつを受けてみないか？」
「そ、そうか……うむ」
沖はオレたちに向けていた薙刀の切っ先を下ろした。
「オ、オザキがそこまで言うのなら、沖も考えてやってもよい、ぞ……」
オレが協力するというのが効いたのか、沖は宮本の提案を受け入れることを告げた。
「はっはっは！　では、決まりですね！　早速明日までに行動計画書を仕上げてきますので——それでは、御免っ！」
登場した時と同じように、宮本は天井裏に姿を消した。

「なあ、オザキよ」
再びふたりきりに戻った生徒会室で、沖がぽつりつぶやく。
「沖は……本当に変われるか？　皆に愛され、親しまれる生徒会長になれるか……？」
「ああ、なれるさ。絶対に」
彼女の力になってやりたいとオレは常に願っている。だから、最初に一歩を踏み出すための言葉を彼女に贈る。
「そうか……おぬしの言葉にいつも沖は励まされている。感謝するぞ」
夕陽に染まる沖のはにかんだような笑顔は、いつも以上に素敵に見えた。

——翌日。

「ふあああ……とっとと席に着け、ガキどもが」
大アクビを隠そうともせず、眠たそうな顔をしてアリデッドが教室に入ってくる。
「おら、休みのヤツぁ手ぇ挙げろや……へいへい、欠席なし、っとぉ」
毎朝のショートホームルームはだいたいこんな感じだ。普通の教師なら職務怠慢も甚だしいと叱られるところだが、こいつの場合は教師より重要なカルデアの司令官としての仕事があるので、これくらいのことは大目に見てもらっているらしい。
だがそんなアリデッドも、さすがにこの日の教室の変化には気付いていた。

「……おい。いつの間に転入生が入ってきたんだ、ああ？」
教室の中でひときわ目立つ、白い学ランを肩から掛けたセーラー服の黒髪の少女——沖がなぜかオレたちの教室に何食わぬ顔をして座っていた。
「どういう魂胆だ？　クラスが違うぞ、沖？」
「案ずるな、アリデッド。既に許可は取ってある」
「あー……そーいやさっき、教頭がなんか言ってたな。ま、別に構いやしねーけどな」
口元にニヤリと曰くありげな笑みを浮かべたアリデッドだったが、本当にどうでもいいと思ったのか、それ以上の追求はしなかった。
他のクラスメイトもヒソヒソと噂話を交わしてはいたが、相手があの生徒会長ということもあってか表立って詮索をする者はいなかった。
「というわけで、オザキ。しばし同じ教室で学ぶことになった。よろしく頼む」
「えーと……これって、例の宮本のプロデュースに関係しているのか？」
「沖が手本とするべき人物がこのクラスにいるということらしいぞ」
「あ、あの……沖さん？」
クラスメイトがそろって遠巻きにしている中、ただひとり声を掛けてきたのはクラス委員のガーネットだった。
「おお、ガーネット。短い間だが世話になる」

「は、はい……こちらこそよろしくお願いします。何かわからないことがあったら、遠慮なくわたしに質問してくださいね」
「心得た」
双方、時に対立することもある組織の人間とはいえ、特にいがみあうこともないごく自然なやり取りだった。
「どうですか、会長。我がクラスの居心地は」
そこへやってきたのは今回の仕掛け人、宮本だった。
「うむ。いささか騒がしいのが気になるが、悪い印象はない」
「で、早速こうやってガーネットが挨拶に来たでしょう？　これが委員長の仕事ですよ！」
まるで自分のことのように胸を張る宮本。
「そ、そんな……わたしはクラス委員として、当然のことをしたまでです」
一方のガーネットはあくまで謙虚で、いかにも彼女らしい反応だった。
「あ……もしかして、沖が手本にするべき人物って」
「ああ、もちろん彼女だ」
「えっ？　お、お手本って？」
事情を知らないガーネットはきょとんとしている。
「とはいえ宮本よ、沖は正直未だ解せぬ。なぜ沖が皆に愛される生徒会長になるために、ガーネッ

トを見習わねばならぬのだ？」
「何を言うんですか、会長！」
宮本は口から泡を飛ばしながら、眼の前の机をドンと勢いに任せて叩く。
「この学園は各クラスの委員↓学年委員会↓生徒会というヒエラルキーで成り立っています！つ・ま・りっ！　クラス委員の究極進化形が生徒会長なのですよっ！」
ホ、ホントかよ。宮本が力説するほどに胡散臭く感じるのはなぜなんだ？
「親しみのあるクラス委員は、いわばよりよき生徒会長の見本中の見本！　中でも彼女はこの学園屈指の、委員長としての資質をすべて兼ね備えた究極の委員長キャラなのですっ！」
「えっ？　な、何なんですか？」
ますますワケのわからない状況に巻き込まれて戸惑うばかりのガーネットをよそに、宮本は根拠のない持論を展開し続ける。
「いいですか会長、よぉく見てくださいっ！」
宮本はガーネットをビシッと指差した。
「この控え目で落ち着いた物腰っ！」
「えっ？」
そうだな。委員長といえばいざというときに頼れる存在でいて欲しいよな。
「あの眼鏡！」

「ええっ？」
やっぱり眼鏡というのは、理知的に見えていかにも「委員長」って感じがする。
「そして、あの巨乳――っ‼」
「あ、あの……」
「きょ、巨乳……だと……？」
その言葉に沖の表情が一変する。
さすがに宮本も自分に向けられた空気が変わったことに気付いたか、慌てて訂正する。
「あ……いやいや！　巨乳はあくまでオプションっす！　貧乳つうか、『無乳』委員長ってのも味があっていいもんですよ！　わははは！」
「む、むむ、無乳……⁉　宮本、己は沖が胸を『無きが如し』と申すか――⁉」
険しい顔の沖の手には愛用の薙刀が握られていた。いかん、このままではひと騒動起きてしまう。
「ま、待て、沖！　『無乳』の『む』は『夢』の『む』だ！」
オレは口から出まかせで沖を説き伏せる。
「おまえの慎ましやかな胸には、ただ大きいだけの巨乳にはない『品格』がある！　そうだな、宮本⁉」
「そ、そうっす！　会長のその潔いまでの無乳の内には、我々が及びもつかない壮大な夢が秘められているんです！　まさに夢の詰まった乳――『夢乳』です！」

宮本も同調して、何とか沖をなだめる。
「む……そ、そうか……」
沖も渋々納得したのか、薙刀を収めた。
「と、とにかく、今日一日ガーネットの行動をつぶさに観察して、委員長とはどうあるべきかを謙虚に学ぶというのはどうだ、沖？」
「なるほど。委員長の中の委員長とやらの実力、見せてもらうとしよう」
やれやれ、これでどうにか収まったか。
「……宮本くん、オザキくん……」
「——ひぃぃぃっ⁉」
突然地の底から響くような声で背後から呼ばれて、オレも宮本も縮み上がる。
おそるおそる振り返るとそこにはガーネットがいた。
朝なのに、なぜか彼女の周りだけが闇夜のように暗かった。
「わたしの胸は品格のない、ただ大きいだけで夢も希望もない……つまりだらしない胸なんですね」
感情のこもっていない口調でガーネットがぽつりとつぶやく。
「へ……？　い、いや、そんなことは決してないぞ！　そ、そうだな、オザキ⁉」
「あ、ああ！　おまえのその胸にはもっと大きな夢や希望が詰まっている！　……はずだ」
「………」

不気味なまでの沈黙の中、教室全体が重苦しい空気に包まれていく。早くこの場から逃げ出したい気分だった。
「……ふふふっ」
ようやくガーネットがすべてを許すかのような微笑みを見せる。
「そうですか……それならいいんです。ふふふっ」
「あ……あは、あは、あはははっ！」
つられて宮本も能天気に笑い、重苦しい空気も払拭（ふっしょく）されたように思えた。だが、オレは見逃さなかった——ガーネットの眼が笑っていないことに。
「ふふっ……」
ギラリと光る眼鏡の奥に隠された瞳が怖くて、オレはそれ以上見ていられなかった。

放課後。オレと沖は宮本に生徒会室へ呼び出されていた。
「どうです会長。一日ガーネットを観察してみて」
「うむ。おぼろげではあるが、彼女がクラス内で人望を集めている理由はわかった」
腕組みをした沖は眼を閉じて今日一日のことを回想している。
「あの公平無私の態度、さりげない気遣い……沖も見習うべきところが多々あった」
さすが人の上に立つ立場にあるだけあって、沖の人を見る目はたしかだ。

「しかし、ガーネットをそのまま真似ればそれだけでよいのか、という疑問も同時に持った。オザキはどう考える？」
「そうだな。たしかに沖とガーネットじゃ性格からして違うし、まるまるコピーしてりゃいいってもんじゃないな」
「――その通りっ！」
オレたちの会話を黙って聞いていた宮本がやおら立ち上がった。
「ふっふっふ……そこで、です！　沖会長に見合った委員長像というものを追求する必要があるのですっ！」
宮本は自信ありげにうんうんとうなずく。
「そこで今日は、特別講師に来ていただきました！」
「と、特別講師？」
「さあ、お入り下さいっ!!」
生徒会室の襖（ふすま）が音もなく開いて、タキシードに身を包んだ老紳士が現われた。
「はじめまして。私めのことは――そう、『仮面バトラーX』とお呼びください」
「――何をしているのだ、一郎殿」
眼の辺りを黒いマスクで覆っているが、その声といい物腰といい、なによりぴんとエッジの立った髭と髪型は、まぎれもなくスピカの家の執事、襟在一郎その人だった。

「はて……どなたと間違えられているのか知りませぬが、私は仮面バトラーX。それ以上でも以下でもございません」
　このクソ真面目なおっさんが冗談を言うとは思っていなかった。
「いや、どっからどう見ても一郎だろ？　何やってんだよ、そんな格好で……」
　眼の前からふっと一郎の姿が消えたのと同時に、オレの首筋にひやっと冷たく硬い物が押し当てられた。
「ひいいっ⁉」
　いつの間にか背後に回った一郎が押し当てていたのは、鈍く光るグルカナイフだった。
「繰り返しになりますが、私は仮面バトラーX。襟在一郎ではございません。くれぐれもお間違いなきよう」
「は、はいいっ！　違います！　全然別人です！　真っ赤な他人ですっ！」
「ご理解頂けたようでなによりです」
　一郎……じゃなくて仮面バトラーXはすっとオレの背後から離れた。
　というか先に指摘したのは沖なのに、どうしてオレだけ命を狙われるんだ？　理不尽だ。
「して、宮本。この御仁は今回の件と何の関係が？」
「よくぞ聞いて下さいました！　バトラー先生は『委員長』について圧倒的造詣と一家言を持つ斯界の第一人者——委員長マスターなのです！」

「ほっほっほ。何、日頃の業務の合間に手遊びとして少しずつ研究をしているうちに、いつしか知識だけは豊富になってしまったというところです」

なんだそりゃ⁉　と思い切りツッコみたい気が満々だったが、これ以上命を危険にさらしたくはないので我慢しておく。

「X殿、単刀直入に聞こう。沖は、立派な委員長になれるか……？」

沖の問いに仮面バトラーXは頭のてっぺんからつま先までを一瞥すると、冷静な口調で答えた。

「素質は大いにあるようですな。特訓すれば即戦力の委員長となりましょう」

「おお！　さすが会長！」

「そうか。では早速今からでもその特訓をお願いしたい」

沖が特訓を急ぐのには理由があった。

来週月曜の朝には学園の全生徒が集まる全校集会が開かれ、そこでは毎回、生徒会長の訓示がある。沖はこの訓示の際に、ニュー生徒会長としてデビューしたいと考えていたのだ。

「はじめにお断りしておきますが、私の特訓は相当に厳しいですぞ。これまで何人もの志願者が挑んだものの、完遂できたのはごくごくわずか……それでもお受けになると？」

「無論だ。沖にも意地と信念がある。何があろうと一人前の委員長となってみせよう！」

ああ、ツッコみたい！　沖にもXにもツッコみたいっ！

「いい眼をしてらっしゃる。この試練を乗り越えた時、貴方は比類なき委員長になるでしょう」

「おお！　仮面バトラーX先生から早くもお墨付きが！　すばらしいです、会長！」
なんか以前もこの生徒会室で見た展開になっているんだが、もはや沖もXも、ついでに宮本もオレを置き去りにしてすっかり別の世界に行っちまっている。
Xはこほん、と小さく咳払いをすると、
「では、まずは――はあああっ!!」
いきなり沖に襲い掛かった。
「ぬ――!?」
あまりに突然のことに、沖も反撃に出るのがワンテンポ遅れる。
「服装は――こうっ！」
「おおっ!?」
Xの手が、沖の肩に掛けられた白い詰襟をあっという間に剥ぎ取って黒いセーラー服だけにしてしまう。
「そして髪型は――これでぇぇ――っ！」
「なんとっ!?」
さらにXは沖の流れるような黒髪に触れるや否や、超高速で編み込みはじめた。
「さらに――必殺のマストアイテムをぉぉぉ――っ!!」
「こ、これは――!?」

怒濤のような着せ替えが終わり、オレが眼にしたのは黒のセーラー服に三つ編み、そして眼鏡というどこから見ても「ザ・委員長」な姿に変身した沖だった。

「な、何が起きたのだ、オザキ⁉」

一瞬の出来事に戸惑う沖に、すかさず宮本が部屋の片隅にあった姿見を持って来る。

「こ、これは……」

鏡に映った己の姿に驚嘆の声を上げる沖。彼女ほどの手練れが何も出来ないままこんな姿に変身させられてしまったんだから、驚くのも無理はない。

「これぞ、委員長の正しいスタイルでございます」

「さ、さすが委員長マスター！　どこから見ても完璧な委員長が完成だぁぁっ！」

宮本は歓喜の涙を流してXを賛えていた。

「オ、オザキ……本当にこんな格好で委員長になれたと思うか？」

編み込まれた髪や慣れない眼鏡を気にしながら、沖が気恥ずかしそうにオレに尋ねる。

「あ、ああ。なかなか似合っているぞ、うん」

「質問の回答になっておらんぞ」

いやいや、見慣れない姿の沖が新鮮だってのもあるけれど、これはたしかにどこから見ても「委員長」だ。特にちょっとダサめの眼鏡と古色蒼然とした三つ編みの取り合わせに、なかなかクるものがある。

「ときに沖様、『制服効果』というのをご存知ですかな？」
「うむ。制服を着るなど外見の変化によって行動や性格が左右される心理効果のことだな」
「今の沖様の外見はまさに委員長そのものとなりました。されば、あとは内面を特訓するのみ」
「内面の特訓、とな」
「左様。この仮面バトラーX、四十年の研究の成果のすべてを貴方に伝授しましょう。覚悟はできておりますかな？」
「無論だ」
沖の表情がきりりと締まる。久しく見ていなかった、戦場に赴く時の表情だった。
「では、あちらの別室で特訓を始めましょう」
「うむ……ではオザキ、宮本、行って来るぞ」
「ああ」
「会長、ご武運を……！」
一郎……じゃなくて仮面バトラーXと沖は隣接する別室へと消えた。
「それにしても……宮本」
「なんだ、オザキ」
生徒会室に取り残されたオレたちは、沖の消えた別室の襖を見つめながら会話を交わす。
「おまえ、あのおっさんとどこで知り合った？」

「オザキよ……世の中には知らなくてもいいことがあるんだぜ？」
「そうか……そうだな」
正直どうでもいいことなんで、オレもそれ以上の詮索はしなかった。
やがて襖の向こうから沖とXの特訓の様子が聞こえてきた。
「クラスメイトを呼ぶ時は、女子は『さん』、男子は『くん』付けですぞ！」
「う、うむ。心得た」
「では、この写真の彼は⁉」
「これは――宮本だ」
「違ぁぁ――うっ！　『宮本くん』ですっ！」
「み、宮本……く……ん」
「違ぁぁぁ――うっ！　もっと語尾を上げて『宮本くぅん』！」
「し、しかし……」
「出来ないというのなら、今すぐこの部屋を出て行きなさい」
「くっ……」
予想以上に厳しい特訓だった。オレならもうこの時点で逃げ出しているかもしれない。
「み、宮本……く、ん」
「もう一度っ！」

あえて無視した。

「おお……か、会長が……『宮本くん』……はあ、はあ……も、萌えるぅぅ……」

となりで宮本が至福の表情を浮かべてなにやら妄想していたが、邪魔をしては悪いと思ったので

「宮本、くん」
「リピート・アゲイン！」
「み、宮本くぅん」
「グーッド！　その調子であと百回！」
こんな感じで特訓は夕方まで続いた。

そして、生まれ変わった沖のデビューを翌日に控えた日曜日の夜。沖に呼び出されたオレは彼女の待つ屋敷へと向かった。

あの日以来、朝と放課後は仮面バトラーXとの特訓に明け暮れていたので、ほとんど顔を合わせる時間もなく、その後の彼女の様子が気になっていた。

「せっかくのお休みの日に呼び出したりして、ゴメンねオザキくん」
「…………」
「ん？　どうしたのオザキくん。ハトが豆鉄砲食らったような顔しちゃって」
「い、いや……」

オレを出迎えた沖は、あの日眼の前で変身した三つ編みに眼鏡姿で、その口調はすっかり委員長風になっていた。
「ふふっ……その様子を見るに、沖の完璧な委員長口調に舌を巻いているようだな」
沖は無邪気に笑うと、いつもの尊大な口振りに戻った。
「すごいな……完璧に人格が変わっていたっていうか、どこから見ても委員長だった」
「ええ。これも仮面バトラーX殿の鍛錬の賜物よ」
再び口調の変わった沖の案内で屋敷の中へ通される。
「で、オレを呼んだのは？　特訓の成果を見せるためか？」
「それもあるわ。でももうひとつ、オザキくんにどうしても頼みたいことがあるの」
広い邸宅の長い長い廊下を歩きながら、沖はこの数日の出来事をオレに話してくれた。
「仮面バトラーX先生は、わたしに持てる知識のすべてを授けてくれたのよ。もはや自分に教えることはない、とまで言ってくれたわ」
「へえ、さすがは沖だな」
さっきの完璧な口調を見れば一郎が太鼓判を押したのも納得できる。
「それでね、先生はわたしに最後の試練をお与えになったの。オザキくんにはその手伝いをしてもらいたいのよ」
「最後の試練って……そりゃずいぶんと大げさな話だな」

「あ、あの、決して大げさじゃないのよ？　少なくともわたしにとっては……」
沖はなぜか顔を赤らめている。最後の試練とやらは恥ずかしいことなんだろうか。
「先生がわたしに課した最後の試練ってね――それはどんな極限状態にあっても委員長を全うできるかどうか、ってこと」
「最後の試練」とか「極限状態」とか、一郎が指南したとはいえ、ずいぶんと大げさだ。いったいオレは何を手伝わされることやら。
やがてオレは客間に通される。
「……え？」
宴会場のようにだだっ広い客間の中央には、一組の布団が敷かれていた。
「あ、あの……沖？」
「わ、わたしにとっての極限状態――つまり一番緊張することは、その……オザキくんと、え、え、えっちすること。これからオザキくんには、その極限状態を作ってもらいたいの……！」
えーとつまり、オレとえっちしても委員長キャラを維持できれば最後の試練はクリアってことか……？　いやいや、そ、それはいくらなんでも――。
「――行くわよ」
「へ？　あ、ちょ、ちょっと！」
沖は強引にオレの手を引いて布団まで連れてくると、有無を言わせず押し倒した。

「覚悟なさい、オザキくん」
沖はオレを組み敷くと、制服のスカーフをしゅるんと解いた。
「ま、待て、沖！　何かヘンだとは思わないのか⁉」
「これもわたしが生まれ変わるための重要な試練なの。おとなしく協力して」
「つーかだなぁ……」
「――オザキくん！」
「は、はいっ！」
君付けにされて思わず背筋がぴんと硬直する。
「委員長命令よ。協力しなさい」
「は、はい……」
なんだこのいつも以上に感じるプレッシャー……これが委員長の力なのか……？
そうこうしている間に、オレは沖にズボンを脱がされパンイチ状態にされていた。
「あ、あの……沖さん？」
「今日は委員長って呼びなさいよ……ほら」
沖の白く華奢（きゃしゃ）な手がパンツの上からオレの股間を触る。
「んんっ！　ちょ、ちょっと待て、そこは――」
扱いに慣れているのか、沖の手は的確にオレの弱いところを攻めてきた。

「ほら、もう反応しているわよ、オザキくん？」
沖に指摘されるまでもなく、オレの股間はどんどん大きく硬くなっている。
「何かいつもより硬くなってない？　わたしの雰囲気が違うから？」
「いや、そういうわけじゃないけど……んんっ⁉」
いつの間にか沖はオレの股間で硬くなったモノを外にさらけ出していた。
「ふふふっ、すごい……」
沖はオレの上でくるりと身体の向きを入れ替えると、いきり立つモノを手でしごき始めた。直接触られたうえにしごかれ、たちまち体中の血液が集中するような錯覚に陥る。
「すごいわ、オザキくん。どんどん硬くなっている。もう出したい？」
沖の指に弄ばれて、オレは問い掛けに答える余裕なんてなくなっていた。
「でも、まだ出してあげない。委員長命令よ、もう少し我慢なさい」
次の瞬間、ペニスがぬっとりとした感触に包まれる。
「んおっ⁉」
「んんっ、んふう……んちゅっ……あむっ、んっ、んんっ……」
沖がオレのペニスをくわえて頭を上下に忙しなく動かしている。
「あむ、んむう……んんっ、んっ、んっ……ぷふあっ……ふふっ、口の中でもどんどん大きくなって……そんなに気持ちいい？」

沖は子供が玩具で遊ぶようにオレのペニスを弄ぶ。何か一方的に彼女にペースを握られて、これじゃちっとも極限状態になっていない。

（ふう……こ、こうなったら、ちょっと強引だけど——）

一心不乱にオレのものを啣える沖の尻が、眼の前で無防備に揺れている。

オレはすかさず彼女のあそこ——ではなく、その上の小さなすぼまりに指を這わせた。

「——んんっ⁉　な、何を……はううっ⁉」

さすがにいきなり指を入れるわけにはいかないので、小さな穴を解きほぐすように周囲をマッサージすると、沖はかわいらしい悲鳴を上げた。

「こ、こら、オザキ……くん」

「ほれほれ、これが極限状態じゃないのか？　こんな中でも委員長を全うできるか？」

「んんっ、そ、そんな……ひううっ！」

沖もこんな形でオレから反撃されるとは思っていなかったのか、口の方をお留守にして懸命に耐えていた。

「ひ、ひどい……こ、こんなの……あっ、ああっ！」

すっかり形勢逆転だ。このまま弄んでしまおう——なんて気を緩めたのが悪かった。

「——スキあり！」

沖は再びオレの上で身体を入れ替えて向かい合う体勢を取った。もちろんその手には大きくなっ

たままのペニスが握られている。
「ふっふっふ……甘いわよ、オザキくん」
沖は不気味なくらい屈託（くったく）のない笑顔をオレに向けると、そのままペニスを手でしごく。
「んおおっ!?」
不意打ちにオレは思わず情けない声を上げてしまった。
「さあ、どうしようかしら？　このまま手の中で出す？　それとも……」
「た、頼むっ！　て、手じゃなくて、その……沖の膣内で……！」
ココまで来て手コキでおしまいなんて、そりゃあんまりだ。オレは恥も外聞もなく沖の膣内で果てることを望んだ。
「そうなんだ……でも、それならきちんとお願いしてくれなくちゃ」
完全に主導権を奪い返した沖はどこまでも強気だった。ここは元の沖と同じだ。
「お、お願いします。沖さんに――い、挿入れさせてくださいっ！」
「ふふっ、よく言えました」
沖は満足そうに微笑むと、オレの上にまたがるように腰を浮かせる。
「それじゃ、わたしを喜ばせて――はあっ、んっ、んんっ！」
ゆっくりと腰を下ろす沖の肉襞の内へ、屹立したオレのペニスが呑み込まれる。
「んっ！」

熱くぬかるんだ沖の内は気持ちよくて、何もしなくても射精しそうなくらいだ。
「ああっ……オザキ、くんの……熱い。お、奥まで届きそ、う……ふうっ」
沖は自ら腰を動かしてオレを貪ろうとする。オレも自然と沖に合わせて下から腰を突き上げていた。
「んっ！　んふうっ！　ああ……もっと、もっと……ふあ、ああっ！」
下からオレが突き上げるたび、三つ編みにした沖の髪が生き物のように揺れ動く。
外見も言葉遣いもいつもの彼女とは違うのに、それでもたしかに沖と繋がっているという安心感があった。それはきっと沖も同じなのだろう。いつものように激しくオレを求めてくる。
「オ、オザキくん……好きっ……好きなのぉ……あ、あはっ！」
いつもなら恥ずかしくて口に出せないような台詞も、今や心身ともに委員長となった沖なら言える……のか？　聞き慣れていないせいか、こっちまで恥ずかしくなってくる。
「オ、オレ……どんなに口調や髪型が変わってもやっぱ、沖のこと好き、だから……！」
「ああっ！　う、うれしい……うれしすぎて、胸が……切なくな……ああんっ！」
切なくなっても少しも揺れることのない胸に手を伸ばし、制服越しにニギニギと揉みしだくと沖はさらに激しく乱れた。
「あっ、はあっ……オ、オザキくん……はあっ、はっ……もう、がまんできな……」
「オ、オレもだ……このまま、いくぞ」

沖が小さくうなずいたのを合図に、オレは下からの突き上げをさらに大きくした。
「ああっ！　あっ！　い、いいっ！　来る……来ちゃう！　こ、このまま……ああっ！」
オレの中の熱がすべて一気に下半身の一ヶ所に集まって、たったひとつの出口めがけて疾走するような感覚。もう、我慢できない──！
「んあっ！　あ、ああっ……あはあああぁぁぁ──っ‼」
ビクンビクンと大きく二度三度と脈打つように身体を痙攣させた沖は、やがて全身から力が抜けてそのままオレの胸へ倒れ込んだ。
「あ、ああ、はあっ……たくさん、出ている……すごい……」
オレの胸に頬を寄せて沖は満足そうな笑顔を見せる。
「すごいな、最後までずっと言葉遣いが変わらなかったじゃないか」
「ふふっ……ということは、最後の試練も無事完遂……ね？」
まあ本当にこれでよかったのか疑問がないわけじゃないけれど、何より沖自身が満足しているんだからよしとしよう、うん。
「明日の全校朝礼、がんばれよ」
「うん」
オレたちはしばらく抱き合ったまま過ごした。

そして翌日。講堂に全学年の生徒が集まる全校朝礼の朝がやってきた。
いよいよ委員長を我が物にしたニュー生徒会長、沖姫々のお披露目だ。
「いやいや、楽しみだなぁ、オザキ」
プロデューサー宮本はいよいよその成果が見られるということで妙に上機嫌だ。
(というか、結局こいつ何やったんだ？　実際に教えたのは一郎だし……)
「――実に楽しみです」
「うわっ⁉」
オレと宮本の間にいきなりにゅうっと顔を見せたのは襟在一郎……じゃなくて、仮面バトラーXだった。
「え、X先生⁉　どうしたんですか？」
「いや、沖さんにもうひとつ伝授しておかねばならぬことがあったのをすっかり忘れておりまして、急遽(きゅうきょ)馳(は)せ参じた次第」
「それって重要なことなのか？」
昨日沖は免許皆伝みたいなことを言っていたから、忘れていた内容が気になるがXは黙して語らない。
全校朝礼はつつがなく進行して、いよいよ生徒会長の挨拶となる。
「続きまして、生徒会長からのご挨拶です」

ステージ上に現われた三つ編み、眼鏡にセーラー服の生徒会長の姿に生徒たちの間からざわめきが起きる。
「オザキ様、このスイッチを押してください」
Xはなぜかオレに手のひらサイズのスイッチボックスを手渡す。全面に張られた黄色と黒の縞模様がいかにもデンジャラスだ。
「こ、これは？」
「いいから、早くスイッチを！」
なんだかよくわからないまま、オレはスイッチをポチっと押した。
「きゃあああ――っ⁉」
次の瞬間、ステージの上から悲鳴が上がる。
「沖――⁉」
沖の靴から蒸気があふれ出し、左右それぞれ勝手な方向に動き始めたのだ。
「こ、これは……きゃあああっ⁉」
いつもの沖ならこれくらいどうということはないはず。しかし今日の彼女は新たな自分を初披露するということで、いつになく緊張していたのだ。
「せ、先生っ、これは⁉」
驚く宮本にXは冷静に答える。

「委員長に欠かせないもうひとつの属性。それは——『ドジっ子』！」
そして沖は靴の動きに着いて行けないまま、その場で派手にすっ転んでしまった！
スカートがめくりあがり、その下のパンツ——。

「……え？」

『沖がすっ転んだ瞬間、スカートの中にパンツは見えなかった……ような気がする』

——そうだ。あれは錯覚だ。あるいはこの距離からはよく見えなかっただけなんだ。まさか生徒会長沖姫々ともあろう者が、ノー〇ンで人前に上がるはずないじゃないか。
最前列の男子生徒がいっせいにマグマのような鼻血を噴き上げたのも、女子生徒が顔を真っ赤にして眼を背けながら悲鳴を上げたのも、全～部気のせいなんだ、うん。
その証拠に沖はハッと我に返って光の速さでスカートを戻すと、声ひとつ上げず何食わぬ顔で演壇の前に立った。
そしておもむろに眼鏡を外し三つ編みを解くと、どこに隠していたのか愛用の薙刀を手に携え、いつもの沖姫々に戻ったのだった。
「……諸君」
氷のように冷たいそのひと言にざわついていた場内はしんと静まる。

「諸君らは何も見てはいない。そうだな……？」

いつも以上の威圧感を感じた全校生徒はみな無言で大きくうなずく。ついうっかり「見た」なんて口にした日には、あの薙刀の餌食と化すのは明らかだった。

「そうか。では……」

沖はゆっくりと壇上から降りると、講堂の中いっぱいに響く声で叫んだ。

「宮本！　オザキ！　どこにいる――!!」

つかつかと大股でオレたちのクラスの列へとやってくる沖。

だがそのときオレたちの姿はそこになかった。命の危険を察したオレと宮本は一目散に逃げ出していたのだ。

「宮本！　オザキ！　逃げるなぁぁ――っ!!　今ここで我が刃の錆にしてくれるわ――!!」

怒りに我を忘れた沖の叫びを遠くに聞きながら、オレたちは逃げ続けた。

×××

「……で、結局オレはこうしてまた天国に戻ってきたわけだ」

「～～～～～～～～～～」

天国テレビの画面には神様（幼女）でも（眉毛犬）でもなく、あの正体不明のコケシが映っていた。

コケシだからしゃべることもなく、ただ携帯のマナー音みたいなバイブレーションを響かせるだけだった。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

「え？　沖の薙刀で斬られて殺されたのかって？　いやいや、そうじゃないんだ」

なぜ、ただのバイブ音とコミュニケーションが取れるのか不思議だったが、とにかく今のオレにはこの神様（コケシ）の言うことが理解できた。

「実はさ、沖から逃げて逃げて逃げまくって、最後はまた講堂に戻ってきたんだよ」

犯人が犯行現場に舞い戻るのはよくあることだ……ってオレ、犯人じゃないんだが。

「ステージのキャットウォークに身を隠してたら、暗い中でついうっかり、照明用の高圧電流が流れるケーブルを手で掴んじまって、そのまま感電死……ってわけだな」

というかだな、今回は完全に冤罪(えんざい)だぞ？　そりゃスイッチを押したのはオレだけど、靴に仕掛けをしたのは明らかに一郎だし。

「まったく……情けなくて泣けてくるぜ」

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

「な、何だおまえ、慰めてくれるのか？」

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

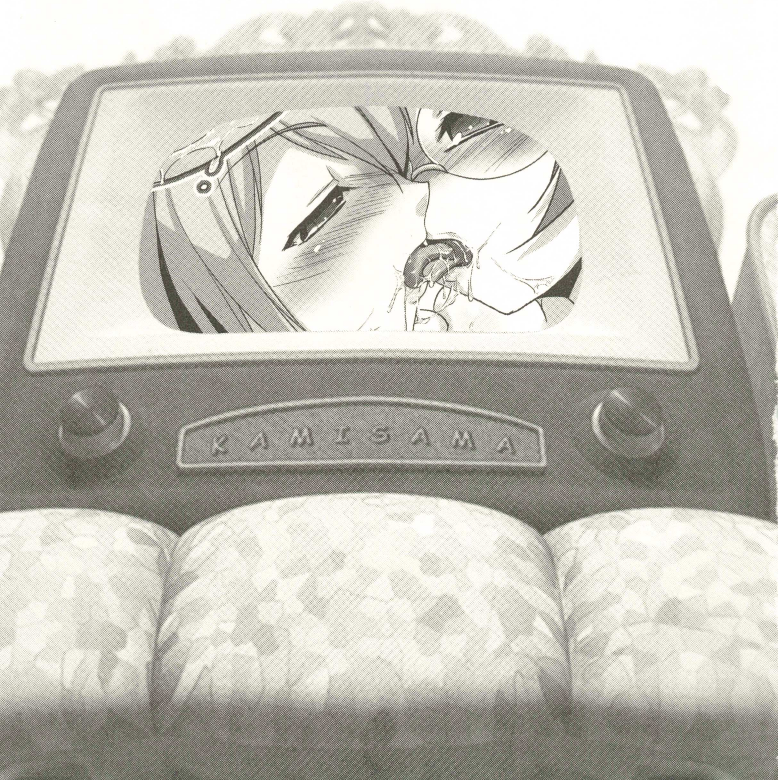
無表情のコケシがそのときばかりはオレに同情して泣いているように見えた。

「あ、ありがとう、神様（コケシ）……！」
「～～～～～～～～～～～」
テレビの向こうにいるアイツが眼の前にいたら、抱きしめてやりたい気分だった。

【第五話　おしまい】

STAR MINE GIRL
Adult Channel

Sexial Makelove Game



（……太陽って、ホントに黄色く見えるんだな）
照りつける夏の日差しの中、オレはそんなことを考えていた。
夏の終わりの砂浜に寄せては返す波の音が心地よい眠りへとオレを誘う。
「おーい、キヨヒコ〜っ！」
しかしそんな微睡（まどろ）みもミラの声にかき消される。
「こらこら〜っ！　えっちの最中に寝るなぁ〜っ！」
ミラはオレの下半身にまたがって、しきりに腰を動かしている。
「んもう、こっちもお留守にしないでよ」
「そうだぞオザキ、この程度で音を上げるとは情けない」
横たわるオレの左右の手はスピカと沖の股間に触れている。
「後がつかえていますから、お早めにお願いしますねオザキくん」
「そ、そうですっ。も、もうガマンできません……はふーっ」
（……どうしてこんなことになっちゃったんだろう）
そしてガーネットと日下部がオレに愛してもらおうと順番待ちをしている。
オレはゆっくり眼を閉じて、今日の出来事を振り返った。
「――うみぃぃぃぃぃぃぃ〜〜っ!!」

眼の前に広がる海にいきなりミラのテンションが上がる。

「うーん、海なんて久しぶりね」

「ええ、潮風が気持ちいいです」

スピカとガーネットも開放的な気分にひたっているようだ。

オレと魔女三人組（エトワール）、宮本と樋ヶ、そして引率という名義で付いて来たアリデッドの七人は残り少ない夏を楽しむべく、伊都夏市のはずれ、汐鍋港（しおなべこう）のそばにある小さな海岸に来ていた。

「しっかし……見事に他に誰もいないな」

あまり広い海岸じゃないが、オレたち以外に人影もなく閑散とした感じがする。

「元々穴場だし、さすがに土用波が出るこの時期じゃね」

「おおっ、キヨヒコ！　見れ見れ！　円盤生物がいるぞぉおっ！」

強い波が押し寄せる浜辺でミラが拾ってきたのはもちろん円盤生物ではなく、ただのクラゲの死骸だった。この調子じゃ海の中にもかなりクラゲがいそうだ。

「水も冷たそうだし、クラゲもいるんじゃ泳ぐのは無理かもね」

「でも、せっかく海に来たんですから、浜辺で遊びましょう」

そうだな。眼の前に広がる海をバックにして遊ぶのも悪くない。

「よっしゃ！　それじゃ後は各自ケガのないように一日過ごすこと！　以上！」

アリデッドが訓示を終えると、荷物持ちをしてきたオレたちに向かって叫ぶ。

「宮本、シート敷いてパラソル立てろぃ！」
「イエッサー！」
「オザキ、ビーチチェア&ビール用意ぃ！」
「はいよ」
オレはビーチパラソルの下に折りたたみ式のチェアを備え付け、その傍らにビールの詰まったアイスボックスを置く。
「よぉし、完璧っ！　ご苦労ご苦労」
アリデッドは用意させたビーチチェアにゴロンと横になると、早速アイスボックスから取り出した缶ビールを開けて、ゴクゴク喉を鳴らして飲む。
「かは――っ、んめぇ！　やっぱ昼間っからビールってのはサイコーだな、おい！」
至極満足そうにビールを飲み干すアリデッド。
「んじゃ、あとはまかせた！　ヨロシコ！」
ヨロシコって、なんのための引率だよ。結局てめぇがビール飲みたいがためじゃねぇか。
「……あ、あのね――タケちゃん！」
それまで黙っていた樋ヶがすぐとなりの宮本に大きな声で呼びかける。
「あ。あのね、向こうにちょっと眺めのいいところがあるらしいの。でも、ひとりじゃ不安だから、もしよかったらタケちゃんもいっしょに……」

「あん？　めんどくせーからパス」
「え？　えっ？　ええ――っ!?」
宮本のそっけない返事に樋ヶは驚きとまどう。
「お、おかしい!?　シミュレーションではタケちゃん、問題なくＯＫするはずなのに!?」
おーい樋ケ、モノローグを口に出すなよ。全部聞こえているぞ？
「それより俺はここでオッパイウォッチングをする！　さぁて、まずは……」
「――どっこーい！」
何を思ったのか、いきなり樋ヶはミラよろしく宮本の鳩尾(みぞおち)めがけて怒濤(どとう)の頭突きをかました。
「ぐふっ!?」
不意打ちを喰らった宮本は膝から崩れ落ち、気を失った。
「あー、マネっこ！　ずっこいぞ、ひけ！」
「た、大変！　タケちゃんが倒れちゃったわ！　わ、わたし、向こうで介抱して来る！」
ミラの抗議をよそに、樋ヶは宮本を軽々と肩に担ぐとあっという間にどこかに行ってしまった。
「い、いいのか、あれ」
「いいんじゃない？　樋ヶが来た理由って、宮本とふたりきりになりたいってだけでしょ？」
げにおそろしきは、恋する乙女の行動力。樋ヶの想いが宮本に通じることを祈ろう。
「さて、何して遊ぼうか」

「はいはいはーい！　砂浜埋め埋めうめぇぇぇ――っ！」
テンションが上がりっぱなしのミラが元気よく手を挙げて発言する。
「穴アナ掘り掘り～っ♪」
ミラはどこからか取り出したスコップで、人ひとり横たわる大きさの穴を掘っている。
「さあ、埋め埋めだぁ～っ！」
「埋めるってミラちゃん、誰を？」
「もっちろん、キヨヒコだ！　えいっ！」
オレはいきなりミラに突き飛ばされて掘ったばかりの穴に落ちる。
「それそれ！　埋めちゃえ埋めちゃえぇぇっ！」
ミラはスコップで砂浜の砂を掻き出し、オレに浴びせはじめた。
「うわっ⁉　や、やめろってミラ！」
「きゃははは！　それそれそれ～っ！」
ミラはオレを埋める行為に没頭していた。
「けけけ、ざまぁねぇなオザキ」
アリデッドはビール片手に高みの見物を決め込んでいる。
「面白そうね。アタシも手伝うわ――それっ！」
「わっ、お、おまえらいい加減やめ……わぷっ⁉」

スピカもいっしょになって身体だろうが顔だろうが構わず砂をかけてくるので、オレもまったく防ぎようがない。
「ほら、ガーネットも手伝いなさいよ」
「えっ？　わ、わたしは……」
「ストレス解消になるわよ、これ」
「そ、そうなんですか？　それじゃわたしも……えいっ！」
スピカに乗せられたガーネットも加わって、三人がかりで容赦なくオレに砂をかけてきた。こうなるともう勝ち目はなく、あっさり首から下を砂に埋められてしまった。
「あはは、埋まった埋まった！」
「けひゃひゃひゃ、こいつはいいぜぇ！」
すっかり出来上がっちまったアリデッドが腹を抱えて笑っている。
「でも、これだけじゃ何か物足りないわね」
「だったらこういうのはどーだ？」
ミラはオレを埋めた砂山に新たに湿った砂を盛り、ペケペケと弾いて固める。
「ぼいんぼいんっ！　すげー、ガーちゃんみたいだぞ！」
胸の上あたりにガーネットも真っ青の「巨乳」ができた。適当に盛ったわりに、形といい双丘の谷間といい結構リアルだ。

「どーだキヨヒコ、ガーちゃんになった気分は？」
「うーん、ガーネットは毎日こんな谷間を見ているんだなぁ」
「も、もう、ミラちゃん……オザキくんも」
ガーネットは真っ赤になってうつむく。
「となると、ウエストラインはこんな感じ？」
「うんうん、そんな感じだー！」
スピカとミラがガーネットを参考に砂山の裾野を削って腰のくびれを作る。
「うん！　ガーちゃんそっくりだぞ！」
「そ、そうかしら……」
ガーネットがミラたちに気付かれないようにこっそり腰の辺りを細めに削っているのをオレは見逃さなかった。まあ、乙女心ってやつだな。
「よぉし出来たぞ、キヨヒコ！　ガーちゃんに負けないくらいのないすばでぃだ！」
首から下が動かないオレには見えないが、砂のナイスバディが完成したようだ。
「で、このあとオレはどうなる？」
「さあ」
スピカはそっけなく答える。
「何も考えてないのかよ！　くそっ！」

せっかく海に来たというのに、砂に埋められっ放しなんてやってられない。オレは身体を起こそうと力を入れる。

「……え？　う、動かねぇ……!?」

いくら全身を被うくらいの砂だからって、男ひとりが踏ん張って力を込めてもびくともしないってのはどういうことだ？

「あの……オザキくん、自力での脱出はかなり難しいですよ？」

「そうね、ミラがかなり念入りに弾いて固めていたからね」

いや、それにしたってこの重さと硬さは何だ？

「スーちゃ～ん、ガーちゃ～ん、ビーチバレーするのだ～っ!!」

しかもミラはオレを埋めて満足しちまったのか、別の遊びをはじめようとしているし！

「ま、しばらくそうしてたら？」

「あ、あの……どうしても脱出できないときは呼んで下さい」

スピカとガーネットもミラのところに行ってしまった。

「……お～い」

後に残されたのは砂のナイスバディに埋められたオレと――、

「んごおお……ふごおお……うにゃにゃ、ひへへ……」

早くもビールが回ってオネムのアリデッドのみ。

（しゃあない。やることもないし、オレもしばらく昼寝でもするか）
このところ忙しくて、ゆっくり休めなかったからな。しかも砂の中は暑過ぎず寒過ぎずちょうどいい温度だし、海から吹いてくる潮風も心地いいし、昼寝にはちょうどいい感じだ。
眼を閉じるとすぐにウトウトとし始めた。こりゃゆっくり眠れるかな……。

…………
………
……

うたたねしていたオレの眼を覚ましたのは、波音に混じって聞こえる言い争いの声だった。
「——ちょっと、今日のオザキはオフなのよ？　ウロチョロしないでくれる？」
「人をハエみたいに言わないでください。これも取材活動です」
言い争っているのはスピカと……日下部か？
「休日であるのなら、誰と接触しようと自由ではないか？　もちろんこの沖とも、だ」
「う〜っ、かいちょーだからって、キヨヒコは渡さないぞぉ！」
なんだ、沖までいるのか？
（よいしょ……っと）
頭をもたげると、ほんの少しだけ動かして声のする方向を見ることができた。

なるほど、波打ち際にスピカたちと日下部、沖の五人が集まっている。

「オザキの邪魔はせん。ただ沖は個人的にいろいろと聞いておきたいことがあるだけだ」

「それがジャマだって言うのよ。だいたい、個人的に聞きたいことって何よ？」

「そ、それは——と、とにかく、しばらくオザキを借りるぞ！」

押し問答を打ち切って沖がつかつかとこっちへやってくる。

（やべっ）

とっさにオレはタヌキ寝入りを決めこむ。

「ちょっと沖、やめなさいよ！」

「力ずくでオザキさんを奪うつもりですか？」

スピカと日下部が沖の前に立ちはだかる。

「——ケンカ、いくな———いっ!!」

緊迫する中、間に割って入ったのはミラだった。

「かいちょーもくさかべっちもスーちゃんもガーちゃんも、ケンカいくないっ！　みんなケンカすると、きっとキヨヒコも悲しい！」

眼にいっぱい涙を浮かべて説き伏せるミラの姿に、沖や日下部もさすがに黙り込む。

「そんなにキヨヒコのことが欲しいなら、もっとゆーこー的な手段で決める！」

「それなら『怒津散房瑠（ドッヂボール）』で決めるのはどうだ」

「……は？」

沖の提案にみんなきょとんとしている中、なぜかガーネットだけが驚愕の表情を浮かべていた。

「ど……怒津散房瑠って、ま、まさか……」

「知ってるのか、ガーちゃん？」

「たしか、この伊都夏市に戦国時代から伝わる決闘の方法だったはず。何でも、一対一で鉄の球を投げ合い、先に落球した方が負けなんです」

……なんだそりゃ。

「ちなみに現在行われているドッジボールはこの怒津散房瑠をスポーツとして改良したものだと、図書館の史料で読んだことがあります」

あのー、それって出版元、民○書房とかじゃないよな？

「左様。このバレーボールを代用して怒津散房瑠を行い、最後に勝ち残ったものがオザキを自由にしてよい――これなら文句はあるまい」

「ふっ……いいでしょう。眼にモノ見せてあげます」

「面白そうね。アタシも参加するわ」

「ミラもやるどー！」

「わ、わたしも……やります！」

他のメンバーも異存はないようだった。ガーネットまでやる気を見せたのにはちょっと驚いたけ

れど。
こうして、オレを巡る女の戦いが始まった――オレの意向はまったく無視して。
（ま、しゃあないか。しばらく見学させてもらおう）
本来は一対一の対決らしいが、人数が五人と半端なので、全員で輪になってそれぞれ対戦相手を宣言してからボールを投じるというルールになった。
「アタシのターゲットは……アンタよ、妖怪女！」
最初にボールを持ったスピカが対戦相手に指名したのは日下部だった。
「ふっふっふ……いきなりわたしを選んでしまうとは。運のない人ですね」
「いくわよ！」
スピカが身体をしならせてバレーボールをオーバースローで投じる。
「――はああっ！」
ボールは日下部めがけて真っすぐ、猛スピードで飛んでいく。
「ふっ……投げた本人同様、ひねりのない単純な棒球ですね――はあっ！」
日下部は腰を落として、身体の真正面でボールをがっちり受け止めた。
「わたしの渾身の一球を……やるわね」
ニタリと余裕の笑みを口元に浮かべて日下部が反撃に出る。
「では、今度はこちらから行きますよ。わたしの球を受けられますか？」

「負けないわよ！」
「くく……わたしの球は恐ろしいですよ？　なんと言ってもこの球は……球は……」
すらすらと口上を述べていた日下部が急に黙り込む。
「？　どうしたのよ？」
「た、球、たま……タマタマ……手でいじって、その先の竿も……はあ、はあ……」
「タマ」という言葉に過剰反応した日下部は、瞬く間に自分の世界に没入していく。
「はあ、はあ……ぶっ太い竿とタマタマ、いっしょに弄んで……いやんっ、こんなに大きくなってる……ああんっ、お口に入らな～い……」
「ちょ、ちょっとアンタ、何やってんのよ⁉」
スピカの声ももはや耳に入っていない日下部の妄想はますますエスカレートする。
「はあっ、はあっ、はあっ……あ、あごが外れるくらい大きなのを、お、お口で、お口で……もふ——んっ⁉」
興奮のあまり獣のような叫び声を上げると、日下部はボールを投げ捨て全速力でどこかへ走り去ってしまった。
「あ、あのー、これって……」
「日下部さんの試合放棄で、スピカちゃんの勝ち……でいいんじゃないでしょうか？」
釈然としないものを感じながらも、とりあえずスピカが勝ち上がった。

日下部がいないので、ボールはガーネットが投げることになった。
「ガーネットよ、沖を標的にするがよい」
なんと沖が逆指名をしてきた。
「えっ？　い、いいんですか？」
突然の逆指名にガーネットは驚きを隠せない。
「仲間である魔女を標的にするのは忍びないであろう？　それに、沖はぜひともお主と勝負がしたい」
このメンバーの中ではもっとも体力で劣るガーネットを標的にしようというのか。
「わ、わたしと勝負って……」
「うむ。おまえのその胸――沖が狙い撃たせてもらう！」
「……えっ？」
「この機会に、日頃から目障りなその二つの脂肪の塊ごと、弾き飛ばして見せよう！」
……なんか明らかな私怨が混じっているな。
「そ、そんな、ひどいです沖さん。わたしだって、好きでこんな大きくなったわけじゃないのに……」
沖の先制「口撃」にガーネットはショックを受け青ざめる。
「胸が大きくたって、いいことなんてないのに……重くて肩、凝るのに……」
「ぬ、ぬう……そ、それは……贅沢(ぜいたく)な悩みというものだ！」

ガーネットの愚痴に沖がすかさず反応する。
「あと、大きいサイズの下着って意外に値段張るんですよ？　それにかわいいデザインなんて、ほとんどないし……」
「そ、それも贅沢な悩みだ！」
「一番ひどいのはこの季節、ちょっと油断していると胸の谷間とかに汗疹ができるんですよ？　もう、最悪です……」
「た、谷間に……あ、汗疹……」
ガーネットの告白に沖はかなりショックを受けたようにうろたえている。
パイオツニアの宮本曰く「ミス・ノーバディ」の沖からしてみれば、胸が重くて肩が凝るのも、胸に谷間があって汗疹が出来るのも、まったく未知の世界だろう。
「あ、あの、沖さん？」
沖はがっくりと膝を砂浜に着いてうなだれている。
「あの……ボール投げますよ？　いいですか？」
ガーネットが確認するが、沖はうなだれたまま何かぶつぶつつぶやくだけだ。
「えーと……えいっ」
手と足がいっしょに出る典型的な「女の子投げ」で投じられたボールは、山なりの放物線を描いて沖の背中にぽーんと当たった。

「はーい、ガーネットの勝ち」
結局最初からいた魔女三人の勝負となる。
「ふふっ、まさかアタシたち三人でオザキを賭けて勝負になるとはね」
「うーん、やっぱりこれって戦いづらいぞ」
思わぬ展開に仲間思いのミラは戸惑いを隠せない。
「じゃ、ミラも試合放棄する？」
「んにゃ！　ミラ、オザキといっしょに遊びたい！　だから負けないよ！」
「わ、わたしも……スピカちゃんとミラちゃんには申し訳ないですけれど、勝ちを譲る気はありません」
実の姉妹のように仲のいい魔女三人がオレを巡って戦う——おおっ、なんかすごい展開になってきたぞ。
「アタシもそうよ。だから今日この場だけは友情は一時休止、ガチで勝負よ！」
三人はそれぞれ三角形の頂点に立って勝負に臨む。
「それじゃスーちゃん、行くよぉっ！」
スピカは腕をぐるぐる回しながらスピカを指名した。
「来なさい！」
「ミラちゃん・スーパー・ドメスティック・ファビュラス・バーニング・ネバーエンディング……

シュートォォォ――ッ‼」
ミラから放たれた剛速球は、炎を吹き上げんばかりの勢いでスピカめがけて飛ぶ。
「はあああ――っ‼」
そんな規格外の剛速球をスピカはがっちり身体の真ん中で捕らえる。ボールの勢いを殺しきれず数メートル後退したものの、落球することなくがっちりと受けとめてみせた。
「ふう……ミラ、また腕を上げたわね」
「へへんっ、スーちゃんもすごいぞっ」
あんなボールを投げるミラもミラなら、がっちり受け止めるスピカもスピカだ。ガチ勝負の宣言に偽りはないらしい。
「それじゃ次はガーネット、行くわよ。覚悟はいい？」
「は、はいっ！　どんと来い、です！」
緊張した面持ちでガーネットが身構えると、スピカも足元をならし大きくゆっくりと投球のモーションに入る。
（うーん……手に汗握るこの展開、燃えるなぁ……）
「……オザキさん」
「ぬおおっ‼」
勝負の行方を見物していたオレの視界を覆うように突然ぬっと顔を覗かせたのは、ついさっきど

こかに走り去ったはずの日下部だった。
「く、日下部⁉」
「やはりとっくに起きていて、高みの見物をしていましたか」
日下部はふっふっふ、といわくありげに笑う。
「いや、これはだな――」
「ご心配なく。そのことを責めるつもりはありません。むしろ起きてくださった方が好都合というもの――はい、笑って」
日下部は首から掛けた愛用のカメラを構えると、砂に埋まったままのオレの顔をぱちりと写す。
「あ。もしかしておまえ、わざと錯乱したふりをして……」
「もちろんです。あんなくだらない遊びに付き合っているほど、わたしはヒマではないのです」
写真を撮りながらにべもなく答える日下部。
「真実の報道のためには、時にはこういった搦手を突くことも必要なのです……さあ、取材に協力してもらえますね？」
「取材って、おまえなぁ……」
真剣勝負を繰り広げているスピカたちを前にして、日下部の行為はやっぱりズルい……そう考えると素直に取材を受ける気分じゃない。
「――オザキよ、その女の口車に乗ってはならぬ」

「⁉　そ、その声は――」
オレの視界に現われたもうひとつの影――さっき敗退したばかりの沖だった。
「姿が見えぬゆえ、もしやと思い来てみれば……やはり抜け駆けであったか」
「ちっ……」
思わぬ邪魔が入ったと、日下部は小さく舌打ちする。
「オザキよ、このような狡猾な手を使う者など無視するがいい」
「ふっ……さも自分が正義という口ぶりですが――ウソはいけませんね、生徒会長？」
「！　な、なん……だと」
日下部の思わぬツッコミに一瞬沖がたじろぐ。
「あなたもここに来た目的は、ズバリ――『抜け駆け』ではありませんか？」
「な、何を言うか！」
「スピカさんたちが戦っている隙に、ちゃっかりオザキさんを籠絡しようという作戦ではないのですか？　くっくっく……」
「ぬぬぬ……ぶ、無礼者！　おまえといっしょにするな！」
ふたりがオレの上で睨み合う。
沖と日下部、ふたりがこのまま戦えばただではすまないだろう。何より、砂に埋められたまま身動きが取れないオレとしては、精神衛生上あまりよろしくない状況だ。

唯一助けを求められそうなのはアリデッドなのだが、まだ大いびきをかいていてまったく役に立ちそうにない。
「ま、まあまあ、落ち着けってふたりとも」
「落ち着いています。わたしはそこにいる誰かさんと違っていつでも冷静です」
「おまえのは冷静とは言わん。単に神経が図太いだけだ」
オレの仲介も却って火に油を注いでしまう。
「と、とにかくだなぁ、スピカたちを出し抜いてってのは……」
「――ああ――っ！　日下部とかいちょ――⁉」
あー、ほら言わんこっちゃない。ミラに見つかってしまった。
当然スピカとガーネットの視線もオレたちに注がれる。
「アンタたち、そこで何やってんのよ！」
「も、もしかして、わたしたちが戦っている隙にオザキくんに、えっちなことを……⁉」
「うおおおーっ！　ずっこいぞ、ふたりとも――‼」
すかさず魔女三人もやってきて、オレを取り囲むように居並ぶ。
「アタシたちを共倒れにさせて、その隙にオザキをひとり占めしようなんて……アンタたちも意外とセコいのね」
スピカはあからさまに苛立った顔で日下部と沖をにらみつける。

「そーだそーだ！　ドッジボールの意味ナイじゃん！」
「あなたたちがそんな人とは思いませんでした……」
ミラとガーネットも出し抜いたふたりに疑惑の眼差しを向けていた。
「おまえたち、聞いてくれ。元はといえば、この日下部が……」
「残念ですがオザキさんはひとり。となれば早い者勝ちです」
日下部はすっかり開き直っていた。
「とにかくこのままでは埒が明かぬ。ここは今一度、オザキの所有権を賭けて勝負しようではないか」
この混乱を収拾しようと、沖が再勝負を提案する。しかし反応は冷ややかだった。
「沖さんはわたしに負けたんですから、もう口出しする資格はありません！」
「い、いや、あれは勝負が始まる前にだな……」
「――ねえ、オザキはどうなのよ？」
突然、スピカがそれまで成り行きを見守るだけだったオレに質問を投げかけた。
「オ、オレ……？」
「そうよ。結局アンタ、誰といっしょに過ごしたいの？」
「そ、そうです。ここはオザキくんの意見も聞きましょう」
「そだそだ！　キヨヒコに決めてもらおーっ！」

ようやくここにきてオレの意向が問われる――というかだな、この状況でその質問はものすごーくデンジャラスじゃないか？

「そうですね。それが一番公平でしょうね」

「うむ。沖も異存はない」

いっせいに五人の視線が首から下を砂に埋められたままのオレに注がれる。

そのどれもが「選ぶのは当然わたしでしょ？」と無言のプレッシャーを与えてくるのがはっきりわかる。

「ううっ……」

誰かひとりを選んだとしても、残りの四人から不満の声が上がるのは明らかだ。ならば一番不満の少なそうな、無難なやつを選ぶべきだろうなぁ……。

（――いやいや、そんなこと出来ないって！）

結局誰を選ぼうと大いに禍根を残すことになりそうで、オレは絶望的な気分に陥った。

「だ、だめだぁ……」

「ほーら、やっぱり選べないんでしょ？　大方そんなところだと思ってたわ」

スピカの言葉がグサリと心に突き刺さる。

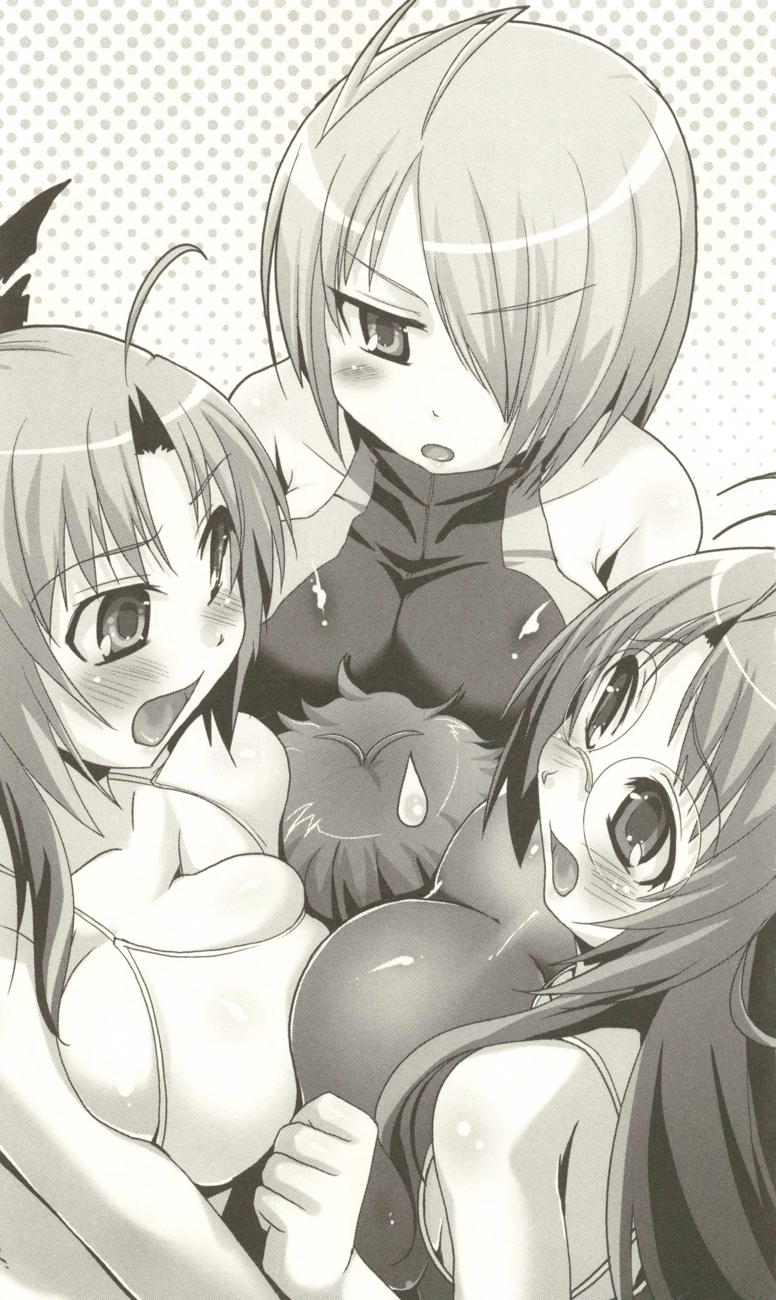
「アンタはいつでもそう。みんなにいい顔しようとして、結局中途半端じゃない」

は、はい。おっしゃるとおりです。何も出来ないままオレはうなだれるしかない。

「ちょうどいい機会だわ。アンタが本当に付き合いたいのは誰か、ここではっきりしようじゃない」
「えっ……？」
挑発的とも取れるスピカの提案に、他の四人がいっせいに声を上げた。
「アタシ、煮え切らないハンパなヤツって嫌い。付き合うにせよそうでないにせよ、白黒きっぱりカタをつけてもらったほうがすっきりするわ……みんなもそう思わない？」
場の勢いというのもあるだろうが、スピカの提案はあまりに唐突かつ大胆だった。
しかし、そんな中賛同者が現われる。
「……うむ。沖もスピカに同意する。オザキの真の心の内を聞いておきたい」
「ミラもちょっと怖いけど、本当のことは知っておきたい」
「同じく。無意味な争いをなくすためにも、オザキさんの英断を期待したいところです」
残りはガーネットただひとりとなってしまった。
ガーネットはしばらくあれこれ考え込んだ後、顔を上げてみんなに告げる
「やっぱり、わたしも知りたいです。オザキさんの本当のこと」
誰ひとりとして譲る気はないということだ。
「決まりね。みんなの意見はまとまったわ。あとはオザキ、アンタの答えを聞くだけよ」
「さあ」
「さあさあ！」

「早いところ決めてください」
「…………」
オレを取り囲むように居並ぶ五人の女の子。逃げ場はどこにもなかった。
「う、ううっ……」
これまで人生をやり直せるという特殊能力のおかげで何度となく「人生の選択」に直面してきたオレだが、今このときが一番キツい状況のように思えてきた。
（なんだこれ？　なんで？　どうしてオレがこんな針のムシロに座るような状況に追い込まれなくちゃいけないんだ……!?）
「ええい、こうなればわたしが――」
最初に動いたのは日下部。オレの頭を無理やり引っ張って、砂の中から引きずり出そうとする。
「あ痛てて！　痛いって！」
「我慢してくださいオザキさん。じきに楽になります」
強引に引き抜こうとする日下部の「メイド・イン・ジャパン」な胸が後頭部に当たる。
（お、おおっ、これは……!?）
まさに「乳枕」状態である。
「ちょ、ちょっと日下部、やめなさいよ！」
日下部を押し留めようとして、今度はスピカがオレの頭をかき抱く。

（むむっ、これまたジャストフィット……！）
まさにこれは「あの丘を越えて」。丘の向こうには桃源郷があったよ！
「ああ、スピカちゃんもそんな無理やり……」
さらにここに「オッパニア・オッパイ」ガーネットが参戦したもんだから、さあ大変。オレの首から上は三人の六つのおっぱいに翻弄され続けた。
（あ、ああ……やめてくれ……そんないっぱいのおっぱいで弄ばれたら、オ、オレの理性が……常識が……⁉）
そして次の瞬間、オレの中で何かがプツンと音を立てて切れた。
「う……うおおお……おおおおお――――っ‼」
それまでオレを抑えて来たリミッターが外れ、体中に過剰なまでの力がみなぎる。
「オ、オザキどうした⁉」
石のように重く硬くオレを拘束してきたナイスバディな砂山に幾筋もの亀裂が入る。
「おおおお……うおおおおああおおおお――――っ‼」
オレが叫ぶと同時に、首から下を覆っていた砂の拘束が弾けるように飛び散った。
「キヨヒコすげぇーっ！」
自分でも制御しきれないくらい体中に力がみなぎる。その力というか熱は、立ち上がったオレの身体のある一点に集中していた。



「ちょ、ちょっとオザキ！　アンタ、そ、それ……」
「ん、んんーっ⁉　こ、これはまた……ふ、ふひーっ⁉」
五人の視線はオレの下半身――それも股間に集中している。
「おおっ⁉」
視線のその先でオレのペニスがギンギンに硬くなり、力強く天を向いて雄々しくそそり立っていたのだ。
リミッターが切れたのは肉体だけではなかった。精神もいっしょにぶっ飛んでしまったらしい。これもリミッターがぶち切れたせいだろうか？
「ええいっ、ひとりだけなんて面倒だ！　五人まとめて相手してやるっ‼」
オレはハイテンションで宣言すると、スピカとガーネットの腕を取って砂浜に押し倒す。
「きゃっ！」
「オ、オザキくん、何を……ああっ⁉」
眼の前にある四つの丘を、パン生地をこねるように手のひらで強引にこねくり回す。
「ちょ、ちょっと待ってよオザキ！　アンタ、何考えて……」
「――おまえとやりたい。ただそれだけだ」
普段なら絶対出ないような台詞が臆面（おくめん）もなく飛び出すあたり、オレもまともじゃない。
「や、やりたいって、こんなの……いや……ああんっ！」
「お、お願いですオザキくん。もっと、もっとやさしく……ああっ⁉」

やさしく接したいのは山々だが、オレの中でたぎる制御し切れないパワーの塊がそれを許さない。水着のトップの上から円を描くようにふたりの胸をもみしだく。

「あ、ああっ……オ、オザキくん……オザキくぅん……ふああっ」

先に甘い声を漏らし始めたのはガーネットだった。水着の上からも乳首が硬く勃って来たのがよくわかる。

「あっ、こ、こんなの……イヤなのに……胸、気持ちいい……はああっ！」

スピカも眼をとろんとさせてオレの動きに身を任せていた。

「キ、キヨヒコぉ……ミ、ミラもいじって欲しいよぉ……」

「それじゃ、オレの真正面に立ってごらん」

ミラは恥ずかしそうにオレの真正面に立つ。ちょうど彼女の股間が顔の前に来た。

「いただきます！」

オレは舌を細く伸ばしてミラの股間を水着の上から愛撫する。

「ひぃあっ！　そ、そこぉっ！　んんんっ！」

砂と海の塩分でちょっとザラザラするが、かまわず舌先でミラのスリットの周囲をツンツンとつついたり、ペロンと舐めたりする。

「オ、オザキさん！　つつ、次はわたしです！　わたしとっ！」

「待て、ここは沖が先だ！」

残ったふたりも先を争うようにオレを求める。
いつの間にやら尋常でない空気がオレたちを包み込み、常識やモラルといったものを強引に剥ぎ取って狂わせる――そんな奇妙な感覚がオレたちを支配していた。
「――ああっ！　オ、オザキぃ……すごい、すごいのぉ……あああんっ！」
砂の上に横たわるスピカに覆い被さるように、オレはいきり立ったペニスを挿入している。水着もはだけ、全裸同然になっている彼女の中は熱くぬかるんでいた。
「オザキ、好き……大好きぃ……だから、もっと……ああっ！　はああんっ！」
これでもう何人目、何回目の挿入だろう。そんなことも思い出せないくらい、オレたちの狂った宴は続いていた。
どんなにみんなが求めてきても、残念ながらオレのペニスはひとつしかない。手や足を使ったとしても、それでも五人を同時に愛することは出来ない。
すると今度は「順番待ち」をしている女の子同士でも絡み始めたのだ。
「ああっ、く、日下部さん……そ、そんなこと……んふっ、んちゅ、んむっ」
「ふっふっふ……か、かわいいですよガーネットさん。こ、これは、百合な世界にハマってしまいそうです……んふうっ、んむっ」
ガーネットと日下部のキスシーンが艶めかしくて、ついつい眼を奪われる。

「か、かいちょー……胸の先、ジンジンするよぉ……」
「うむ。やはり胸の先は敏感だな、ミラ」
こっちではミラと沖の貧乳コンビがお互いのフラットな胸を乳繰り合っている。学園の生徒会連中が会長のあられもないこんな姿を見たらきっと卒倒してしまうだろう。
「あ、あんっ、もう……よそ見しないで、オザキ」
オレに組み敷かれているスピカに耳を引っ張られて、我に返る。
「他のコとえっちするのは大目に見てあげる。だから今は……こうしている間だけは、アタシのことだけを見ていて……んんっ！」
オレからの答えを聞く前に、スピカは強引に唇をキスで塞いだ。
「んっ、んむっ……ぷふぁっ……オザキ、オザキぃ……ああっ」
スピカの言うとおりだ。今は他の子のことなんか考えず、ただ真っ直ぐに眼の前でしどけない姿を見せてくれるスピカのことだけを見つめ、愛してやろう。
「ああっ！　あっ！　ま、またオザキの、大きくなったぁ……アタシの中、オザキでいっぱいなの……んんっ、あっ、はああっ！」
スピカの中のペニスがきゅうっと幾重もの襞に締め付けられ、射精を促すような電気が背筋を通って頭まで届く。
「くっ……スピカ、そろそろ……」

「う、うんっ、いいよ！　アタシの中に、オザキの熱くて濃いの、ちょうだい……んっ！　んああっ！　あはああっ！」
もう我慢できない――オレはためらうことなく、下腹部にたまっていた熱いうねりを吐き出した。
「ふああっ！　く、来るぅっ……ああ――はあああああああ―――っ!!」
ビクンビクンと何度も脈打つペニスから、熱い白濁液がスピカの中に解き放たれる。
「あ、ああ……熱い……熱いよぉ……」
オレのものを身体の奥で受け止めながらスピカは恍惚の表情を浮かべて果てた。

その後もオレと五人は入れ替わり立ち代りで愛し合い続けた。
不思議なことにオレのペニスは何回射精してもすぐに元の大きさと硬さに復活した。
ひとりひとりとやるのも面倒になって3P、4Pも当然のようにしていた。
今、砂の上に横たわるオレの股間の上にはミラが乗っている。
「ひぃああっ！　キ、キヨヒコぉ……んんっ！」
さらに顔の上ではガーネットがあそこを押し付けるように動いている。
「あ、あんっ、ああんっ！　オザキくん、そ、そこを……もっとぉ……んんっ！」
左右の手はそれぞれスピカと沖の股間を愛撫して、さらに投げ出した足の上には日下部がまたがって自分で股間を擦りつけている。

誰が誰に指示したわけでもなく、自然とこんな形になっていた。
「ああっ、キヨヒコっ！　ミラ、もうダメぇ……飛んじゃう、飛んじゃうよぉ……っ！」
ミラが切なげな声を上げている。オレもそろそろイキそうだが、ガーネットが顔の上に乗っているので返事が出来ない。
「あ、あ、ああっ！　飛んじゃう！　ミラ、飛んじゃうよぉぉ……ふあああぁ――っ!!」
ミラの身体がビクンビクンと魚のように跳ねると同時に、オレもミラの膣内に欲望の証を吐き出した。
「あ、ああ……ふあぁ……いっぱい出たよぉ……」
ミラは満足そうにつぶやくと、オレの上からするりと下りた。
（……あれ？　何だ？　股間がムズムズするぞ？）
たまっているものは全部ぶちまけたはずなのに、何かこう「残尿感」みたいなものがある。今までこんなことはなかったのに……さすがに疲れたかな？
「ん……お？　おおっ？」
オレから離れたミラが驚きの声を上げている。しかしオレの視界はガーネットの尻に塞がれていて何も見えない。
「どうしたの、ミラちゃん？」
「ガ、ガーちゃん見れ見れ！　これ見れっ！」

「えっ……こ、これは？」
ガーネットも驚きの声を上げている。いったい何が起きたんだ？
「何なのよ、いったい」
「そうだぞ。そんなに大声を上げて何があった」
「スーちゃん、かいちょー、ほれほれ、これ！」
「な、何よこれ⁉」
「め、面妖な……」
ああっ、気になる！　すっげぇ気になるじゃないか！
そうしている間にも股間のムズムズはさらに大きくなってくる。射精のように何かが湧き上がってくるような、でも射精とは何か違う未知の感覚だった。
「んんっ！　んんんっ！」
我慢しきれずガーネットの尻の下から叫ぶ。
「ガーネットさん、オザキさんがどいてほしいようですよ？」
「あ……ご、ごめんなさいオザキくん！」
日下部の指摘で慌ててガーネットが離れると、ようやく視界が開けた。
「どうしたんだよミラ」
「キヨヒコ、これこれ」

ミラが指差したのは、射精したばかりなのに天を向いているオレのペニスだった。
「……へ？」
そのペニスの先端から、赤い半円状のものがぽっかり顔を覗かせていた。
「ちち、血――!?」
「いや、血ではありませんね。何かこう……固体のようなものです」
みんなが恐る恐る遠巻きに見ている中、日下部とミラはペニスに顔を近づけ、つぶさに観察している。
「な、なんなんだこりゃ……うっ!?」
ムズムズがさらに酷くなり、何かが出口を求めてペニスから飛び出すような感覚に陥る。
(も、もしかして、この赤いのが……!?)
「む……見ろ、これは――」
ペニスの先端の赤い塊はどんどん大きくなり、そして――。
「あ……」
みんなが見ている前で赤い塊はビー玉くらいの大きさの玉となり、ペニスの先端から腹の上にころんと転がり落ちた。
「あ、赤い球……？」
ペニスの先端から今にも転げ落ちそうな赤い球を見て、たちまちスピカの顔面が蒼白になった。

「ア、アタシ聞いたことある……男の人って、セックスをやりすぎると『腎虚(じんきょ)』って病気になって、あそこから赤い球が出て『打ち止め』になって……」
「そ、それでどーなる⁉」
「最後は……そのまま死んじゃうんだって……」
今まさにオレのペニスから出てきたのも、赤い球――と、いうことは……。
「――――⁉」
次の瞬間、意識がふっと遠退き、眼の前に見えるものすべてが白く変わっていく。
(お、おい、待てよ――)
スピカや沖の叫ぶ声が聞こえたが、それも遠くに消えていく。
(な、なんだ……よ……こんなの、あり、か……よ……)
すべてが白く消えてゆく中、ペニスから出た球の赤い色だけがやけに眼に残った。

×××

「……というわけで、えろえろなうんこマンは『じんきょ』で死んでしまいまちた」
やっぱりオレは死んだようだ。
眼の前のテレビの中では、神様(幼女)がいつものようにオレを出迎えていた。

「やっぱり腎虚なの⁉　つーか、やりすぎると赤い球が出るって迷信じゃねーの⁉」
「魔法（リネア）が存在する世界で迷信も何もないでち」
いや、それはたしかにそうなんだけれどさ。でも、いくらなんでもやりすぎて打ち止めで死ぬって最期はなぁ……。
「えろえろに走ったうんこマンのじごーじとくでちよ。反省するでち」
そうだな。さすがに手当たり次第にヤっちゃうってのは、やっぱりハッピーエンドにはならないのがお約束だよな。
「よし、反省した。だから早いところやり直させてくれ、神様！」
「本当に反省したでちか？」
「ああ、もちろん」
悪いところがあれば素直に反省する。この謙虚な姿勢を忘れちゃダメだよな、うん。
「じゃあ聞くでちが、あの五人の中でうんこマンは本当は誰が好きなんでちか？」
「……え？」
神様（幼女）からいきなり突きつけられた問い掛けに、オレは固まってしまう。
「反省したからには、あの中からひとりだけをえらぶんでちよね？　誰でちか？」
「そ、それは……」
困った。誰かひとりだけなんて、まったく決めていないのだ。

「そ、それは……」
オレの心中を見透かしているかのように、神様（幼女）はやけにニヤニヤしながら答えを待っている。
「さあ、教えてくだちゃい、うんこマン？」
「――やっぱ、後で考える！　今はとにかく、リベンジだ！」
オレは人生をやり直す扉に向かって走り出していた。
「あ、ズルいでちよ！　誰が好きなのか聞かせるでち！」
ゴメン、神様。でも今は悩んでいるより、前へ前へと走っていたいんだ。
「行くぜ――うおおおおおおお――――っ!!」
そしてオレは、新たな扉を押し開けた。

【おしまい】

かおす：へっど
If you are God, and the delusion becomes reality.
About what kind of the noids you get?
Is it the sensual world? The despotic society?
The destructive sanctions?
Or...
『CHAOS:HEAD』のキャラたちが恋にゲームに暴走中!?
こいつはちょっと普通じゃない!!
表紙：南向春風
著者：糸井健一 小形聖史
5pb./ニトロプラス presents
なごみ文庫
好評発売中
各定価（六四〇円＋税）
ブラッドチューン
BLOOD TUNE The NOVELIZATION
話題のアニメ内アニメが待望の小説化。『知らないなんて言わせないぞ、ぼけなす♪』

まだリベンジの足りない
あなたに贈るSMG

凄く真面目な外伝
Sugoku Majimena Gaiden
ニトロプラス劇場

なごみ文庫
ニトロプラス劇場
SMG ―凄く真面目な外伝―
著者：野山風一郎 挿画：Sayori 原作：Nitroplus

ハーヴェストノヴェルズをお買い上げいただきありがとうございました。
この本を読んでのご意見ご感想をお待ちしております。

〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町1-8-3　長谷川ビル1F
ハーヴェスト出版編集部「佐々宮ちるだ先生」係

ニトロプラス劇場

スマガ ― Adult Channel ―

2009年6月1日　初版発行

原　作 ―― Nitroplus
著　者 ―― 佐々宮ちるだ
発行人 ―― 河出岩夫
発行所 ―― 有限会社ハーヴェスト出版
〒101-0024　東京都千代田区神田和泉町1-8-3
長谷川ビル1F
TEL. 03-3865-7778
FAX. 03-3865-7779
発　売 ―― 株式会社星雲社
〒112-0012　東京都文京区大塚3-21-10
TEL. 03-3947-1021
FAX. 03-3947-1617
印　刷 ―― 中央精版印刷株式会社

©2008 Nitroplus ©Tiruda Sasamiya　2009 Printed in Japan
乱丁・落丁本は、おとりかえいたします。

ISBN978-4-434-13145-5

HARVEST NOVELS

ニトロプラス劇場

スマガ －Adult Channel－

原作 Nitroplus

著者 佐々宮ちるだ

挿画 こうきくう

ハーヴェスト

HARVEST NOVELS

HARVEST NOVELS

最新情報はハーヴェスト出版ホームページ //www.harvest-inc.jp で！

HARVEST NOVELS

つよきす2学期
《すいーと・かぶせる》

原作◆きゃんでぃそふと　著者◆克火零

「つよきす２学期」からパラレルえっちな創作短編集が登場。裸エプロンや女医プレイなど、乙女さん、なごみん、カニっち、瀬麗武のシチュエーション＆コスチュームにこだわった厳選４話を大収録！

7月発売予定！

予価880円＋税

7月発売予定！

予価880円＋税

祝福のカンパネラ
〈カリーナ編〉（仮）

原作◆ういんどみるOASIS 著者◆御門智、他

「祝福のカンパネラ」待望の小説が登場。今回はレスターに恋するお嬢様カリーナと、オトボケ双子サルサ＆リトスのトルティア姉妹。収穫祭を間近に控えたエルタリア。クラン「ＯＡＳＩＳ」は今日も大騒ぎ！

＊カバーデザインなどは変更になることがあります。

佐々宮ちるだ

眼鏡とメイドさんと三つ編みと巨乳とプラネタリウムとおいしいラーメンと泣ける映画とカメラを持って散歩とひなたぼっこと昼寝をこよなく愛するおひつじ座・O型。前世はきっとネコだったに違いないともっぱらのウワサ。

http://blog5.fc2.com/sasamiya/

こうきくう

ニトロにハマってはや幾年…。しがないフリーグラフィッカーで１ファンのボクがよもやニトロ様の作品関連でエロイラスト絵師デビューを飾るとは……コレは夢か?!

http://kou-k.sakura.ne.jp/moon/

HARVEST NOVELS

ニトロプラス劇場 スマガ －Adult Channel－

原作 Nitroplus
著者 佐々宮ちるだ
挿画 こうきくう

ハーヴェスト

9784434131455
1920293008806
ISBN978-4-434-13145-5
C0293 ¥880E
定価（本体880円+税）
発行/ハーヴェスト出版
発売/星雲社